

國立臺灣大學文學學院日本語文學系

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master's Thesis



坂口露子の作品における蕃地の表象

—蕃地小説の人物像を通して—

Representations of indigenous land in Sakaguchi Reiko's

Novels: Focusing on the portrayal of characters

蔡知穎

Jr-Ying Tsai

指導教授：洪瑟君 博士

Advisor: Se-Chun Hung, Ph.D.

中華民國 114 年 7 月

July 2025

謝辭



首先，想感謝指導教授洪瑟君老師，給予我許多關於研究方向以及邏輯思考上的建議。老師從不吝提點，縱使偶有不同看法時也會仔細傾聽我的想法，在我不太會表達的時候也會耐心聆聽，幫我釐清自己的想法並給予指導，非常感謝老師在百忙之中仍願細心指導，至深銘感。同時，也要感謝吳佩珍教授及阮文雅教授，願意擔任提案與口試審查委員，審閱論文後並給予許多新的見解，讓我獲益良多，不勝感激。此外，也感謝系上朱秋而老師、曹景惠老師、林慧君老師、田世民老師、黃鈺涵老師、林立萍老師等老師們的課程與提點，因為老師們在課堂上的教導，才讓我在一年級時便學會寫論文的模式，感激不盡。另外，也感謝似鳥國際獎學財團的資助，讓北漂生活的我不用太擔心生活開銷。

接著想感謝研究所的同學們，謝謝敬文、青青、慈均三位好姐妹們常常一起吃飯或出去散心；謝謝秉承好同窗提供許多好書；謝謝禹錫總是願意幫忙解決各種疑難雜症；謝謝學長沅華、晨暉偶爾會一起聊天；謝謝學妹愛實幫忙修正論文中的日文，也常在閒暇時刻一起吃飯。此外，也感謝讀賣新聞提供的工讀機會，讓我在寫論文之餘可以無後顧之憂，很感謝主管們常帶我去吃飯，讓我從不孤單。感謝大家讓我在研究之路上從未感到孤獨，很開心有你們這群一起奮鬥的好夥伴。另外，謝謝文藻的朋友們常在我崩潰時給予鼓勵，特別感謝在日本的慧婷，百忙之中還去國會圖書館幫忙找文獻並郵寄，不勝感激。也謝謝阿蓓常給我關於寫論文的建議以及幫忙修改中文摘要。

最後，我要感謝最愛的家人。謝謝我的母親李冠蓁女士，給予許多生活上的支持與鼓勵，以及無止盡的愛與關懷，並始終相信我的決定。謝謝我的父親蔡承祐先生，總是默默付出並把最好的都留給我們。因為有你們當我的避風港，我才能一直安心在外面闖蕩。也謝謝我的哥哥蔡翔宇先生與嫂嫂李詠涵女士，因為有你們我回到家中總是很熱鬧不孤單。謝謝我生命中的所有貴人們，我愛你們。

摘要

坂口禪子是台灣日據時期具有代表性的女性作家之一。她曾赴「蕃地」（本文所稱「蕃地」，係沿用小說中的歷史用語）與原住民共同生活，並以其經驗為靈感在戰後創作多部以蕃地為題材的小說，其中不只關於霧社事件的作品，也從多元的角度去描寫蕃地，呈現其對蕃地社會的觀察與想像。然而，先行研究多集中於個別作品，缺乏對其所有蕃地小說的整體探討。因此，本論文將分析坂口禪子所有的蕃地小說，聚焦於作品中「虛實交錯」的敘事手法，探討其在作品中呈現的蕃地表象。

本論文分為三章：第一章分析〈時計草〉與〈蕃地〉對混血兒的描寫，發現坂口禪子透過戰後〈蕃地〉中的虛構與現實的交錯描寫，回應〈時計草〉因戰時言論限制而無法正面描寫的殖民批判；第二章以〈霧社〉與〈達道・莫那之死〉為對象，分析出坂口禪子透過角色的虛構描寫，揭示殖民地下的個人悲劇與霧社事件的必然性；最後，第三章從性別視角出發，分析〈比基的故事〉、〈蕃地之女—露比的故事〉、〈蕃地的夏娃〉、〈蕃婦羅婆的故事〉四部小說中，坂口禪子透過虛構人物呈現出殖民地中的性別壓迫與女性主體性的追求，並藉原住民女性開放的形象與文化記號，反思戰後日本理想的被動女性形象。

綜上所述，本論文透過分析坂口禪子的蕃地小說，發現其在各主題中不僅再現了殖民地支配對於殖民者與被殖民者所造成的壓迫，也呈現出蕃地的表象不止是殖民地，更是人們懷抱情感、經歷掙扎與展現主體性的空間。特別是在描寫非歷史人物的作品中，發現到坂口禪子藉由殖民與性別的權力關係，進一步闡述戰後日本社會中的性別議題。

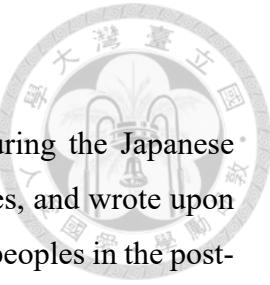
關鍵詞：坂口禪子、虛構、原住民、混血兒、霧社事件、社會性別概念、歷史書寫

Abstract

Sakaguchi Reiko was one of the representative female writers during the Japanese colonial period in Taiwan. She had been lived with indigenous Peoples, and wrote upon these experiences as inspiration for novels themed around indigenous peoples in the post-war period. These works include not only about “Wushe Incident”, but also depict indigenous land from multiple perspectives, presenting her observations and imagination of indigenous society. However, previous studies have focused on a few works, and there has been no research of all her indigenous fiction. Therefore, this thesis analyzes all of Sakaguchi Reiko's indigenous novels, focusing on the narrative technique of “interweaving fact and fiction” in the works, and exploring the representation of indigenous land presented in her literature.

This thesis is divided into three chapters: In Chapter One, it discusses portrayal of mixed race children in “Tokei-gusa” and “Banchi”, discovering that Sakaguchi Reiko through the interweaving of fact and fiction in the post-war work “Banchi”, responds to the critique of colonial which could not be expressed in "Tokei-gusa" due to speech restrictions in wartime. In Chapter Two, it focuses in “Musha” and “The Death of Tadao Mona”, analyzing how Sakaguchi Reiko reveals individual tragedies under colonial rule and the inevitability of the Wushe Incident through fictional character portrayals. Finally, Chapter Three analyzes “The Story of Bikki”, “Woman of Banchi: The Story of Ruby”, “Eve of Banchi”, and “The Story of Indigenous Woman Ropou” from a gender perspective. This chapter examines how Sakaguchi Reiko presents gender oppression in colonial territories and the pursuit of female subjectivity through fictional characters, while using the open imagery and cultural symbols of indigenous women to reflect upon the ideal of passive femininity in post-war Japan.

The results of the analysis all of Sakaguchi Reiko's indigenous novels, this thesis discovers that across these themes, Sakaguchi Reiko not only represents the oppression caused by colonial domination upon both colonizers and the colonized, but also presents the representation of indigenous land as more than mere colonial spaces—It is a space where people can demonstrate subjectivity. Particularly in works depicting non-historical characters, the thesis finds that Sakaguchi Reiko further elaborates on gender issues in post-war Japanese society through the relationships between colonialism and gender.



Keywords: Sakaguchi Reiko, fiction, indigenous peoples, mixed race, Wushe Incident, gender, historical writing



要旨



坂口禪子は日本統治時代の台湾で代表的な女性作家の一人であり、自ら「蕃地」（本論文にあたって、小説に見られる歴史的用語として使用する）に赴いて原住民と生活した経験がある。戦後、坂口禪子は蕃地での経験に基づいて数々の蕃地小説を執筆し、霧社事件関連の小説だけでなく、多角的な視点を通して蕃地を書き出している。ところが、先行研究は主に一つか二つの作品に注目し、管見の限り、すべての蕃地小説を対象とした研究がまだない。そのため、本論文は混血児、霧社事件、ジェンダーなどを主題とする坂口禪子の全ての蕃地小説を対象として、作品における「虚実混交」の創作手法に注目し、坂口禪子の蕃地の表象を明らかにする。

まず、第1章では「時計草」と「蕃地」における混血児の描写を分析した。戦時に言論統制により〈時計草〉で表現できなかった植民地批判が、戦後の〈蕃地〉における虚実混交の描写を通して浮き彫りになったと論じた。第2章では、「霧社」と「タダオ・モーナの死」を中心に考察し、虚構の人物像と心理描写を通して、植民地における個々の悲劇が霧社事件へ至る必然性を書き出していると論じた。第3章では、ジェンダーの視点を通して「ビッキの話」、「蕃地の女一ルピの話」、「蕃婦ロポウの話」、「蕃地のイヴ」の四つの小説について考察した。結果として、虚構の人物像を通して、坂口禪子は植民地におけるジェンダーの抑圧と女性の主体性の可能性を書いたとともに、原住民女性の能動的な表象と原住民の文化を通じて、戦後日本社会における理想的な女性像を批判していると論じた。

総じて言えば、坂口禪子の全蕃地小説を考察した結果、各主題から植民地支配が植民者と被植民者にもたらした抑圧が見られるとともに、蕃地の表象が単なる植民地だけではなく、人々が愛情や葛藤を抱く空間としても書かれていることが明らかとなった。なお、歴史人物を主体としない作品では、坂口禪子が植民地とジェンダーの力学、蕃地ならではの文化や表象を通じて、戦後日本社会におけるジェンダーの問題を指摘していると考えられる。

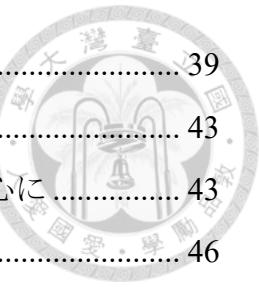
キーワード：坂口禪子、虚構、原住民、混血児、霧社事件、ジェンダー、歴史記述



目次



謝辭	I
摘要	II
ABSTRACT	III
要旨	V
目次	VII
序章	1
第1節 研究動機	1
1. 坂口禪子と蕃地の出会い	1
2. 戦後の創作動機	4
第2節 先行研究	5
1. 作品「時計草」「蕃地」に関する研究	6
2. 作品における霧社事件—「霧社」「タダオの死」	7
3. ジェンダーの視点から見た坂口禪子の作品	9
第3節 問題意識・研究方法及び研究範囲	11
1. 問題意識	11
2. 研究方法及び研究範囲	12
第4節 論文構成	15
第1章 混血児と蕃地の表象—「時計草」と「蕃地」を中心に	19
第1節 優生思想とは	19
第2節 「時計草」—混血児と皇民化協力	21
第3節 「蕃地」—混血児と皇民化批判	30
1. 林田純に見る純血論の論述	30
2. 純血論による植民地支配の破綻	33
第4節 結び	36
第2章 霧社事件と蕃地の表象—「霧社」と「タダオ・モーナの死」を中心に	38



第1節 霧社事件の歴史	39
第2節 「霧社」—抑圧された理蕃警察と原住民	43
1. 理蕃警察の表象—佐塚と花岡兄弟の「父子関係」を中心に	43
2. 理蕃警察のもう一つの表象—政略結婚を通して	46
第3節 「タダオ・モーナの死」—撫育と同化政策の限界	51
1. 理蕃警察と撫育—樺沢とタダオの「父子関係」を通して	51
2. 撫育政策のもう一人の犠牲者—花岡一郎を中心に	55
3. 膽懾がもたらした結果—ピホ・サッポを中心に	57
第4節 結び	59
 第3章 ジェンダーと蕃地の表象—植民地支配と性差を通して	61
第1節 「ビッキの話」における男性像—ビッキと野村を中心に	62
1. ビッキの男性像—男性性の喪失の表象	62
2. 野村の男性像—敗戦による立場の転換	65
第2節 「蕃地の女—ルピの話」における女性像—ルピとテワスを中心に	68
1. ルピの女性像—強いられた女性の性役割	68
2. テワスの女性像—生き延びた女性	73
3. 分断された女性—ルピとテワスを通して	75
第3節 「蕃地のイヴ」における女性像—ルピとハバオを中心に	76
1. ルピ・ナガイの女性像—産む性への抵抗	76
2. ハバオの女性像—娘の選択	80
第4節 「蕃婦ロポウの話」における女性と性欲—ハツエを中心に	82
1. ハツエにおける性欲—未亡人の思い	82
2. 「私」とハツエの合作の意味	85
第5節 結び	86
 終章	89
 テキスト及び参考文献	94

序章



第1節 研究動機

1. 坂口禪子と蕃地¹の出会い

坂口禪子（1914-2007）は大正三年（1914）熊本県に生まれ、旧姓は山本であった。大正十二年（1923）に父の山本慶太郎が八代町町長となり²、山本家の生活は裕福であったが、母マキが作った家風は「人間、一切平等」のため、山本家は使用人に対しても丁寧に接した。その頃母からの教訓である「人をあなどらず、人におこらず」が坂口の「人を見る眼の土台をなしてきた」³。昭和十三年（1938）に「傷心の自分を埋めようと決心」したため、単身で台湾へ渡り、台中州の小学校で勤務し始め、九月に小学校の研修旅行で初めて霧社へ行った⁴。そこで後の作品「時計草」と「蕃地」の主人公のモデルである下山一と出会い、同行者から下山一の複雑な生い立ちを聞き、坂口は「漠然と、下山先生の面影を追いながら、気の毒なひとというものは、複雑なものだ」と思った⁵。また、霧社事件の記念碑を見に行った時、坂口は霧社事件に関与した原住民の気持ちを慮り、「彼らに、勝利者の満足があったか。歓喜があったか。否。次の日から迫ってくる迫害を、
彼らは予期しないではなかった。山地に孤立する自分たちの生活を、予想できな
いほど、愚かではなかった（下線部は筆者より、以下同）」と述べ⁶、原住民の立場に立って事件について考えた。そして蕃社であるパーラン社を訪れた時、パーラン社の住民達は分室の指示通りに旅客から身を隠したということについて、坂口は「身をかくさねばならないなんて—私はそれだけで、霧社事件の原因が一

¹ 本論文にあたって、「蕃人」「蕃地」などは歴史的名詞としてそのまま使用し、引用文中の現代では不適切な表現も史料としてそのまま残してあることも、ご了承いただきたい。

² 中島利郎（1998）「坂口禪子作品解説」『日本統治期台灣文学日本人作家作品集』、緑蔭書房、p.567

³ 坂口禪子（1978）「“蕃地”との関わり」『霧社—坂口禪子作品集②』、コルベ出版社、p.247

⁴ 中島利郎（1998）では、坂口が1935年に台湾に初めて傷心旅行で行ったと書いてあるが、垂水千恵（1995）『台湾の日本語文学—日本統治時代の作家たち—』によると、「坂口は一九九三年五月九日のインタビューでは、一九三五年九月に台湾に渡ったと答えているが、一九九四年七月六日のインタビューではそれを否定している」である。また、坂口は「“蕃地”との関わり」で、1938年の出来事と一緒に「傷心の自分」を言及しているため、本稿は1938年にした。

⁵ 同注3前掲書、p.248。また、p.301では、「『蕃地』のモデルになった下山警部補の息子さんは…」とモデルについて語っている。

⁶ 同前注、p.254

つわかったような気で、胸にひびく痛さがあった」⁷と日本人のやり方を不服に思いながら、原住民の境遇を同情していた。

昭和十四年（1939）坂口は病気のため一度熊本へ帰ったが、坂口貴敏と結婚するためには家族の反対を顧みず翌年に再び台湾に渡った。歌人であった貴敏は坂口禪子に文章を書くことを勧め、彼女は『台灣新聞』に「白き路」「満潮」「破壊」（1940）などの作品を投稿し始めた⁸。移民小説「黒土」（1940）が「台灣放送局十周年文芸」に当選したのをきっかけに、『台灣時報』からの執筆依頼を受け、皇民化政策を揶揄する作品「鄭一家」（1941）を発表した。そして、「鄭一家」がプロレタリア作家である楊達に高く評価され、楊達の勧めで坂口禪子は『台灣文学』で投稿し始めた⁹。始めに「時計草」（1942）を発表したが、政府から理蕃政策を批判したと思われたため、「戦時下の検閲にふれ、最初と最後の二頁だけで、そっくり原稿用紙百枚分の頁が削除され」ることになった¹⁰。このことについて、坂口は「憤りこそ、文学の基盤だ」¹¹と自分の創作動機を主張していた。そして、昭和十八年（1943）に刊行された単行本『鄭一家』には「時計草」が無事に収録されているが、最初と最後の二頁を見れば、改作されていることがわかる。この間にも「灯」「曙光」「遺書」（1943）など、戦時下の国民を題材にした作品を書き続けていた。

昭和二十年（1945）四月、坂口は夫や台湾人から日本が敗戦する予測を聞き、さらに楊達から「こんどは山へ疎開して、蕃人の生活をみておきなさい。それが、あなたの日本へ持ち帰る唯一の財産だ」¹²とアドバイスをもらったため、蕃地へ赴くことを決意した。坂口禪子にとって、楊達の言葉は躊躇う彼女に「勇気づけ、意味づけしようしてくれた」¹³ものだが、本当に蕃地へ行こうと思ったのは、山地の人々の生活に興味があったからである。つまり、坂口は平地にいながら、すでに蕃地に対して好奇心を持っており、さらに自分の目でその生活を確かめ

⁷ 同前注、p.255

⁸ 同注2 前掲書、p.572

⁹ 垂水千恵（1995）「六章　台灣文壇の中の日本人—坂口禪子と台湾人作家」『台灣の日本語文学—日本統治時代の作家たち—』、五柳書院、p.134

¹⁰ 同注3 前掲書、p.257

¹¹ 同前注、p.257

¹² 同注3 前掲書、p.262

¹³ 同前注、p.263

たいと思っていた。こうして、坂口一家は昭和二十年（1945）四月から昭和二十一年（1946）一月までの終戦をはさんだ10ヶ月間、能高郡蕃地中原に疎開した¹⁴。坂口は中原で大石フミ、佐田フミ、川中島の中西サツキなどの原住民達と懇意になり、歌を教えたり一緒に踊ったりするほどの仲になった。終戦後、彼女は中原で国民政府の接收に立ち合って、その後日本へ引き揚げた¹⁵。引き揚げ直後、坂口は熊本の同人誌で作品を発表し、1951年頃に丹羽文雄に私淑し、同人誌『文学者』に参加した。それ以降、「蕃地」中原での経験を題材にした小説を次々と発表した。最初に発表したのは障害のある原住民男性を描いた「ビッキの話」（1953）である。また、同年に発表した「蕃地」（1953）は第3回新潮社文学賞を受賞した¹⁶。1954年に刊行した単行本『蕃地』には、「ビッキの話」と「蕃地」の他に「霧社」（1954）が収録されている。以降も「蕃地の女ルピの話」（1956）（以下「ルピの話」と表記）などの蕃地小説を書き続け、「蕃地作家」と呼ばれるようになった。1957年に夫の急逝以降、生活苦によって一時筆を擱いたが、1960年に発表した「蕃婦ロポウの話」が第44回芥川賞の候補となった。1961年に刊行した単行本『蕃婦ロポウの話』には、「タダオ・モーナの死」（以下「タダオの死」と表記）、「蕃地のイヴ」が収録されている¹⁷。

以上をまとめると、坂口は最初の霧社研修の時から、被植民者である原住民の立場に立ち、彼らの境遇を理解しようと努め、戦時下における政府の検閲を恐れながらも、理蕃政策などの植民地政策に対する「怒り」をもって文学創作に励んだ。また、当時は危険とされていた蕃地に赴き、そこで生活を確かめて、蕃社の人々と友人になった。さらに、坂口は引き揚げ後も次々と「蕃地」を題材にした小説を書き続けた。このことから、中原での生活経験は坂口の戦後の文学創作に大きな影響を与えていていることが窺える。実際に蕃地での生活経験があり、戦後も植民地での暮らしを書き続けた坂口は、戦後の植民地文学を研究する重要な

¹⁴ 同注2前掲書、p.576

¹⁵ 同注3前掲書、p.282

¹⁶ 小笠原淳（2015）「坂口樟子の台湾蕃地小説とその系譜：戦中と戦後を通して」、『日本台湾学会報』、p.168

¹⁷ 楠井清文（2014）「坂口樟子「蕃地」小説の世界—熊本時代の執筆活動を中心に—」、『論究日本文学第100期』、p.155-156

手掛かりとなっている。これらの理由から、筆者は坂口禪子の研究に取り組むことにした。



2. 戦後の創作動機

戦後の創作に大きな影響を与えた蕃地について、坂口は以下のように語っている。

まず私にとってそれ（筆者注：蕃地）は、東京の練馬、とか、大阪の新地というような、固有名詞である。しかし私は、「蕃地」という時、「ふるさと」といっているような、なつかしさを心にぬくくたたえている。¹⁸

坂口にとって、「蕃地」という言葉は差別用語ではなく、地名のような固有名詞であり、自分の故郷を指す言葉でもある。そこで生活した人々に対して、彼女は「故郷の人々に抱くと同じような愛情を持っている。そしてまた、それよりも深く罪を意識している」と語った¹⁹。蕃地は元々原住民が住む土地であるが、総督府が樟腦などの資源を得るために、蕃地を特別行政区として理蕃警察に大きな権限を委ねた。また、総督府は土地収奪のため、「集団移住」を実施し、原住民を先祖伝来の土地から追い出した²⁰。実際に坂口が生活した蕃地中原は霧社事件の「味方蕃」であるパーラン社の移住地であった²¹。一方で、霧社事件の「反抗蕃」の生き残りが移住させられたのは、隣の蕃社川中島であった。坂口は中原にも川中島にも知人がいたにも関わらず、霧社事件について誰一人も語ってくれなかつたため、当時の生活経験に基づいて、「群盲、象をなでる」ように歴史の一部を彼女なりに再構成した²²。こうして、坂口は中原での見聞に基づき、知り合いをモデルにして作品を描き続けていた。

また、坂口は小説の創作手法について、随筆「事実と真実」にて、以下のように述べている。

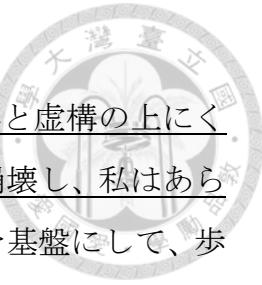
¹⁸ 同注3前掲書、p.238

¹⁹ 坂口禪子（1961）「蕃地作者のメモ」『文学者』第4巻第4号、p.94

²⁰ 近藤正己（1992）「台湾総督府の「理蕃」体制と霧社事件」『近代日本と植民地2 帝国統治の構造』、岩波書店、p.39

²¹ 坂口禪子（1969）「一九四五年の彼ら—霧社の思い出—」『中国』第69号、p.41

²² 同前注3、p.239



私は、ルポルタルジュ文学を提唱し実験した頃、小説は事実と虚構の上にくみたてられた真実だ、と主張した。しかし、私の小説観は崩壊し、私はあらためて、小説とは、虚構の上にたった真実だ、という主観を基盤にして、歩みだそうとしている。²³

上記の引用文について、小笠原淳（2015）は坂口が「疎開先で知り合った実在の人物・体験・余話を戦後の日本で再構築して、虚実を混淆させながら「蕃地の物語」を創作していった」²⁴と指摘している。つまり、坂口は小説を書く際に、事実以外に虚構を作り出し、そこから自分の中の真実を表現するという「虚実混交」の手法を使っている。では、なぜこのような手法を使って蕃地の物語を再構成するのだろうか。「虚実混交」の手法を通して、どのような創作意図が見られるのか。そのため、本論文では坂口禪子の蕃地小説における実話と虚構について考察し、それによって現れた蕃地の表象を明らかにしたい。

第2節 先行研究

ポスト・コロニアリズムの風潮に伴い、坂口禪子のような植民地での生活経験を持っている作家は、1990年代から徐々に研究者の注目を浴び始めた。垂水千恵（1995）は坂口とのインタビューを通して、「時計草」の改作の有無をめぐつて考察した²⁵。河原功（1997）は坂口の作品について、霧社事件や高砂族を文学面で考える場合に欠かせないものだと評価したが、作中における理蕃政策に対する批判が弱く、台湾生活への追憶になりがちだと指摘した²⁶。同年、姚巧梅（1997）は「鄭一家」と「蕃地」を簡潔に紹介した上で、このようなルポルタージュ文学は貴重な時代記録だと坂口研究の重要さを述べた²⁷。また、中島利朗・河原功（1998）は「鄭一家」「灯」「時計草」などの作品をまとめて出版し、さらに、これらの作品を通して、中島利朗は坂口の「支配民族の眼で本島人や『蕃

²³ 坂口禪子（1960）「事実と真実」『詩と真実』第130号、p.21

²⁴ 同注16前掲論文、p.176

²⁵ 同注9前掲書、p.135-146

²⁶ 河原功（1997）「日本文学に現れた霧社蜂起事件」『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点—』、研文出版、P.92-98

²⁷ 姚巧梅（1997）「坂口禪子と台湾」『曙光』(8)、p.96-102

地』人を見なかった』ことを高く評価した²⁸。以上のように、1990年代の研究者は主に坂口禪子の作品の重要さと独特さを提唱している。そして、2000年代以降、坂口禪子に関する研究は徐々に増加している。本研究では、近年行われてきた坂口禪子の先行研究を大まかに3種類に分けて検討し、先行研究においてまだ提起されていない部分を提示していきたい²⁹。

1. 作品「時計草」「蕃地」に関する研究

坂口禪子の蕃地小説に関する先行研究では、「時計草」や「蕃地」を中心に考察するものが最も多い。王曉芸（2001）は小説「破壊」をはじめ、坂口の作品には彼女の「血を純粋に保つという無垢の美を求めようとした」姿勢が見られる述べた。このような姿勢は「時計草」に反映され、坂口が皇民意識を持っているからこそ、「混血（劣性救済）を一つの統治手段」として提唱していると論じた³⁰。同年、星名宏修（2001）は「時計草」に表現された優生思想を分析し、戦時下の優生学論述を踏まえて、作品から『高砂族』は「『常に低い文化しか持たぬ民族』、『何等民族的な歴史を持たない民族』であって、『文化人』である日本人には『彼等の手をとつてのばしてやらねばならぬ』という傲慢な『使命感』」が読み取れると述べ、坂口が果たして差別のない目で蕃地小説を書いたのかという問題提起を出した³¹。更に、呉佩珍（2011）も1940年代の優生思想の背景を踏まえて、皇民化時期の文学作品は「純血論」と「同化政策」の互角の場となっていると述べた。その中でも、「時計草」は「純血論」を中心的な思想としている作品だと論じた³²。

なお、林慧君（2006）は「鄭一家」と「時計草」におけるアイデンティティ問題を中心に、「皇民鍊成」「政略結婚」「混血」の三つのテーマを通して、坂口

²⁸ 同注2前掲書、p.557

²⁹ 以下の分類は蕃地小説を含む先行研究に関するものであり、坂口の移民小説などに関する研究は本論文では除外される。

³⁰ 王曉芸（2001）「坂口禪子の『時計草』を中心に—異民族への協力」『天理臺灣學報年報』10、p.122-123

³¹ 星名宏修（2001）「『血液』の政治学：台湾『皇民化期文学』を読む」『日本東洋文化論集』7、p.25-26

³² 吳佩珍（2011）「血液的『曖昧線』—台灣皇民化文學中「血」的表象與日本近代優生學論述」『台灣文學研究學報』13、p.239（日本語翻訳は筆者より、以下同）

が客観的な目で創作したかどうかを考察した³³。結果として、坂口はアイデンティティ問題の核心に触れる際に、「八紘一宇」の精神に集約し、植民者の視点から書いたのだが、両作品とも戦中に描かれた小説のため、客観的な視点から創作するには制限があると述べた³⁴。また、楠井清文（2014）は戦後坂口が『熊本日日新聞』『西日本新聞』で掲載したエッセイを踏まえて作品を分析し、「坂口の〈蕃地〉小説は『今日の私の問題』を介して植民地支配下の原住民を描くものだった」と論じた³⁵。特に「蕃地」が出版された時期の社会背景を踏まえて、坂口が戦後において混血児の課題を書く意味を考察した。小笠原淳（2015）は坂口直筆の自伝小説や随筆、または未発表小説「樹靈」を通して、戦中から戦後の坂口の「蕃地小説」を分析し、「時計草」における戦争協力の筆致は当時の検閲を通すためのカモフラージュかもしれないが、やはり坂口は理蕃警察の功績を肯定に捉えていると論じた³⁶。なお、彭妍蓁（2010）は「蕃地」の同時代評を取り上げ、「蕃地」が評価されたのは、「複雑で特殊な時代や社会を背景に描かれている」からだと指摘した一方、小説の主人公とそのモデルである下山一の異同を明らかにした³⁷。

以上のように、「時計草」と「蕃地」に関する先行研究は、主に作品単体に注目しているが、10年後に同じ題材とモデルを扱って「蕃地」を書いた意図に関する研究は、管見の限りまだない。そのため、本論文では「時計草」と「蕃地」について考察し、同じ主題を通して、戦時中と戦後における坂口が見た蕃地の表象の違いを明らかにする。

2. 作品における霧社事件—「霧社」「タダオの死」

1954年に出版した「霧社」は霧社事件を扱った作品である。河原功（1997）は坂口が中原での生活経験をもとに、作中に詳しい人間関係を書き出しているが、「総督府の『理蕃政策』そのものへの切り込みには、やはり物足りなさを覺

³³ 林慧君（2006）「坂口禿子小説人物の身分認同一以鄭一家、時計草為中心」『台灣文學學報第8期』、p.125

³⁴ 同前注、p.144

³⁵ 同注17前掲論文、p.168

³⁶ 同注16前掲論文、p.171

³⁷ 彭妍蓁（2010）「坂口禿子「蕃地」論」『千里山文学論集』83、p.352

えずにはいられない」と指摘している³⁸。この指摘を踏まえて、李文茹（2010）は「霧社」と「タダオの死」における人間関係を通して坂口の創作特徴を考察した。結論として、両作品から植民地政策への批判が見られるものの、植民者と被植民者の義理人情によって、これらの批判が曖昧化されてしまったが、このような矛盾も「坂口の霧社事件作品の時代性」を意味していると論じた³⁹。楠井清文（2014）は「霧社」と「タダオの死」について、坂口が詳しく人物の心理を辿ることで、霧社事件が起こる「必然性」を理解しようと述べた。この両作品の特徴は「資料から窺い得ないような人々の内面の逡巡・葛藤・苦悩に多くを割いている点」⁴⁰だと論じた。

一方、小笠原淳（2015）は「『蕃地』に関するノート—台湾乃蕃族研究（鈴木作太郎著）1951.4.15 坂口禴子」という創作ノートを発見した。このノートは「坂口が1951年頃に鈴木作太郎の『台湾乃蕃族研究』から霧社事件に関する人物関係や事象を改めて学んで」整理したものであり、ノートの内容が作品に挿話として取り入れられたことも見られる。そのため、「戦後の坂口の『蕃地小説』は、この1冊のノートを中心に着想されたと言っても過言ではないだろう」と論じた⁴¹。ゆえに、『台湾乃蕃族研究』を踏まえて作品の虚構の部分を考察すれば、彼女が伝えたかった霧社事件の「真実」を知ることができるだろう。

簡中昊（2016）は両作品における人間関係を分析し、坂口の霧社事件に対する解釈と両作品の連続性を考察した。簡氏は作品を一部の史実と比較し、日本人巡査と原住民の「父子関係」、首謀者モーナ・ルダオの「不在」などの虚構を見出した。また、簡氏はこれらの虚構を通して、理蕃政策が原住民の次世代の養育を妨げたことを指摘し、原住民が自身の「主体性」を奪還することこそが、坂口の霧社事件に対する再解釈だと論じた。そして、両作品における日本人警察官の「慈愛なる父親像」から、坂口は原住民のみならず、山地の勤務者に対しても「愛情」をもっているため、理蕃警察の歴史問題を曖昧化してしまったと解釈してい

³⁸ 同注26前掲書、p.94

³⁹ 李文茹（2010）「植民地の和解のゆくえ」『異文化としての日本：内外の視点』、法政大学国際日本学研究センター、p.392

⁴⁰ 同注17前掲論文、p.158

⁴¹ 同注16前掲論文、p.177



る⁴²。同年、小辻菜々子（2016）は修士論文で「霧社」「タダオの死」と「蕃婦ロポウの話」を多面的に考察し、坂口が霧社事件を通して植民地主義が原住民に対して行った暴力、そして国家機構と個人、男性と女性の間の不均衡な関係を描写したと論じた⁴³。

3. ジェンダーの視点から見た坂口禪子の作品

坂口の蕃地小説の中には、女性を主体とする作品が多い。その中でも、特に第44回芥川賞の候補となった「蕃婦ロポウの話」に関する先行研究が最も多い。李文茹（2006）は「蕃婦ロポウの話」における女性人物を考察し、この作品は「意識的に女性を主体として霧社事件を表象しようとする意図を読み込むことも可能」なため、「女性を主体として歴史言説を再構築する潜在的な可能性において、歴史的価値を有する」と評価した。一方で、李氏は作中の原住民女性の性的な側面が強調され、植民地支配における日本人男性の性暴力問題が矮小化されてしまうと指摘した⁴⁴。彭妍蓁（2013）は「蕃婦ロポウの話」における二人の蕃婦—ハツエとロポウは戦争の犠牲者となった「蕃女」の表象であると捉えた⁴⁵。結論として、彭氏は「坂口禪子は霧社事件の描写を通して、改めて人権の尊さと民族を超えてお互い尊重すべきだと考えたのだろう」⁴⁶と述べた。

楠井清文（2014）は「ルピの話」における女性の役割と性規範を考察し、この小説は「植民地について支配者／被支配者という枠組みでなく、ジェンダーによる支配関係という別の捉え方を提起する点で重要なものの」と評価した⁴⁷。また、「蕃婦ロポウの話」においても女性に対する性規範が見られるため、坂口は「蕃婦」像を通して、女性が性規範を理解するプロセスを書き出していると捉え、「それがジェンダーから見た植民地支配という作品の特異な切り口をもたらしてい

⁴² 簡中昊（2016）「「還元」された野蛮人像：坂口禪子の「蕃地」文学に関する一考察」『天理臺灣學會年報』（25）、p.141-159

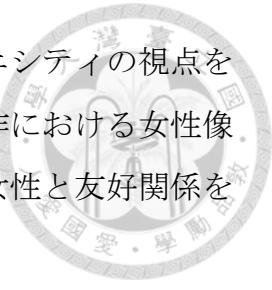
⁴³ 小辻菜々子（2016）「坂口禪子的霧社事件三部曲—〈霧社〉、〈達道・莫那之死〉、〈蕃婦羅波烏的故事〉」（國立政治大學修士論文）

⁴⁴ 李文茹（2006）「ジェンダーから見た台湾原住民の「記憶」と「表象」—霧社事件を中心」『社会文学』第23巻、日本社会文学会、p.107

⁴⁵ 彭妍蓁（2013）「坂口禪子「蕃婦ロポウの話」論」『戦争の記録と表象：日本・アジア・ヨーロッパ』、関西大学出版部、p.155

⁴⁶ 同前注、p.163

⁴⁷ 同注17前掲論文、p.164



る」と指摘している⁴⁸。李文茹（2015）はジェンダー及びエスニシティの視点を通して、「ビッキの話」「ルピの話」「蕃婦ロポウの話」の三作における女性像を考察し、女性のセクシュアリティを描写する部分は、原住民女性と友好関係を築いた坂口ならではの創出だと論じた⁴⁹。

なお、簡中昊（2016）は従来の先行研究と違い、女性ではなく、「ビッキの話」における男性性について考察した。障害を持ったビッキは霧社事件の「生き残った者の男性」の隠喩だと捉え、「蕃婦ロポウの話」と合わせて、この両作品は「『生き残った者』の表象を構成し、自分の蕃地小説に、霧社事件の『真実』を自らの方式によって『再現』し、一つの『蕃地』の世界を作った」と論じた⁵⁰。

以上の先行研究をまとめると、坂口の蕃地小説に関する従来の先行研究では、主に彼女の理蕃政策に対する姿勢が協力的か批判的かについて論述されてきた。例えば、王曉芸、星名宏修、呉佩珍、林慧君らは「時計草」などの戦時に書かれたテキストを分析することで、作品に示されている坂口の理蕃政策に対する協力的な姿勢を指摘している。また、河原功と李文茹はともに坂口の理蕃政策への切り込みが足りない点について指摘している。その一方で、中島利朗と彭妍蓁は坂口の差別のない姿勢と人道思想について評価している。このように、理蕃政策に対する坂口襟子の姿勢の解釈には食い違いが生じている。しかし、このような結果があるのは、小笠原氏が論じたように、坂口の故郷に対する愛情が混在しているため、「『帝国の臣民』として生きた作家の罪意識が見え隠れ」⁵¹した結果だと考えられる。加えて、戦時下に検閲を受けた「時計草」からわかるように、当時は総督府が作品の内容を干渉するため、坂口は理蕃政策に対する批判を書くことができなかった。一方、戦後はこのような規制から解放されたため、理蕃政策への批判をより明確に表現することが可能になった。このような背景から、彼女の理蕃政策に対する姿勢が異なったとも考えられる。したがって、本論文は坂口の理蕃政策に対する姿勢から脱却し、作品中の登場人物を通して、蕃地がどのように構築され、その表象は何を意味するかを考察する。

⁴⁸ 同前注、p.168

⁴⁹ 李文茹（2015）「坂口襟子の台湾蕃地作品における女性像と植民地的ノスタルジアの政治性」『社会文学』（41）、p.99

⁵⁰ 同注 42 前掲論文、p.152-154

⁵¹ 同注 16 前掲論文、p.181

第3節 問題意識・研究方法及び研究範囲



1. 問題意識

坂口は自分の創作手法について、一つの事件について書くとき、その事件の「事実」に作者が存在せず、小説中の「真実」には作者の姿がある⁵²と語り、「小説の本質は虚構」で、「うそっぱちをでっちあげて、一つの小説に構成する」⁵³と述べている。つまり、坂口にとって小説の「真実」を構成するのは「虚構」であり、そこには作者の姿が窺えると考えられる。坂口の作品における「虚構」を論じる研究には、前述のように「蕃地」における主人公と下山一の異同を明らかにした彭氏の論考がある⁵⁴。他に、簡氏の論文では「霧社」と「タダオの死」における日本人巡査と原住民の虚構の父子関係から、坂口の霧社事件の再解釈を明らかにした⁵⁵。さらに、小辻氏の論文では、「霧社」と「タダオの死」における登場人物の虚構を通して、坂口が理蕃政策の不合理性を示唆していると論じている⁵⁶。しかし、これら坂口の蕃地小説における虚構を考察する先行研究は一つか二つかの作品に偏っている。坂口は隨筆で、読者が一つの作品から作者の全貌を見出そうとするが、それは「『ある時』の作者の顔」⁵⁷であると述べている。すなわち、坂口による蕃地の表象を理解するためには、より多くの作品を考察する必要があると言えよう。そのため、本論文は坂口の全ての蕃地小説を取り上げて、小説で蕃地がどのように描写されたかを考察することによって、坂口による蕃地の表象を明らかにする。

また、先行研究から、坂口は様々な視点を通して、自分の蕃地世界を再構成していることが窺える。その対象となった作品を主題で整理すれば、以下の通りである⁵⁸。

⁵² 同注 23、p.21

⁵³ 同前注、p.21

⁵⁴ 同注 37 前掲論文、p.352

⁵⁵ 同注 42 前掲論文、p.141-159

⁵⁶ 同注 43 前掲論文、p.18-53

⁵⁷ 坂口禪子（1954年8月18日）「モデルのある小説」『熊本日日新聞』、朝刊4面

⁵⁸ 簡中昊（2015）の博士論文「近代日本の台湾原住民認識—作家たちが見た「野蛮人」—」（総合研究大学院大学博士論文）p.169 の分類法を参照している。

- ① 混血児：「時計草」「蕃地」
- ② 霧社事件：「霧社」「タダオ・モーナの死」
- ③ ジェンダー：「ビッキの話」「蕃地の女—ルピの話—」「蕃婦ロポウの話」



坂口の著作はそれぞれ明確な主題を持っているが、フェイ・阮・クリーマン（2007）によれば、植民地体験を書く作品に掲げている課題が異なるにせよ、作家は文学という手段によって複雑で多面的な植民地体験を再現しているのである⁵⁹。この論点によれば、坂口がそれぞれのトピックを通して、多面的な蕃地体験を再現しようとすると考えられる。そのため、本論文は先行研究を踏まえて、各主題において蕃地がどのように再構築され、そこにどのような意味が付与されているかを明らかにしたい。

2. 研究方法及び研究範囲

2.1 研究方法

前述したように、坂口は創作において史実を基盤としながらも、虚構の要素を織り交ぜる手法を使って彼女なりの真実を表現している。小笠原氏（2015）の研究によれば、坂口は戦後執筆する際に、鈴木作太郎（1932）『台湾乃蕃族研究』を参考にしていたという⁶⁰。そのため、本論文は鈴木氏の著書を中心に、坂口が作り出した「虚構」を対象として考察していく。

また、下村作次郎（2004）「台湾原住民族文学史の初步的構想」では、日本人作家の書いた原住民族文学について以下のように論じている。

原住民族を描いたそれらの作品は、台湾文学全体の中でどのような意味を持つのか、さらに、それらの作品を原住民族文学の視点から見るとどのような文学となるのか。（中略）このように作品に描かれた原住民像の調査は、今後の重要なテーマの一つとなろう。⁶¹（下線部は筆者より、以下同）

⁵⁹ フェイ・阮・クリーマン（2007）「日本語版に寄せて」『大日本帝国のクレオール（植民地期台湾の日本語文学）』、慶應義塾大学出版会、p.6

⁶⁰ 同注 16 前掲論文、p.177

⁶¹ 下村作次郎（2004）「台湾原住民族文学史の初步的構想」『天理台灣學會年報』（13）、p.49



つまり、日本人作家がどのように原住民を見ているか、または作品の中でどのように原住民を描写しているかがかなり重要なポイントであろう。さらに、朴裕河（2016）は従来の植民地・占領地の研究は主に被害国・被植民地を中心に研究されてきたが、「そういう意味ではそれらの研究は『植民地』『占領地』を対象にしながらも、そこに生きた数百万にものぼる『日本人』の存在をきれいに消去したものだった」と指摘している⁶²。つまり、植民地を描写する作品は主に被植民者的人物像に注目しており、作品における「日本人」の人物像は従来看過されてきた。故に、本論文は坂口の各作品における原住民像と日本人像を取り上げ、史料にない虚構を分析し、これらの人物像を通した考察を試みる。

特に、坂口の混血児と霧社事件に関する作品では、歴史に実在した人物をモデルにしたことが多い。そこで、史実との対照を通して、坂口が人物像をどのように描写し、それがどのように蕃地の表象を形成したかを分析する。一方、ジャーを扱う作品群では、主に歴史における「無名の者」を書いているため、作品における男性像と女性像を中心に、蕃地の表象を考察する。このように、各主題に応じた分析方法を用いることで、坂口はどのように蕃地を描写し、さらにどのように意図をもって書いたのかを考察する。

2.2 研究範囲

本論文は坂口禪子の作品を蕃地小説に絞って、各主題における蕃地の表象を考察する。取りあげる作品と主題を表1のように示しておく。

⁶² 朴裕河（2016）『引揚げ文学論序説—新たなポストコロニアルへ』、人文書院、p.11

表1 研究範囲



主題	発表時	作品
混血児	1943年	「時計草」
	1953年	「蕃地」
霧社事件	1954年	「霧社」
	1961年	「タダオ・モーナの死」
ジェンダー	1953年	「ビッキの話」
	1956年	「蕃地の女—ルピの話—」
	1960年	「蕃婦ロポウの話」
	1961年	「蕃地のイヴ」

まず、同じく混血児の課題を扱う作品「時計草」と「蕃地」を取り上げ、坂口が戦時中と戦後に同じ課題の作品を書いた意味を考察する。主人公のモデルである「下山一」の歴史資料と比較し、坂口の改作の意図を明らかにする。特に、従来の先行研究では両作品における「優生思想」について論じてきたため、本論文では「優生思想」を手がかりに、主人公に現れた優生思想の意味も考察の射程に入れる。次に、霧社事件を直接書いた作品「霧社」と「タダオの死」を取り扱い、作品における日本人と原住民の人物像及び関係性に注目し、史料にない描写で霧社事件を再解釈した意味を考察する。主に両作品ともに現れた「父子関係」と、霧社事件に関与した理蕃警察と原住民の心理描写について考察し、坂口の霧社事件に対する考え方を明らかにする。

最後に、従来の先行研究は主にジェンダーの視点を通して、「ビッキの話」「ルピの話」「蕃婦ロポウの話」の3篇の作品について考察してきたが、「蕃地のイヴ」にもジェンダーの課題が見られるため、本論文は従来看過してきた「蕃地のイヴ」も取り上げて、ジェンダーの視点を通してこれら4篇の作品を考察する。この四つの作品における虚構の人物像を考察し、坂口が蕃地の話を通じてジェンダーの課題を提示した意味と、蕃地がこれらの物語における働きを明らかにしたい。

第4節 論文構成

序章においては、本論文の研究動機、先行研究、研究方法および研究範囲と論文構成が含まれている。そして、本論文は「混血児と蕃地の表象—『時計草』『蕃地』を中心に」、「霧社事件と蕃地の表象—『霧社』『タダオ・モーナの死』を中心に」「ジェンダーと蕃地の表象—植民地支配と性差を通して」との3章によって構成される。各章の要約は下記の通りである。

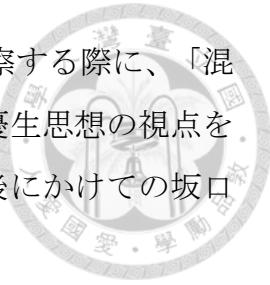
第1章 混血児と蕃地の表象—「時計草」と「蕃地」を中心に

第1章では、混血児の課題を扱う作品「時計草」と「蕃地」を中心に、戦時中から戦後にかけての坂口の混血児問題に対する意識変化を考察する。特に、両作品と共に現れた「優生思想」の描写を手がかりに、主人公や小説の時代背景の虚構を考察し、戦時中と戦後における坂口の蕃地表象を明らかにする。

「時計草」における主人公の山川純は、日本人の父と原住民の母との間に生まれた混血児である。小説は山川純が2度の縁談に失敗し、3度目の縁談のために九州の父へ面会に行く場面から始まる。山川純は元々父の手配で、日本人の錦子と結婚する予定だったが、ある日阿蘇山の壮大さに感動され、山に帰って原住民と結婚することを決意した。しかし、決意した山川純に対して、錦子は日本人と結婚したほうが、原住民の文化を高められると口説き、山川純が錦子の話に納得した場面で物語が終わった。一方、「蕃地」(1953)では、主人公の林田純は「時計草」の主人公と同じく混血児で、2度の縁談にも失敗した。「蕃地」は林田純が日本人の真子と結婚するところから始まる。林田純は真子とともに蕃地に住み、最初は日本人のように振る舞ったが、第二次世界大戦を経て、最後に真子の支持により原住民として生きしていくことを選んだ。

以上のように、両作の設定は似通っている部分が多いと言えるが、結末には大きな違いがあることがわかる。多くの先行研究は戦時中の作品「時計草」に主眼を置いており、優生学の視点を通して坂口の「純血信仰」を強調している。しかし、垂水千恵(1995)によると、坂口はインタビューにて「時計草には女性の側に目が向いています。蕃地は、混血の問題に視線が集中しています」⁶³と述べ

⁶³ 同注9前掲書、p.141



ている。故に、坂口における「純血論」のような優生思想を考察する際に、「混血」の課題を扱う「蕃地」も考察すべきだと思う。そのため、優生思想の視点を通して、登場人物の心理描写や関係性を考察し、戦時中から戦後にかけての坂口の混血児に対する意識の変化を明らかにする。

第2章 霧社事件と蕃地の表象—「霧社」と「タダオ・モーナの死」を中心に

第2章では、霧社事件を真正面に捉える「霧社」と「タダオの死」を中心に、登場人物の心境や言動など、史料にない虚構を通して坂口が霧社事件をどう理解しているかを考察する。本章では、まず史料に基づいて霧社事件の原因を把握し、次に作品ではどのように書かれているかを考察する。

作品「霧社」は実在した人物佐塚愛祐と、撫育政策によって理蕃課に育てられた花岡兄弟のやりとりを中心に霧社事件を語る。小説では佐塚と花岡兄弟の関係が「父子関係」だと捉えられているため、従来の先行研究はこの点について論じてきた。しかし、小説では他に霧社事件に繋がった原因、例えばモーナルダオの妹「テワス」の政略結婚の破綻が書かれており、史料にない人物の心境が語られている。そのため、本章では先行研究を踏まえ、父子関係をはじめ、それ以外の日本人と原住民の関係性にも注目する。

また、「霧社」の7年後に出版された「タダオの死」は、実在した人物樺沢巡査がモーナルダオの息子「タダオモーナ」（以下「タダオ」と表記）を顧みる回想録である。小説では樺沢がタダオを「吾子」のように思うため、先行研究は主として樺沢とタダオの「父子関係」に注目している。「タダオの死」においては、小説「霧社」のように霧社事件の経過がさほど詳しく書かれていないが、その発端となった原住民と日本人の関係性がさらに深掘りされている。例えば、「タダオの死」では、小説「霧社」で描写が少ないタダオと画策者の「ピホサッポ」の心境が書かれている一方で、「霧社」の主要人物である花岡二郎に関する描写が少ない。この点から、「霧社」と「タダオの死」は違う目線で霧社事件を捉える作品だと考えられる。ゆえに、両作品を考察すれば、より坂口の霧社事件に対する考え方を把握できると思われる。そのため、本章では「霧社」と「タダオの死」における人物の関係性を中心に、坂口が参考したという鈴木作太郎著の『台灣乃蕃族研究』と比較し、作品における虚構の意味を考察する。特に史料にない人物

像の心理描写から、坂口が霧社事件をどのように理解していたのかを明らかにする。



第3章 ジェンダーと蕃地の表象—植民地支配と性差を通して

第3章では、ジェンダーの視点から「ビッキの話」「ルピの話」「蕃地のイヴ」「蕃婦ロポウの話」の4篇の作品について考察する。これらの小説は全て歴史における「無名の者」を主体とした作品である。最初の蕃地小説である「ビッキの話」について、坂口は何人かの知り合いをモデルにして「ビッキの話」を書いたが、小説の内容が全くの「つくり話」であり、「でたらめ」であったと語った⁶⁴。小笠原氏はこの発言について、坂口は蕃地での実話・見聞を「物語として異化」し、「ビッキの話」をはじめ、蕃地小説を「作者から独立した1つの虚構の小説」として作り上げたと述べている⁶⁵。つまり、これらの小説を虚構の小説として見做せるといえよう。さらに、本章で扱う四つの物語は坂口の身辺人物をモデルとして創作されたにも関わらず、その歴史事実や当該人物の事実性を確認することが困難であるため、本章ではこれらの登場人物を虚構の人物像として考察を行う。先行研究を踏まえて、作品における男性像や女性像を分析し、坂口襟子の蕃地表象を考察し、特に戦後という時空下において、植民地期の蕃地を取り上げる意味を考察したい。

「ビッキの話」において、主人公の「ビッキ」は小児麻痺で下半身が不便なために、人々に軽蔑され恋もできなくなった。そんな彼は蕃社の娘「スミ」が好きだが、スミはビッキを相手にせず、日本人巡査の「野村」に目を向けていたため、ビッキはスミの恋を見守ることしかできなかつた。「ルピの話」は、入墨をしたことで結婚した「ルピ」と、白面で結婚できない性の介添役の「テワス」の物語である。二人は「女ご」の役割について語り、最後にテワスが結婚しないで介添役続けたのは、山地を離れた日本人巡査を待っているからだと自白した。「蕃地のイヴ」では、母親のルピ・ナガイが出産に苦しんだため、娘のハバオの「女」として生きる全てを奪い、非婚の巫女になるように仕向けた。しかし、ハバオは日本人の「青山」との出会いによって、女の幸せはなにかを考え始めた。「蕃婦

⁶⁴ 同注3 前掲書、p.277

⁶⁵ 同注16 前掲論文、p.176

ロポウの話」において、日本人の「私」と原住民の「ハツエ」はロポウについて語り合った。ロポウは夫の死後、神に対して一切の感情を捨てて生きると誓っていた。しかし後に、日本人巡査の片山と男女の関係になり、最終的には片山を道連れにして自殺した。

以上のように、この 4 篇の作品において共に日本人と原住民の人間関係が見られる。「ビッキの話」ではビッキと野村が対照的に書かれているため、本論文では、二人の男性像を通して、植民者と被植民者の関係性とその変容について考察する。また、「ルピの話」「蕃地のイヴ」と「蕃婦ロポウの話」では共に日本人の介入によって、女性たちが自分の性役割について悩み始めたように見える。そのため、本章では男性像と女性像に分けて、これらの作品における日本人が原住民に与えた影響と、その支配関係の中でそれぞれの人物が見出した対応の意味を考察する。

終章

終章では、第 1 章から第 3 章までの考察結果を総括し、各主題における日本人と原住民の人物像を通して、坂口禪子の蕃地表象を明らかにする。

第1章 混血児と蕃地の表象—「時計草」と「蕃地」を中心に

「時計草」は坂口樺子の最初の蕃地小説である。小笠原淳（2015）は坂口の自伝小説を調べ、「時計草」の舞台が主に熊本となったのは、彼女がまだ蕃地をよく理解していないからだと論じた¹。逆に言えば、「時計草」には蕃地へ行く前の坂口の考え方を見られるだろう。また、坂口は十年後、自分の蕃地経験を生かして「時計草」と同じ題材の「蕃地」を発表した。この両作品の主人公は共に実在した「下山一」をモデルにしており、その設定も似通っているため、両作品を考察すれば、坂口の戦時中から戦後にかけての意識の変化が見られると考えられる。

また、前述のように、従来の先行研究は主に「時計草」に注目し、優生思想の視点を通して坂口の植民地支配への協力姿勢を指摘している。しかし、同じ題材の「蕃地」は従来看過されてきたため、同じ視点を通して「蕃地」を分析すれば、坂口の植民地支配に対する認識がより全面的に見られると思う。故に、本章では優生思想を通して、「時計草」と「蕃地」における登場人物の虚構を分析し、植民地の混血児問題を書くことで、坂口が戦時中と戦後においてどのように植民地支配の問題を捉えていたのかを考察する。

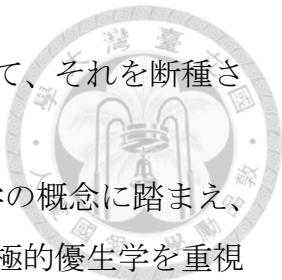
第1節 優生思想とは

まず、本章で扱う優生思想の定義を説明する。最初に優生学（eugenics）という言葉を作ったのは、イギリスの学者フランシス・ゴルトンである。彼は優生学を「ある人種（race）の生得的質の改良に影響する全てのもの、およびこれによってその質を最高位にまで発展させることを扱う学問である。」と定義した²。また、人種改良の方法について、米本昌平（2000）によれば「理論上、優生学には、良い遺伝形質を積極的に増やそうとする積極的優生学と、悪い遺伝形質を抑えようとする消極的優生学」があるが、「よい遺伝形質を増やすための手段を考えてみても、人間の場合は難しいため、現実に行われたほとんどは消極的優生学であり、その代表例が断種法の制定」であった³。つまり、優生学は人種の質の向上を目的

¹ 小笠原淳（2015）「坂口樺子の台湾蕃地小説とその系譜：戦中と戦後を通して」、『日本台湾学会報』、p.171

² 米本昌平（2000）「イギリスからアメリカへ—優生学の起源」『優生学と人間社会—生命科学の世紀はどこへ向かうのか』、講談社、pp.14-23

³ 同前注前掲書、p.34



としているが、現実的な方法として、「悪質」な遺伝子を決めて、それを断種させるという差別的なやり方であった。

そして、ドイツの優生学者アルフレート・プレッツは優生学の概念に踏まえ、「人種衛生学（民族衛生学）」（Rassenhygiene）を提出し、消極的優生学を重視し、ゲルマン民族内部の「低価値者」とされた品種（Rasse）の淘汰を最初の課題とした⁴。また、彼が考えた「低価値者」には精神病者や障害者の他に、黒人人種や黄色人種も含まれている。優越した白人人種はこれらの「低価値的人種」との混血を避けるべきだと主張した結果、この概念がナチスの激しい人種主義と結びつき、安楽死計画を遂行した⁵。

日本における優生思想も一時的な展開ではないが、星名氏によると、最初に坂口の「優生思想」が見られる作品「破壊」（1940）の刊行時期は「国民優生法」と一致し、作品背景からも「国民優生法」との関連が見られる⁶。そのため、本章は「国民優生法」に基づいて日本の優生思想を説明する。

「国民優生法」は第一条にて「悪質なる遺伝疾患の素質を有する者の増加を防遏すると共に、健全なる素質を有する者の増加を図り以て、国民資質の向上を期すること」と目的を明示し、遺伝性精神病者や遺伝性身体疾患のあるものへの断種法に言及した⁷。「国民優生法」において、混血児に関する条例はないが、松原洋子（2000）によると、「国民優生法」の基礎となったのは、1939年に厚生省が提案した「民族優生方策」で、この方策は上述したドイツの人種衛生学から強い影響を受けており、モデルもナチス・ドイツの優生政策であった⁸。故に、「国民優生法」もナチスの優生政策のように、自分の民族が「優秀」だという前提に立っていることが窺える。また、小熊英二（1995）によると、1930年代から人種改良運動を推進する「日本民族衛生学会」は一連の講演にて、日本が優秀な民族で

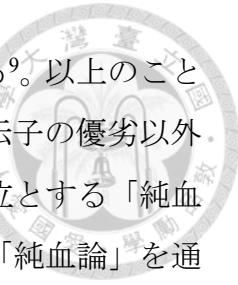
⁴ 市野川容孝（2000）「ドイツ優生学はナチズムか？」『優生学と人間社会—生命科学の世紀はどこへ向かうのか』、講談社、pp.69-71

⁵ 伍碧雯（2007）「德意志民族的優生學——德國種族衛生的起步與初期發展」『國立政治大學歷史學報』28、pp.26-33（日本語翻訳は筆者より）

⁶ 星名宏修（2001）「『血液』の政治学：台湾「皇民化期文学」を読む」『日本東洋文化論集』7、pp.7-9

⁷ 国立国会図書館「第75回衆議院本会議第25号」、<https://teikokugikai-i.ndl.go.jp/simple>（参照2025-07-03）

⁸ 松原洋子（2000）「日本—戦後の優生保護法という名の断種法」『優生学と人間社会—生命科学の世紀はどこへ向かうのか』、講談社、p.179



あり続けるために、他民族との混血を避けるべきだと主張している⁹。以上のことから、「国民優生法」の成立当時の優生思想は条例に書かれた遺伝子の優劣以外に、血統の優劣にめぐる論争も見られ、純粋な日本人の血統を優位とする「純血論」が掲げられている。したがって、本章では優生思想における「純血論」を通して、「時計草」と「蕃地」における混血児問題を考察していく。

第2節 「時計草」—混血児と皇民化協力

「時計草」の主人公である山川純¹⁰は日本人と原住民の混血児であるがゆえに、これまでの日本人女性との縁談に2度も失敗し、さらに父である山川玄太郎が用意した3度目の結婚に悩んでいた。山川純は妹の洋子と話し合っている時、「兄と妹だけしかこの世に生れていなかった時代は、むしろ幸せだったんだ、僕等はまるでその巨石から生れた兄妹のように、これ程人間がウヨウヨしている時代に、たった二人だけと同じ事さ。」(p.152)と自分たちの混血児の運命を嘆き、3度目の縁談のために九州へ旅立った。玄太郎は20年前蕃通だった時、山川純の母であるテワスルダオと結婚したが、家庭の事情によって日本に戻り、日本で別の妻と子供3人を持っている。この玄太郎は、実在している理蕃警察「下山治平」をモデルにしている。下山治平は「政略結婚」の命令の元に、マレッパ社の頭目の娘であるピッコ・タウレと結婚した。しかしその後、日本人女性と再婚し、3人の子供も作って帰国し、原住民の妻と子供を台湾に置き去りにした¹¹。多くの史料では彼がしたことを「悪行」だと扱っているが¹²、坂口はそんな下山治平の心境を推しはかり、山川玄太郎という人物を書き出した。

まず、玄太郎は自分の通婚について、以下のように述べている。

理蕃政策に立った彼の保身的な身振りであったなら、彼がその結婚生活に於いて、妻に示した愛情は、政策と言う哀れさを、妻に感じさせなかつた誠実は買わるべきだと。然し、その軽率は、責められるべきであると。

⁹ 小熊英二（1995）「皇民化対優生学」『单一民族神話の起源—〈日本人〉の自画像の系譜』、新曜社、p.250-252

¹⁰ 筆者注：混淆しないように、「時計草」と「蕃地」の主人公は全名で表記する。

¹¹ 下山一（2011）『流轉家族—泰雅公主媽媽、日本警察爸爸和我的故事』、遠流出版社、p.337—341

¹² 同前注、p.23

尚、その結婚の為に、純と云い洋子と云う男と女の若い魂を、苦悩させ焦慮させる事が一人の男子として、一人の父として許されるべきであるかと。

(下線部は筆者より、以下同) (p.178)



以上の玄太郎の描写から、彼は確かに愛情を持ってテワスと接した一方で、政略結婚がもたらした影響とその軽率さに自責の念に苛まれていることがわかる。実際に下山一の自伝にも下山治平が政略結婚に悩み、下山一家を離れたのはその時代ならではの苦衷があるという叙述が見られる¹³。このことから、坂口は日本統治時代においての理蕃警察の苦しみを書き出そうとしていることが窺える。

また、玄太郎は「理蕃と言う事に、全生涯を捧げるつもりでいた。お前のお母さんと結婚したのも、その覚悟ができたからだ」(p.187)と山川純に自分の意思を告げた。玄太郎は理蕃政策について、以下のように語っている。

理蕃政策と言うのは、言い換えると、民族政策の事だ。 (中略) 今一つは非常に低い文化しか持たぬ民族に対する場合、この場合は、勿論、何等民族的な歴史を持たない民族なのだ。それに、我国の理蕃政策がある。

私は、文化を持った民族政策に就いては、今何も言う必要はないが、未開の、何等系統的な経験も文化も持たぬ者に対しては、いろいろ考えたものだ。

(中略) 私は、彼等は治めるのではなく、供に成長してゆくべきだと考えた事だけ言おう。これがお父さんの出発になるからだ。

文化を持つ者は、それ自身成長してゆける。それを正しく指導すれば足りる。だが、文化を持たぬ者は、彼等の中に喰込んで、彼等の手をとって伸ばしてやらねばならぬ。 (p.187-188)

つまり、玄太郎にとって理蕃政策は民族政策で、日本が「文化も持たぬ」原住民に手を差し伸べるための政策である。そして原住民を正しく指導するために、「彼等 (筆者注: 原住民) のなかに私の血を混ぜるしか、道がないではないか。私を源にした子が、孫が、文化人の血を山の人達の中で育てゆく、そこに自らな民族経営が行われると思った」(p.188)と政略結婚の意味を語った。星名宏修(2001)

¹³ 同前注、p.231-232

はこの場面について、明治以降の日本の「人間のランクづけ」という考え方を見られる以外に、「民族間の格差を克服する」ために「雑婚」という手段を選ぶという観念も見られると述べている¹⁴。吳佩珍（2011）もこの段落を通して、玄太郎の考え方は「優生学の優勝劣敗の基準に基づいて、アイヌ民族を『滅びゆく民族』にした同化主張と一致している」¹⁵と述べている。つまり、玄太郎は政略結婚を「同化政策」の一環だと認識し、「純血論」に包摂する「血統」の優劣観念を「文化」の優劣観念に置き換えた上に、被植民者を日本人化させる同化政策への協力姿勢を表している。しかし、史実によれば実際の政略結婚の目的はただ原住民の管理を容易にすることだけである。

玄太郎とそのモデルの下山治平が政略結婚をしたのは霧社事件以前、すなわち1930年以前である。1907年に台湾総督府の警察総長大津麟平は視察にあたって、「...今蕃語通訳養成するに、最も捷径とするは適當者には若干の補助を与えて、公然蕃婦を娶らしむるに如くはなし...」¹⁶と最初の目的は「蕃語通訳」を養成するためだと明言している。下山治平が結婚した1911年には、「命令によって政略結婚に選ばれた日本人警察は、頭目の娘や姉妹を娶り、蕃人が極めて重要視している親戚関係を利用し、理蕃政策を推進する」¹⁷という上級からの指示があり、下山も「国と理蕃のために」結婚した¹⁸。しかし、1930年以前の理蕃政策は主に資源の獲得を目的として原住民を管理するための政策であった¹⁹。その一環として、政略結婚を利用し、原住民の抗日民族意識を納めるとともに、蕃婦を通じて情報を収集し、蕃地の支配を進める²⁰。言い換えれば、本来の政略結婚は単に統治するためであり、他民族の文化を高めるためではないと言えよう。では、なぜ坂口は玄太郎を通して、理蕃政策における政略結婚を「劣等な民族の文化を高める」と書いたのだろうか。

¹⁴ 同注6前掲論文、p.28

¹⁵ 吳佩珍（2011）「血液的「曖昧線」—台灣皇民化文學中「血」的表象與日本近代優生學論述」『台灣文學研究學報』13、p.234

¹⁶ 台湾総督府警務局 編『理蕃誌稿』 第1編 第2編,台湾総督府警務局,大正7-10. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/944262> (参照 2025-07-03)

¹⁷ 同注11前掲書、p.70

¹⁸ 同前注、p.96

¹⁹ 保羅・D・巴克萊（2020）『帝國棄民：日本在臺灣「蕃界」內的統治』、國立臺灣大學、p.212

²⁰ 鄧相揚（2000）『風中緋櫻—霧社事件真相及花崗初子的故事』、玉山社、p.38

「時計草」は一度検閲制度にふれ、最初と最後の二ページ以外全て削除されたが、翌年に『鄭一家』に再録し検閲を通過することができた。通過した理由について、垂水千恵（1995）は再出版した「時計草」の発表時期、政府の恣意的な検閲、坂口禪子の文名の向上が関係していると推察したが、初版と内容が違っているか否かについては「藪の中」だと論じた²¹。いずれにせよ、戦時下の作品は国策宣伝や思想統制に強く影響され、作家自身の表現の自由が制限されていたため、「時計草」もその制限により、理蕃政策に関する論述が戦争期の国策——「皇民化政策」に結びついたのかもしれない。一般的に皇民化政策は日中戦争が起こった1937年前後から始まったと考えられ、目的としては被植民者を「皇國臣民化」させ、大和民族の文化と同化させることである²²。戴國輝（1981）によれば、満州事変以降、山地においても「アメと鞭政策を高山族向けにも強化していった、いわゆる山地における皇民化運動（懷柔、籠絡）が強力に推進される」²³と指摘した。そこで、玄太郎の「劣等な民族の文化を高める」という考え方は、皇民化運動における被植民者を大和民族の文化に同化させることと一致している。したがって、坂口は当時の時代背景に影響され、政略結婚を通して「皇民化」の思想を物語に書き込んだと考えられる。

そして、玄太郎は山川純に「お父さんは、お母さんの幸せは、山で山の人をやがては指導するお前達二人を育てて、自分の故郷で、一生を終える事が、一番ふさわしい幸福であろうと思ったんだ。（中略）お前達を置いたのは、お父さんの志を完成させる為には、山で育たねばならぬと思ったからだ。お前が教育に依つて山の人を導くつもりだと手紙を寄い越した時には、有難い、それでこそ辛い思いをして、残した甲斐があると、お前の写真を拝んだものだ。」（p.189）と置き去りにしたことについて告白した。この段落から、玄太郎は①テワスへの心遣いと②山川純兄妹に理蕃事業を完成させるという二つの理由によって妻子を山地に残したことがわかる。①について、テキストから玄太郎とテワスの相談場面がないため、玄太郎の一方的な思い込みだと読み取れる。しかし、実際には下山治

²¹ 垂水千恵（1995）「六章　台湾文壇の中の日本人—坂口禪子と台湾人作家」『台湾の日本語文学—日本統治時代の作家たち—』、五柳書院、P.144-145

²² 林呈蓉（2010）『皇民化社會的時代』、台灣書房、p.19

²³ 戴國輝（1981）「霧社蜂起事件の概要と研究の今日的意味」『臺灣霧社蜂起事件—研究と資料』、國史館、p.34



平は妻のピッコ・タウレに日本行きの件について相談したことがあり、ピッコが「自分の幸せは台湾にいることだ」と断って子供と一緒に台湾に残したという²⁴。史実では妻のピッコが台湾に残ることを選んだのに、「時計草」ではその理由を夫の玄太郎に語らせることによって、植民者が被植民者の代弁となつたように見える。また、②を前述の「文化を高める」考え方と合わせて考えれば、玄太郎は指導や教育を「文化を高める」手段、すなわち教化の手段と見做していることが窺える。つまり、玄太郎にとって、息子が山の人を導くため教育に携わりたいと考えたことは教化の成功だと考えられる。

そして、山川純は玄太郎の言葉に対して「余りに激しい父の言気に、むしろ心も虚しくなる程の侘びしいにさりながら、ちつと黙って動かなかつた」(p.190)と呆気に取られた。その後、山川純は阿蘇山の自然の鼓動に感動し、「僕のからだを流れている高砂族の血は今はっきりと自覚したのだ。僕の存在の重要さを、今こそ僕は自認した」(p.202)と原住民の血が引いている自分を認め、将来の道を思い定めた。玄太郎に婚礼のことを聞かれた時、山川純は「黙って下を向いた。

父の遺志を継ごうという気持ちの悲壮さは、父が^{ママ}番理解してくれるに違いなかつた」(p.204)と玄太郎が完成できなかつた理蕃を完成する志を胸におさめながら、以下のように結婚のことを断つた。

「お父さん！僕は、民族の血が純潔であらねばならぬということを沁々思ひます。お父さんのおやりになったことを、否定するのではありません。しかし、お父さん、あなたはそれを完成なさることが出来ませんでした。」

「お父さん！僕はお父さんの本音をききたい。僕に内地人の妻をもたせたいのは、ただお父さんの僕への^{ママ}撫りじゃないでしょうか。僕は、お父さんが心の底で僕に求めていらっしゃるのは、そんな安易な妥協ではないような気がするんです。」

「お父さん！僕に何故山にかえれ、山のものは山のもの同志結ばれろと言つて下さらないんです。それは、僕にも内地人の血が流れています。しかし、

²⁴ 同注11 前掲書、p.170-172

ほんとうにお父さんが僕を将来内地人と結婚させ、謂ば、局外者として山の人々を指導する立場に置こうとお考えになったのなら、何故、僕を伴ってかえって此処で育てて下さらなかつたのです。」

「僕に山を幼い時から知らせ、山に住ませ、山を愛するようになさつたのは、お母さんのためだけでなく、僕自身に山の者になるように、自ずからそういう方向へ動くようにというお父さんのお考えではなかつたでしょうか。お父さん！あなたのお播きになつた種子としての僕の存在を僕は自覚します。」 (p.205-206)

まず、山川純は「民族の血を純潔に保たなければならない」という意思を持ち、混血の自分を生み出した玄太郎を責めることから、彼が血統を純血に保つという「純血論」の考え方を持っていることがみられる。最初に山川純が混血児の孤独を語るところと併せて見れば、彼は「純血」の大切さを認めているため、今まで混血児としての運命を嘆いてきたと考えられる。今までの山川純はただ「徒に、心の中に、自分の映像を書いて、雑婚の結果である自分の血の哀しさに溺れてしまっていました」 (p.216) だけで「この血を、どう生かしてゆかねばならぬかという事に、思い至らなかつた」 (p.216)。そして、自然によって原住民の血に目覚めた山川純は、混血の自分しかできないことを探し始めたといえよう。

また、山川純の視点からすれば、玄太郎が何度も自分を日本人と結婚させる行為は、自分への「労り」のようなものである。作中では、なぜ玄太郎が山川純を日本人と結婚させたいのは書かれていらないが、玄太郎が日本人を「文化の高い」民族として見做し、原住民をそれより劣等な民族として考えていることから、息子をより高等な民族と結婚させることは一種の労りだろう。しかし、父の理蕃を完成させたい山川純にとってそれは「安易な妥協」に過ぎない。なぜなら、玄太郎の理蕃は原住民の中に食い込んで、彼らの文化を高めることである。山川純にとって「この土地（筆者注：山地）に根を生やしこの土地の土と化そうとする人だけが、山の人々の魂をもつかむ事が出来る」 (p.162) ため、自分がまず完全に山地に根を下さないと、教育も指導も始まらないと思っているからである。そのため、山川純にとって自分たちが山地に残されたのは、より原住民の輪に進入させるためである。日本人の血も原住民の血も両方引いている山川純だから、「山

地」に残り、山地の者になって原住民を指導することは理蕃に一番適切な方法であろう。これは混血児の山川純にしかできない事である。もし山川純が日本で育てられていれば、自分はまた「局外者」として原住民を指導する立場にならう。しかしいずれにせよ、山川純はどの土地で成長しても、変わらず父の志を継いで、一指導者として原住民を教育しようとするところから、彼が植民者側の視点に立っていることが読み取れる。

そのため、玄太郎は山川純の言葉を聞いて感動し、日本人の妻であるシヅに「二歩前進する為には、純は山の娘を選ばねばならないのだ。わかるか。少しでも足踏みしたり、後退する事は許されない時代なんだ。純の血は高砂族の中に一步踏みこんでいる。もう一步進まねばならぬ。」(p.208)と語った。このことから、玄太郎にとって息子は自分の理想、すなわち「文化人の血を山の人達の中で育ててゆく」ことを叶えてくれるように映る。そして山川純は日本で植えられた台湾の時計草を見て「異郷の時計草よ、この土地の地味を腹一ぱい吸いこんで、思いきりはびこるがよい。そして、自分の生命を、天地の間に伸ばせるだけ伸ばしてみるがよい。山に落ちた一滴の血も亦、高砂族の中で育っていこう。」(p.209)と思った。林慧君(2006)は「山川純と同じ台湾出身の時計草が、日本の土地で自由にはびこる一方で、内地人の父親の血を引く純にとって、自分のいる地域に根付くことが、民族融合の理想なのかもしれない」²⁵と述べている。言い換えれば、玄太郎の理想を果たそうとした山川純は、実際に精神的な側面において日本人化され、「皇民化」または林氏が述べた「民族融合」の理想を達成しただろう。

しかし、山川純の婚約者である錦子は、彼が山の娘と結婚することに反対した。錦子は武家屋敷の娘で、山川純が混血であることを気にせず、ただ彼の人柄を信頼して結婚を決意した日本人女性である。周りの日本人に止められても、彼女にとってこの度の結婚は「人と人との結婚」(p.196)であり、それほど気負う必要のないものである。また、錦子は民族政策について、「何時迄も、排他的、独善的な感情をふりまわしている時代ではない。眞裸の心で、誠態をむき出して立向う時が来ているんではないか。日本が、大きく育つのは、清濁せ呑む大度量と、無限の融和力を持つからではないか。」(p.197)と思い、原住民の娘に生花を教

²⁵ 林慧君(2006)「坂口禪子小説人物的身份認同一以鄭一家、時計草為中心」『台灣文學學報 第8期』、p.142



えることを通して、「日本人の魂につながる」(p.207) ことを図っている。シヅも錦子に「八紘爲宇²⁶の御精神」(p.207) を教わった。つまり、錦子は単なる人柄と愛情から山川純と結婚しようとする考えを持っているが、一方でまた「八紘爲宇」の精神を持ち、指導を通して被植民者を日本の魂に繋げ、日本の民族に融合させようという考え方も持っている。このように、錦子も玄太郎のように原住民の文化を高めたいと考える人、すなわち「皇民化」の協力者である。

一方で、錦子も「純血論」の考え方を認めている。ある日、山川純の元婚約者であるふじ子は高砂族義勇隊の勇敢な事績を見て、断ったことを後悔し、錦子の元へ復縁の許可を求めに行った際、錦子に以下のように叱られた。

「私、それは貴女の過失だとは思はないわ。貴女の潔癖がそうさせたんだと思うの。血を純粋に保とうという潔癖が」

「血の純粋？」

「ええ、それも真実だと思うの。私も血の純粋って事は、いろいろ考えたわ。民族の血を純粋に保ってゆかねばならない、と真剣に考えたの。これは、雑婚からくる血の混乱だけではないと思うの。でも、私は、私の道も真実だと思うし、こういう女もなければならぬと思うの。」(p.212-p.213)

上記のように、錦子は「純血論」の論述を認め、ふじ子がかつて山川純を断ったのは、日本人としての純粋な血統を保つためだと語った。そして自分の道、すなわち「雑婚」の道も必要だと述べた。なぜ必要なのか、呉佩珍(2011)は「(筆者注:錦子は)『純血論』を信仰していると同時に、『同化主義』という大義のために選ばざるを得ない『雑婚』という手段を、『皇民の道』へと昇華させた」²⁷と述べている。その後錦子も自分の結婚について、「純と共に、民族政策の最前端に立つと言うかなしい迄の興奮があつただけである」(p.216)と「雑婚」を民族政策の達成のための手段として捉えている。

²⁶ 「八紘爲宇」また「八紘一宇」とは、地の果てまでを一つの家のように統一して支配すること。「日本書紀-神武即位前己未年三月」の「兼六合以開都、掩八紘而爲宇」に基づくもので、元来は国之内を一つにする意であったが、太平洋戦争期、軍国主義のスローガンとなり、海外進出の口実ともなった。"はっこう-いちう [ハックワウ‥] 【八紘一宇】", 日本国語大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2025-07-03)

²⁷ 同注 15 前掲論文、p.235

そのため、山川純の婚約破棄の決意を聞いて、錦子は直ちに断り、口説き始めた。まず、山川純は錦子を説得するために「然し、僕は前進したいのです。貴女と結婚する事は後退する事だと思うのです」と言ったが、錦子は「違います。それは頭の中のお考えです。貴方の前進なさる事は、高砂族の方と血縁を深めるだけが道ではございません。高砂族の文化を、日本の伝統に少しでも近寄らせ高めるのも前進ではないでしょうか」(p.218)と雄弁に語った。藤野豊(1998)はアイヌ民族の「滅びゆく」論述を以下のように述べている。

生物学的滅亡論は「同化」による文化的滅亡論へ、そして、「同化」=進化の論理へと変遷する。特に、「同化」については、それを民族の滅亡ととらえるのではなく、民族の進化として理解するという論理のすり替えがなされていった。(中略)日本では、アイヌ民族をはじめ、植民地・占領地の民族との混血を進めることによりその資質を向上させるという論理で優生政策を進めたのである。この論理のなかに「大東亜共栄圏」の虚構が成立する²⁸。

藤野氏はアイヌ民族を中心に「同化」について検討しているが、その論述には錦子の雄弁に一致する論述がある。錦子の「高砂族の文化を日本の伝統に近づけることで向上させる」という考えは、まさに上述の引用における「混血を通して被植民者の資質を向上させる」という論理である。高木博志(1994)はこのような結婚・混血を通して、ある集団を日本人化して埋没することを「優生学的同化政策」と説明している²⁹。つまり、錦子は「優生学的同化政策」に基づき、混血を手段として原住民を日本人と同化させることで、民族の向上を果たすという支配的な価値観が見られる。さらに、彼女の発言には、自らの「優越性」を前提とした価値観が反映されており、「純血論」によって日本人の血統を正統とする論理が見られる。

最後に、山川純は「錦子の声の鞭にビシビシ叩かれながら、心が洗われるような気がした」(p.219)と錦子の言葉に感動され、幻聴で「戦いの庭に進みゆく幾万の力強い足音を耳にした(中略)今こそ何んに行こう！帝の命のままに！」(p.219)

²⁸ 藤野豊(1998)『日本ファシズムと優生思想』、かもがわ出版、p.259

²⁹ 高木博志(1994)「アイヌ民族への同化政策の成立」『国民国家を問う』、青木書店、p.166

と聞こえたところで物語が終わった。星名氏はこの結末について、山川純は最後に「『戦争』=高砂族義勇隊」へと誘われたと述べている³⁰。筆者は星名氏の考察に賛成しているが、山川純が単に戦争へと誘われたのではなく、さらに「皇民化」されたという意味合いも含まれていると思う。昭和十七年（1942）に日本軍はニューギニア戦線の展開とともに、人的資源の需要に基づいて「陸軍特別志願兵制度」を実施し、本島人³¹や「高砂族義勇隊」の募兵を始めた。林えいだい（1998）は高砂族義勇隊の志願者を取材し、彼等は「大和魂を燃えて志願した」「戦死しても怖くない、国のために死ぬという覚悟をした」³²者や、また阻止しようとした家族に「日本人である以上、天皇陛下のため国のために死ぬんだ」³³と断った者である。つまり、「時計草」の最後では、山川純が感動して「帝の命のままに！」と叫んだように、彼は将来も高砂族義勇隊の青年と同じく国のために、天皇のために身を碎く「皇民」と「化」され、戦争に乗り出す可能性が高いといえよう。

第3節 「蕃地」—混血児と皇民化批判

1. 林田純に見る純血論の論述

「蕃地」の主人公である林田純は「時計草」の山川純と同じく混血児であるが故に2度の縁談に失敗し、父の用意によって3回目の結婚を迎える人物である。失敗の原因はともに結婚相手に「蕃人の息子」（p.9）だと思われたからである。林田純が日本人の血も受け継いでいるのにも関わらず、原住民の血が流れているだけで、日本人の輪から外されている。ここからは「純血論」の働きが垣間見える。駒込武（1996）は植民地帝国日本の支配原則には、「言語ナショナリズム」と「血族ナショナリズム」二つの原理が根幹に据えているという³⁴。前者は言語を「精神的血液」とみなして、共通の言葉を通じて異民族を包摂するのに対し、後者は血統の同一性を強調して異民族排除の働きを持っている。すなわち、「血族ナショナリズム」は純血論による理論である。また、その排除する働きによって、純血統とそれ以外の人間集団を区別し「『内地人』『台湾人』『朝鮮人』」という力

³⁰ 同注6前掲論文、p.26

³¹ ここでは高砂族と日本人以外の漢人や客家人などの人を指している。

³² 林えいだい（1998）『証言：台湾高砂族義勇隊』、草風館、p.67

³³ 同前注、p.116

³⁴ 駒込武（1996）、『植民地帝国日本の文化統合』、岩波書店、p.59-60

テゴリーを維持・再生産し続けた」³⁵といえる。つまり、林田純は「純血」ではなくため、「血族ナショナリズム」によって純血統の人間集団と区別され、異民族の一人として日本人の輪から排除されたのである。

そして、林田純は自分の出生が政略結婚によるもので、「理蕃政策の功利的な手段の上に打建てられた空虚なもの」(p.12)だと思った。この人為的な結婚によって生まれた自分について「何もかもが、一つの用意されたレールを走っている。(中略) それは、彼の将来へ向って真直ぐのびていて、否応なしに彼はそこを走らねばならない。レールを否定することは、彼自身を否定することなのだ」(p.10)と運命を嘆いた。他人によって操られた人生を屈辱だと思いながら、林田純は「父親が代行している理蕃課の意志を踏みにじる痛快さを想像」(p.12)したことがあった。そのため、林田純は父の意思に反して、日本人ではなく原住民の娘と結婚しようと思ったが、結局原住民の娘との結婚をやめた。

純が、彼に純情を捧げようと必死の眼を向ける蕃人の娘達を選ばぬ気持には、劣性と結びつく愚を避ける、彼の自負がある。二度、三度、彼が日本人の女へ手を差しのべる気持の底にある優位なものへの憧憬が、父親の作為に身をゆだねる自然な姿勢をつくるのだ。(p.12)

上記のように、林田純は原住民の娘と結婚することを「劣性と結びつく」愚かな行為だと考えており、日本人女性を「優位」な者だとみなして憧れている。このように、林田純の言動から「純血論」に包摂する人種・血統の優劣を決めつけるような観念が見られる。また、日本人を優位だと思うのは、林田純が生涯をかけて日本人としての権利を主張することや、彼が時々日本人のように物事を考えることから窺える。

そして、林田純は花嫁の真子に原住民の血を引いていることを伝えずに、一緒に霧社で暮らし始めた。真子は孤児で「結婚以外に逃げ道はない」(p.8)日本人女性である。林田純は真子から、前二回の婚約相手にも感じなかった素直さと子供のような素朴さを感じたため、何時までも秘密を隠せるわけがないと思った。

³⁵ 同前注、p.60



ある夜、初めて真子と枕を交わしてから、林田純は心の中に以下のように思い、その後真子に打ち明けた。

新しき体を欲しと思ひけり……純は、或る歌人の歌を思い出していた。生れもつかぬ傷痕に、悔いと焦躁と傷みとを感じている作者の嘆きがわかるような気がしたが、純は、非常に似通っていて、それらと比較にならぬ根本的な差を感じた。新しき体を欲しと思う……切ない、我でない我を新しく存在せしめようと祈る気持なのだ。純粋の血の流れる体を！音立てて流れる純の血は、赤と黒とに分れている。二つの違った血。何方の種族にも属せぬ、第三の種族。そして、それを生み出した人為的な意志。沸々と噴き上って来た憤りは、再び、あきらめと働くの中に沈んでいく。（p.39）

ここでの「新しき体を欲しと思うけり」はおそらく石川啄木の歌集『悲しき玩具』からの言葉である。啄木は26歳で結核により没した歌人であり、病気療養の期間中に『悲しき玩具』を執筆し、その内容の多く入院後のことに関わっている。その中の一首は「新しきからだを欲しと思ひけり、手術の傷の、痕を撫でつつ」³⁶で、病中に新しい体、つまり健康な体が欲しいという気持ちを露呈させたものである。しかし、啄木が欲しがっている健康な体に対して、ここで林田純が望んでいる新しい体というのは「純粋の血を流れる体」である。病気は治ることができるが、混血児としての人生はやり直せないため、彼にとってそれが根本的な差であり、さらに自分を純血の者と一線を画したのであろう。また、「純粋の血を流れる体」の願いを、林田純の日本人を優位とする考え方と併せて考えると、彼が望んでいるのは純血の日本人になることと考えられる。なお、純血論をもっているからこそ、林田純は自分が混血であることを受け入れられず、どちらにも属せぬ「第三の種族」というアイデンティティの揺れが生じたと思われる。

以上のことから、林田純は純血論をもっているため、アイデンティティの揺れが生じて自分の運命と葛藤に苦しむことがわかる。さらに、それは政略結婚から由来したものだと考えれば、坂口は主人公における純血論の描写を通して、政略結婚が個人にもたらした影響の大きさを書き出していることが窺える。

³⁶ 石川啄木（1966）「悲しき玩具」『日本詩人全集』、新潮社、p.111



2. 純血論による植民地支配の破綻

ところで、林田純は戦時中理蕃課の主任から、高砂族義勇隊の募集をかけるよう命ぜられた。林田純は「亡んでいきつつある蕃族を、そんな大量の若者を戦地に送って、どうなるか」（p.28）と当惑しつつも、次々と原住民の青年を集めて、南方へと送り出した。しかし、敗戦後に理蕃課の意志によって、敗戦という事実は「内地人の兵だけにひそかに伝えられた」（p.58）。坂口の隨筆「蕃地と終戦」（1955）では、この件について「終戦の日は、台中の蕃地中原にいた。警察官は、警察電話で、いち早くそれを知っていたらしいが、ラジオのない蕃地で、私共は、蕃社の人々なみに知らしてもらえなかつた」³⁷と語った。このことから、小笠原氏が論じた坂口は現実の出来事を小説に溶け込んで、小説の世界を構築する傾向が見られる³⁸。しかし、坂口はただ実話をそのまま挿入しただけでなく、事実に基づいて自分の想像を加え、虚構の小説を作り上げている。本作では事実に基づいて、林田純が不意に日本敗戦の消息を聞いたという展開を通して、彼の心境の変化を作り上げた。

純は、唇をかんだ。自分を道具視して来た、理蕃課関係者に、初めて怒りが、怒りだけが向けられた。何故、そんな重大なことを自分に伝えてくれなかつたのかと思った。—内地人以外に、当分伝えてはならぬ、という理蕃課の意志なんだが、貴方は、内地人として、知る権利があるな—（中略）内地人としての権利。純は、自分が三十年の生涯で、本当に、内地人としての権利を主張して来たか、と思った。索漠として乾いた思いがあった。（p.59）

上記の引用を見れば、林田純は自分が敗戦の消息を知らされていないことから、「内地人」いわゆる日本人の輪から外されたと感じた。純血の日本人ではないからこそ、林田純はいくら自分の日本人としての権利を主張しても、本物の日本人として認められないという、「血族ナショナリズム」の働きが見られる。さらに、林田純の怒りはこのような純血論が生み出す矛盾から生じたのであろう。山地では、霧社事件以降に新たに「理蕃政策大綱」が発表され、第一項は「理蕃は蕃人

³⁷ 坂口禱子（1955）「蕃地と終戦」、『日本談義』復刊第57号、p.63

³⁸ 同注1前掲論文、p.176

を教化し、其の生活の安定を図り、一視同仁の聖徳に浴せしむるを以て目的とす」³⁹である。近藤正己（1996）によれば、この大綱は現地の警察官の理蕃の指針で、第一項に記された「一視同仁の聖徳に浴せしむる」ことから、理蕃は元々の原住民を征服する事業から、「日本への同化を最終目的とする原則」へと昇華された⁴⁰。そして、戦時下において「理蕃政策大綱」の延長線として「高砂族社会教育要項」が発表され、その中には原住民を「日本国民」として見做している項目が見られる⁴¹。すなわち、霧社事件以降の理蕃政策では、原住民を「日本国民」として認めていいると言える。このように、坂口は終戦を知らされなかつた実体験を作品に生かし、混血児である林田純を通して、国家が掲げる「一視同仁」の理念と、純血論の矛盾を浮き彫りにした。

そして、義勇隊のために息子を戦場に送り続けた原住民に対して、終戦の消息を告げないことに林田純は違和感を覚え、「蕃人も、日本人の筈である。彼等が、そういったではないか。義勇隊を送り出す時に、忠勇な日本人として、君等の奮闘に期待する、といったのは誰だ」（p.62）と総督府が単に彼らを「人的資源」として見なすことに気づいた。林えいだい（1998）がまとめた高砂族義勇隊の口述歴史において、原住民が血書で義勇隊を志願する際に「今度、日本軍の一員として、天皇陛下の皇軍として、米軍と戦うことになった」、「三人は選ばれて日本軍人として出征する。川中島の名誉のために、天皇陛下のために喜んで死んでこい」⁴²という訓示を日本人の偉い人から受けたという。このように、坂口は「蕃地」において高砂族義勇隊の歴史を語り、敗戦の消息を知らされていなかつた事を通して、原住民を「皇民」とみなすという嘘を見破ったことがわかつた。このことからも、「血族ナショナリズム」による排除の原理が見られる。すなわち、義勇隊を日本軍として受け入れても、血統上、彼らは純血の日本人ではないため、やはり日本人の輪から外されて、終戦の消息を知ることさえできないのである。

そして、林田純は以上の出来事を経て、理蕃課に対してますます不信感を強めていった。小説の終盤では戸籍の問題をめぐって、林田純がとうとう理蕃課に裏切られたと感じた。林田純は真子に戸籍のことを聞かれ、初めて理蕃課の主任に

³⁹ 鈴木作太郎（1932）『台湾乃蕃族研究』、南天書局、p.495

⁴⁰ 近藤正己（1996）『総力戦と台湾—日本植民地崩壊の研究』、刀水書房、p.264-270

⁴¹ 同前注、p.306

⁴² 同注32前掲書、p.69、p.129

自分の戸籍について尋ねた。しかし、そこには「私生児。サツキの私生児」(p.76)という名称である。林田純は「自分が、そんな名称を与えられて、この世に生きつづけて来たとは……憤怒とか屈辱とか絶望とか、そんなものではなかった。彼の全身が火のよう燃えたぎり、世界が一変し、あらゆるものが悪意を持ち、トゲを立て、嘲笑している」(p.76)と思った。つまり、林田純は生まれてから父の籍、すなわち日本人の戸籍に置かれることなく、長い間原住民の私生児という身分で振る舞ってきた。下山一(2011)は自伝において、父が自分の戸籍を日本に登録していないため、徴兵令がなかなか来なかったことを書いた⁴³。坂口が下山氏の経験をどれほど知っているかを把握することは困難だが、「蕃地」において林田純が日本籍を持っていないことを書き出す意味は、彼のような混血児が純血統ではないため、日本籍を有する資格を持っていないという意味になるだろう。楠井清文(2014)は「蕃地」発表前年の1952年に、日本政府が「旧植民地出身者で、『内地』へ転籍した者以外は、日本国籍を喪失し『外国人』になった」という判断を出したため、「蕃地」における林田純のような植民地支配と関わる混血児は戸籍のみならず、戦後において国籍の排除も受けたと考察した⁴⁴。筆者は楠井氏に賛同しているが、ここでは林田純を「私生児」として登録したことで、彼は日本人と原住民の間に生まれながらも、日本国民としては受け入れられず、また原住民の戸籍にも置かれていなく、いわば両者のあいだに取り残された存在であったとも考えられる。このような位置づけは、植民地支配が掲げた表面的な包摂と、実際の排除との矛盾を示しているといえよう。

しかし、林田純の戸籍を気にせず、真子は「世の中には、戸籍だけはちゃんと両親を持っていても、父を疑うような子供だっていくらもありましてよ。(中略) そんな人達に比べると、貴方の出生は純粋で疑いを持つことがないんですけど。清らかな出生ですわ」(p.77)と慰めた。林田純はそれを聞いて心が洗われた気分になった。「蕃地」の最後、林田純は蕃社が戦後の政権交代を機に、蜂起して日本人を襲うという情報を聞き、最初は日本人に知らせようと思ったが、真子に「蕃社へいらっしゃるのでしょうか?」(p.81)と聞かれ、「三十年の生活で

⁴³ 同注11 前掲書、p.241

⁴⁴ 楠井清文(2014)「坂口禪子「蕃地」小説の世界—熊本時代の執筆活動を中心に—」、『論究日本文学第100期』、p.163

埋めつくされた日本人としての考え方から脱けることが出来なかつた」（p.81）
自分と決別して、蕃社へと向かつた。つまり、林田純は真子に支えられ、自己を取り戻したといえよう。

このように、高砂族義勇隊における矛盾と混血児の戸籍問題を通して、坂口は純血論を通じて、差別・排除された被植民者を描写し、植民地支配が内包していた矛盾と差別を暴き出したと考えられる。

第4節 結び

本章では、純血論の視点を通して、登場人物を中心に「時計草」と「蕃地」における混血児の表象を考察し、戦時中と戦後の坂口の意識変化を分析した。まず、純血論を通して「時計草」における山川純、玄太郎と錦子を考察した。玄太郎と錦子の理蕃政策に対する考え方から、二人とも純血論に包摂する「血統」の優劣さを「文化」の優劣さに換えて、大和民族の文化の優秀さを強調した上で、皇民化政策の正当化を主張し、協力する姿勢が見られる。さらに、錦子は純血論に基づいて、大和民族の優秀さを保つことを認めつつ、劣等な民族を日本人化する「優生学的同化政策」を支持している。一方で、山川純のモデルは歴史人物の下山一だが、坂口は山川純の日本人との結婚の意味を、混血児への「労り」として書き出し、当時日本人の上位にある姿勢と、「劣等な民族」に対する目線を浮き彫りにしている。また、山川純は「純血論」を認めているために、自分の混血児としての運命に孤独を感じていたが、山の自然環境によって原住民の血を自覚し、自分の血統を生かせる道を探そうとした。しかし、その自覚と決心も玄太郎の意思を継いで、原住民を指導する者になることに由来するから、山川純が植民者側に立つ意志が見られる。なお、「時計草」における政略結婚が歴史資料の「高砂族を管理しやすくする」という目的から離れ、「皇民化」の手段として書かれるところから、坂口が純血論を利用して、国策の正当性に応じる姿勢も見られる。

次に、「蕃地」における林田純の人物像を考察した。林田純の前二回失敗した婚姻から、純血論による「血族ナショナリズム」の排除原理がみられるため、混血時が日本人として認められないことが最初から示唆された。また、林田純の葛藤を通して、坂口は政略結婚が個人にもたらした影響を書き出していることがわかる。そして、現実にあった出来事、例えば終戦の知らせを受けていないことに、



自分の想像を加え虚構の内容を作り、林田純が理蕃課に失望したきっかけとして使った。また、史実にある高砂族義勇隊の招集の件を書き出し、原住民を日本軍として志願させたものの、日本人として認めないという矛盾を暴いた。あるいは混血児の戸籍問題を通して、日本人の血を受け継いた混血児が戸籍を持たず、立ち往生の姿を描写し、被植民者が植民地支配における劣勢の立場を書き出した。

以上の考察結果をまとめると、両作品においても「純血論」の優生思想が見られたが、純血論は「時計草」では戦争協力の正当化を保つ論理として導入され、「蕃地」では逆にその矛盾を強調する道具として使われていると考えられる。また、「時計草」は政略結婚を通して「皇民化」の合理性を強調する物語であるのに対して、「蕃地」は政略結婚に内包した「皇民化」の意味合いを触れず、ただそれがもたらした影響を浮き彫りにしている。そして高砂族義勇隊に関しても、「時計草」では単に彼らを日本軍として扱うのに対して、「蕃地」ではさらに純血論の原理を通して、高砂族義勇隊が日本人と区別されたことを描写している。このように、「時計草」と「蕃地」における純血論の扱い方の違いから、坂口の植民地支配に対する意識の変化が見られる。戦時中の「時計草」では、同時代の支配的イデオロギーを再現したのに対して、戦後の「蕃地」では純血論を批判的に捉え直したこと、植民地支配の矛盾を暴き出している。

本章の考察を通して、坂口権子は戦後にもう一度混血児をテーマにした作品を書くことで、戦時中に表現できなかった植民地支配の矛盾を浮き彫りにしようとしたことが明らかになった。ここでは、文芸評論家の平野謙（1975）の言葉を借りたい。平野氏は戦争期の作品が国策文学の横行によって、「表面上、国の戦時体制に順応すればするほど、内にひそめた反抗の錐も、いよいよ陰微にとぎすまされるのは必定である」⁴⁵と指摘している。この論点に沿えば、坂口は戦後に創作の自由を取り戻し、蕃地での実体験を作品に書き込んだことで、植民地支配の真実を戦後の読者に伝えようとしたと考えられる。坂口は混血児の葛藤を通して、「内にひそめた反抗の錐」を混血児が不利な立場に置かれた「蕃地」に明確に表現し、植民地支配の問題を再考しようとしたと考えられる。

⁴⁵ 平野謙（1975）『昭和文学史』、筑摩書房、p.229



第2章 霧社事件と蕃地の表象—「霧社」と「タダオ・モーナの死」を中心に

前章で「時計草」と「蕃地」における混血児の描写を通して、坂口禪子の戦時中から戦後の変化について考察を行った。本章では彼女の作品において、霧社事件に関わる蕃地の表象がどのように描かれているかを考察してみる。序章で論じたように、「霧社」と「タダオの死」は同じく真正面から霧社事件を描く作品であるが、両作品の事件に対する着目点は異なっている。例えば、「霧社」では理蕃課に育てられた花岡兄弟と佐塚巡査の「父子関係」、事件の近因とされるモーナ・ルダオの妹テワスと近藤儀三郎の政略結婚や、第二次霧社事件などの描写が見られる。一方で、「タダオの死」では「霧社」にないタダオ・モーナと樺沢巡査の「父子関係」や、タダオの内心の葛藤などの場面が見られる。以上のように、この両作品はそれぞれ違う視点で霧社事件を捉えているため、本章では両作品を取り上げて、考察を行う。

また、先行研究では、「霧社」と「タダオの死」に対して、作品中における日本人警察官と原住民青年の「父子関係」を考察する研究が多い。例えば、李文茹（2010）は人物の父子関係に焦点を当て、元々存在していた警察官と原住民のアンバランスな力関係は、警察官の謝罪や親と子の義理人情によって希薄化されてしまい、「支配と被支配の政治的な構造を批判するどころが、曖昧化してしまう」と指摘している¹。また、簡中昊（2016）も両作品における父子関係について考察を行った。簡氏は史実と比較しながら、「慈愛なる父親」に造形された警察官や、霧社事件を「父子の戦争」と描いたのは坂口が、「山地でのリアルな人間関係で、事件への再解釈を試みようとしたのではないか」²と論じた。しかし、これらの研究は主に「父子関係」に着目しており、蕃地の表象を考察するに当たって、父子関係を含めたほかの人間関係も看過できない重要な要素だと考えられる。

一方、小辻菜々子（2016）は「父子関係」以外に、政略結婚やアイデンティティ問題などを通して、「霧社」「タダオの死」「蕃婦ロポウの話」の三作における

¹ 李文茹（2010）「植民地の和解のゆくえ」『異文化としての日本：内外の視点』、法政大学国際日本学研究センター、p.392-393

² 簡中昊（2016）「「還元」された野蛮人像：坂口禪子の「蕃地」文学に関する一考察」『天理臺灣學會年報』（25）、p.150-151

る霧社事件の描写について考察した。「霧社」と「タダオの死」について、坂口が作中に現れる原住民のアイデンティティ問題と理蕃政策が個人にもたらした影響を通して、霧社事件の必然性を語っていると論じた³。

なお、小笠原淳（2015）の研究によると、坂口は創作にあたって、鈴木作太郎（1932）『台灣乃蕃族研究』を参照しているという⁴。そのため、本章では先行研究を踏まえて、同書を中心に考察を行う。また、『台灣乃蕃族研究』は総督府が編纂した資料に基づいて作成され、当時の支配的イデオロギーを再現しているゆえ、坂口がそれを参照して霧社事件を書いた際に、このような公式的記録から、どのような改変を行なったかを考察する。以上の論点を踏まえ、本章では小説における「虚構」の描写に注目し、歴史書にない人物像や人間関係を通して、坂口が霧社事件をどのように見たかを明らかにする。

第1節 霧社事件の歴史

考察にあたって、まず霧社事件と事件に至った原因を説明する。本節では坂口が参照したという『台灣乃蕃族研究』の内容を整理する。鈴木氏は霧社事件を境目に、事件までに総督府が行った理蕃事業を以下の四つの段階に分けている⁵。

- 第一期（1895年—1902年）：土匪の跳梁によって軍務が慌ただしかったため、蕃地に対しては懷柔政策であった。
- 第二期（1903年—1910年3月）：土匪を一掃してから、主力を蕃地に傾倒し、恩威併行主義で管理した。
- 第三期（1910年4月—1915年3月）：佐久間左馬太総督の「五箇年計画理蕃事業」が執行され、銃器の押収、武力による統治などが強行された。
- 第四期（1915年4月—1930年10月27日）：「五箇年理蕃計画事業」以降、撫育にも力を入れ、威圧手段を講じつつ蕃地を鎮圧した。

³ 小辻菜々子（2016）「坂口露子的霧社事件三部曲—〈霧社〉、〈達道・莫那之死〉、〈蕃婦羅波烏的故事〉」（國立政治大學修士論文）、p.74-75

⁴ 小笠原淳（2015）「坂口露子の台湾蕃地小説とその系譜：戦中と戦後を通して」、『日本台湾学会報』、p.177

⁵ 鈴木作太郎（1932）『台灣乃蕃族研究』、南天書局、p.296-298



このように、日本総督府は四つの段階にわたって、原住民を統治するために。様々な政策を行った。鈴木氏はこれらの理蕃政策の基盤に「撫育開発」と「討伐事業」が根幹をなしていると論じた⁶。第一期において、一代目の総督樺山資紀は原住民に関しては「綏撫」を主とし、武力による鎮圧などの政策を実施しなかつた。第二期に入ってから、総督府は金のなる樟腦の土地を取得するために、元来原住民の襲撃に備えるための「隘勇線」を山地に前進させ、原住民の土地や住処を狭めた。この「隘勇線の前進」という理蕃政策は、原住民にとって最も苦痛の政策で、「いかに激しき敵愾心をそそるかはいうまでもない」⁷ため、激しい戦争が繰り返された。そのため、第三期には「五箇年計画理蕃事業」が樹立され、原住民に対して「銃器の押収」「蕃地道路の開発」「入墨や馘首の廃止」を強行し、蕃地を開発するために武力鎮圧を実施した。この事業が終了後、佐久間総督は将来の理蕃政策の方針は撫育を主とし、威圧的な手段を補助とすることを定めた。第四期ではこれらの撫育事業がさらに進み、五十音や簡単な儀礼などを教える「蕃童教育所」が増設され、「授産」方面にも力を注いだ。この授産事業は、農耕、牧畜などの産業に関わり、特に農耕においては、原住民の従来の切替畑の耕作法を変え、水田耕作という定地耕を習わせた。さらに「之等（筆者注：蕃社）を農耕適地に移住集団せしめ積極的授産の歩みを進むべきである」⁸という理由に基づいて、「集団移住」を実施した。以上は霧社事件までの理蕃政策の概要である。

そして、1930年10月27日に霧社事件が起き、霧社公学校の運動会に参加した内地人134名と本島人2名が殺戮され、討伐は50日余りにわたって行われ、事件に参加した蕃社「凶蕃」の総人口は1200名ぐらいから600名余りに半減し、日本人にも数多くの死傷者が出了。霧社地方は「蕃地中最も開発されている所」⁹がゆえに、総督府はこのような事件が起きたことに驚愕した。そして事件の原因

⁶ 同前注、p.324

⁷ 同前注、p.304

⁸ 同前注、p.414

⁹ 同前注、p.437

については様々な諸説があるが、鈴木氏は総督府警察局の公表のものに、他の資料を足して以下のように原因とされるものを五つ著した¹⁰。



(1) 膽懾の結果：「隘勇線の前進」「銃器の押収」を強行したことが怨恨の原因を成している。また、銃器の押収によって「出草馘首の禁止」が進み、原住民の生活の中心を成す「狩猟」も困難になった。

(2) 処罰：蕃地は「特別行政区域」とされているため、平地のような普通行政区域と違って一般刑法が通用しなかった。また、蕃地に関する行政は理蕃警察の管轄の基にあり、理蕃警察に大きな権限が委ねられ、「警察が先住民の生殺与奪を握った事実は際限なく」¹¹あるため、「出草そのほか彼等（筆者注：原住民）の非行に対して、官憲より往々極刑に処せられた」¹²こともある。このような状況が、原住民の反抗心をかき立てる原因となった。

(3) 蕃婦関係¹³：理蕃警察や独身者が蕃婦と関係を持つ例は少なからず、この関係も霧社事件の一因となっている。警察近藤儀三郎が霧社事件の画策者「モーナ・ルダオ」の妹「テワス」を娶り、花蓮港に転勤した際にテワスを連れて行ったが、その後テワスを残して行方不明となった。残されたテワスは故郷に帰ったが、戸籍が近藤家に入っていないため、待遇が悪く再嫁しても不遇であった。以上は「モーナ・ルダオ」が霧社事件を画策した原因の一つとされる。

(4) 労役の強制：蕃地開発にあたって、道路の新設や駐在所などの工事に際しては原住民に労役を課した。しかし、過酷な労役によって耕作や家事もできず、与えられた賃金も少なかったため、原住民の恨みを買ったのである。

(5) 凶蕃の画策：

¹⁰ 同前注、p.450-460

¹¹ 近藤正己（1992）「台灣總督府の「理蕃」体制と霧社事件」『近代日本と植民地2 帝国統治の構造』、岩波書店、p.41

¹² 同注5前掲書、p.452

¹³ 鈴木氏の著書には「蕃婦関係」と記されているが、鄧相揚（2000）、石丸雅邦（2008）、下山一（2011）や保羅・D・バク萊（2020）によれば、隘勇線の前進を順調にするため、状況によって理蕃警察と蕃社の有力者の娘と結婚することを奨励し、この行動を「政略結婚」として捉えている。特に、霧社事件と関わっているテワスの婚姻の破綻について、蕃婦関係における政略結婚の問題として捉えることが多い。故に、本章では蕃婦関係を「政略結婚」の意味として扱い、理蕃政策の一部とする。

①「マヘボ」社頭目「モーナルダオ」父子の反抗：事件の指揮者である「モーナルダオ」（以下「モーナ」と表記）は元々日本人に対して反抗心があった。さらにマヘボの祝うべき結婚式において、モーナの子「タダオモーナ」（以下「タダオ」と表記）が吉村巡査にお酒を勧めたのに、タダオの手に付いた家畜の血を嫌がる吉村はタダオを殴打してしまい、逆にモーナ一家を怒らせて殴打された。罪を問われ極刑に処される可能性が高かったモーナ一家は、ホーゴー社の青年の画策に同意した。

②「ピホサッポ」と「ピホワリス」の画策：ホーゴー社に属される青年ビホサッポとビホワリスは同じく日本人によって家族を失った青年であるため、他の労役を嫌う者と会合して事件を決議し、ピホサッポが各藩社を駆け回り、モーナもこの時に事件に加わると決意した。

以上のように、霧社事件の原因は遠因と近因が交錯している。より明確に見えるように、上述の原因を表2のように示しておく。

表2 霧社事件の遠因と近因

鈴木作太郎の分類	遠因	近因
膺懲の結果	隘勇線の前進	
	銃器の取揚	
	出草馘首の禁止	
	狩猟生活の喪失	
処罰	理蕃警察の統治	
労役の強制	労役の強制	
蕃婦関係		テワスの政略結婚
凶蕃の画策		モーナ父子の反抗
		「ピホサッポ」と「ピホワリス」の画策



上述の表における霧社事件の原因は理蕃政策と深く関わっており、作品「霧社」と「タダオの死」にも書かれている。そのため、次節では「霧社」をはじめ、作品内ではどのような描写を通して霧社事件の原因を表しているかを、歴史的資料との比較を通して考察する。特に、日本人と原住民の関係性を通して、坂口は霧社事件をどのように再解釈したかを明らかにする。

第2節 「霧社」—抑圧された理蕃警察と原住民

1. 理蕃警察の表象—佐塚と花岡兄弟の「父子関係」を中心に

「霧社」は実在する人物の花岡一郎・二郎と日本人警察官である佐塚愛祐を主人公として、霧社事件前後の蕃地を描いた小説である。前述通り、坂口は花岡兄弟と佐塚の関係を「親子関係」と設定しているため、先行研究では主にこの点について論じている。例えば、簡中昊（2016）は作中の佐塚と実在人物の佐塚とを比較し、前者は53歳で死亡したのに対して、後者は45歳で死亡したということから、坂口が作中の佐塚を「慈愛なる父親」として造形するために、年齢を高くした可能性があると述べている¹⁴。作中では、総督府に用意された結婚に悩んでいる二郎に対して、佐塚が以下のように声をかけている。

「二郎。私は、花岡兄弟の父親だったな。忘れないだろうな。私の気持には、今も変わったことはない。お前達二人を、立派な日本人に仕立てるのが、私の務めだと思い、喜んでやってきた。立派な日本人ということは、立派なタイヤルということだね。お前は、これまでよくやってきた。お礼を言いたいくらいだ。」（p.92）

上記の引用文から、佐塚は花岡兄弟を我が子のように可愛がり、彼らの父親役を務めていることがわかる。しかし、「父親」の身分以外に、佐塚は花岡兄弟を「立派な日本人に仕立てる」ことが務めだと語ったのも重要だと思う。花岡兄弟は元々原住民だが、理蕃課の指示によって育てられ、理蕃政策の成功を宣伝する模範兄弟である。ゆえに、彼らを「立派な日本人に仕立てる」こと、すなわち理

¹⁴ 同注2 前掲論文、p.145-146

蕃を成功させることができ、佐塚の務めである。また、上記の「立派な日本人ということは、立派なタイヤルということだね」という言葉は、皇民化の思想が反映されていると考えられる。皇民化は前章で論じたように、被植民者を大和民族の文化と同化させることである。ここではタイヤル族が日本人のように振る舞うことで、「立派なタイヤル」として評価されることも皇民化政策の影響を反映していると言えよう。つまり、佐塚は花岡兄弟の父親である一方、彼はまた理蕃警察としての役割も忘れず、理蕃を成功させることを自分の務めとしていることが見られる。

一方で、花岡兄弟も佐塚のことを父親のように慕っている。小説の最初に、二郎は佐塚に原住民が子供を出草したことを報告する時、「事件の起る度に、佐塚はそんな眼（筆者注：暗い眼）をした。二郎は、この人は、いい人なのだ、との度に、懐しい思いを重ねていた」（p.12）と思った。また、二郎は巡回試験を受ける際に、佐塚の家で勉強したり雑談したりした描写を通して、二人の仲の良さも窺える。そして、二郎が理蕃課に勝手に結婚相手を決められ、佐塚に言っても無駄だと落ち込んだ際に、一郎は「二郎から、佐塚への不信を聞いた。二人の父親としての、佐塚へ持った不信は、もう、すべての日本人への不信だった」（p.124）と言った。つまり、佐塚は花岡兄弟からいい人だと認識され、「二人の父親」のように慕われていると言える。このように、佐塚と花岡兄弟の「父子関係」は一方的ではなく、お互い「父親」と「子供」という認識に基づいて成立しているのである。

しかし、互いに「父子関係」を受け入れても、その認識は果たして同じだろうか。佐塚は花岡兄弟を可愛がりながら、彼らを「立派な日本人」に育てる義務があるため、「親」というレトリックで上位の立場を示すのに対して、花岡兄弟は単純に佐塚の人柄を信頼しているから佐塚を「親」と認めただように読み取れる。例えば、佐塚は花岡兄弟を「我が子」として可愛がっていても、叱られた二郎を見ながら、「叱られている飼犬のように、佐塚には愛しく稚く見えた」（p.93）。ここで二郎を「飼犬」に例える表現は、二郎を従属的な存在として見なしているニュアンスを含んでいると考えられる。また、花岡兄弟がマヘボに転勤し佐塚の監視から外れた時、佐塚は「花岡一郎、二郎だけは、しっかり握っている、つもりになりたかった」（p.137）と語ったところから、「しっかり握っている」とい

う花岡兄弟を自分の支配下に置きたいという発想が見られ、彼らを自分の子供のように思ったが、実際は対等な親子関係にあるとは言い難い。つまり、佐塚と花岡兄弟の「父子関係」には、親と子、植民者と被植民者の不均衡な力関係が見られる。言い換れば、佐塚が「慈愛なる父親」として描かれていても、彼の言動の中には一支配者としての意識が現れているのである。山路勝彦（2004）は植民地官吏について、彼らが直に現地住民と接触し、日常の全てを監視しながら共に過ごせば、愛着が湧き、現地住民を単なる訓化対象としてみなすことができなかったと述べた¹⁵。山地氏の論点に従えば、佐塚は花岡兄弟と接触することで、二人に対して「父親」のような感情が生じた一方、理蕃警察の肩書きを持つ彼は理蕃を成功させる使命や義務もあるため、植民者としての意識もあつただろう。また、山路氏によれば、「親子」というレトリックは明治期から存在し、最初は発展段階の下層として原住民を「嬰児」と捉えたに過ぎないが、大正から昭和にかけて、この未開性が「純真無垢」という言葉に変わり、原住民が子供のように「可愛い」存在になったが、これらの言い回しは「支配する側が構成した典型的な修辞法であり、両者の力関係の絶対的な差異を言い表した言辞にほかならない」¹⁶という。つまり、坂口は「父子関係」を通して、日本人警察官と原住民の間にある関係性は、単なる愛情によって構成されたのではなく、植民地支配の権力構造が含まれており、植民者と被植民者の不均衡の力関係を表したのである。

そして、花岡兄弟は単純に佐塚を慕っているため、「子ども」という自己認識を持つようになったが、日本人を「親」と認めたゆえに、日本の教育によって同化されていったことも窺える。例えば、出草について「馘首する、ということに、同族の持っている神秘的な憧憬が、二郎には、いたたまらない恥ずかしさとなつた」（p.15）と、二郎は自身の出自である原住民の伝統文化を卑下し、このような慣習を抱き続けようとする同族に哀憐を湧き出た。また、二郎は自分が日本の教育を受け、警察官講義録を学ぶのは「立身出世のたよりではない。学ぶことによって、自分の内に育っていくものを感じたいのだ」（p.72）と自白している。言い換れば、二郎は日本の教育は出世するための手段ではなく、日本人の精神

¹⁵ 山路勝彦（2004）『台湾の植民地統治—〈無主の野蛮人〉という言説の展開』、日本図書センター、p.129

¹⁶ 同前注、p.96-105

を身につける手段だと考え、学習を通じて自身の内面的な変化を求めるのである。宇野利玄（1981）は原住民に対する教育について、原住民が蕃童教育所などの教育制度を通して、「自己侮蔑にまでいたる自己否定を強いられ、（中略）いわば下等な日本人として自分の出自に対処すべく、具体的には植民地下級官吏の補助員となるべく、レールを敷かれていた」と指摘し、花岡兄弟のようなエリートが最も顕著な例であると論じた¹⁷。この論点を踏まえ、坂口は花岡二郎が佐塚を慕う姿勢を通して、二郎が自己の文化を卑下しただけでなく、日本の価値観を内面化していく過程も表している。このような姿勢を書くことで、植民地支配が被支配者の内面に浸透し、同化を促していたことを示唆しているだろう。

なお、坂口の旧識である中山清も日本人を「親」として認めた一人で¹⁸、彼の回想録には「ただ小島部長が私を我が子以上に可愛がっていたことは死んでも絶対に忘れない」¹⁹と述べ、歴史上における原住民と日本人警察官の親子関係が証明されている。一方で、坂口にとって中山清は「高砂族そのものを腹の底から軽蔑している風」²⁰であったため、彼女は中山清に対する認識に基いて、花岡二郎と佐塚の親子関係、または日本人に同化された姿勢を書いたかもしれない。このように、佐塚への信頼に基づいて生じた花岡兄弟の「親子」という認識には、日本人に同化されていく意味合いが含まれていることがわかる。また、史実と照らし合わせると、坂口は昭和期の認識をもって霧社事件を再構築し、中山清という身近な模範人物を借りて、花岡二郎の心境を書き出した可能性が高いといえよう。

2. 理蕃警察のもう一つの表象—政略結婚を通して

第1節で述べたように、日本人警察官と原住民女性の政略結婚が霧社事件の引き金の一つであった。特に近藤儀三郎（以下「儀三郎」と表記）とモーナの妹、テワスの婚姻問題が注目を浴びている。「霧社」における儀三郎とテワスの婚姻

¹⁷ 宇野利玄（1981）「台湾における『蕃人』教育」『臺灣霧社蜂起事件—研究と資料』、國史館、p.99

¹⁸ 鄭相揚（2001）『抗日霧社事件をめぐる人々』によると、中山清、本名ピホ・ワリス。彼はセイダック族で、公学校在学中に成績が優良なため、花岡兄弟らに続いて日本の同化教育を受け、教化成功の模範人物とされた者である。1932年に花岡二郎が残した妻—初子と結婚し、川中島で医師として働いた。坂口禪子（1978）「"蕃地"との関わり」から、二人は戦後でも文通をする仲であった。

¹⁹ 高永清（1988）『霧社紺桜の狂い咲き—虐殺事件生き残りの証言—』、教文館、p.187

²⁰ 坂口禪子（1969）「一九四五年の彼ら—霧社の思い出—」『中国』第69号、p.42

関係について、小辻菜々子（2016）は、坂口が複数の登場人物の視点を通して儀三郎の葛藤を多角的に描写することで、植民者もまた植民地支配の被害者の一人であると提示していると論じた²¹。筆者は小辻氏の論点に賛成している。ただし、坂口の霧社事件の再解釈において、儀三郎に関する虚構はどのような意図が含まれているのかについては、まだ検討する余地があると思う。

まず、儀三郎とテワスの婚姻に関する史実を紹介する。儀三郎はテワスを連れてモーナの勢力外である花蓮港に転勤したが、その後誤って崖から転落し行方不明となった。しかしその死体は見つからず、警察から行方不明だと説明されても、モーナ一族は儀三郎が故意にテワスを捨てたと信じていた²²。なぜなら、儀三郎の兄である近藤勝三郎（以下略：勝三郎）が、かつてパーラン社とホーゴー社の娘を同時に妻と妾にした後、両者を捨てて花蓮に去ったことにより、モーナは儀三郎と政略結婚に対する不信感を深めてしまっていたためである。また、日本当局は同じ時期に政略結婚させられたピッコ・タウレとヤワイ・タイモには極力支援したのに、テワスにだけは経済的な支援が少なく、不公平な対応をしたため、モーナ達の怒りを買ったのである²³。

鈴木作太郎（1932）の歴史書によると、儀三郎が転勤した理由は「土地拂下問題で立腹し」花蓮港に転勤することとなつたためである²⁴。しかし、坂口は「霧社」において、儀三郎の心境と人物像を詳しく描写し、独自の解釈をした。小説「霧社」ではまず儀三郎の転勤理由の改作が見られる。作中において、儀三郎は花蓮港にいる兄に呼ばれ、自分の希望で転勤したいのに、モーナの怒りを恐れ「佐塚に転勤させられた」と嘘をついた。そのせいで、モーナの長男のタダオは勘違いして、儀三郎の転勤を撤回させようと佐塚に詰め寄った。佐塚が人質にされかけるほど事態が緊迫したため、佐塚は「何故、近藤（筆者注：儀三郎）は自分の希望だと説明しない」と思い、「日本人仲間で、恐るべき陥穰を設けてどうする気だ」（p.34）と儀三郎に怒りを向けた。儀三郎が保身のために嘘について上司を陥れたことから、彼の卑怯な性格が窺える。また、佐塚は危険に晒され、「領台の瞬間に始った、日本人対蕃人との、しのぎをけずる闘争は、常に、底流を洗

²¹ 同注3前掲論文、p.61-66

²² 同注18前掲書、p.70

²³ 同前注、p.70

²⁴ 同注5前掲書、p.454

い、時に奔っている。その怖るべき岩石が、眼にみえるような気がした。ぶつかれば、体もくだけよう。避けるすべはないものか」（p.35）と思った。このように、儀三郎の自己勝手な行動によって原住民が動き出し、佐塚を危険に晒した結果、元々日本人と原住民の間にある不穏な平和をさらに脅かすこととなった。このことから、坂口は儀三郎を卑怯者と設定した上で、儀三郎の転勤を通して日本人と原住民の間にある根深い不信を表したと考えられる。

それから、儀三郎はテワスを連れて花蓮港へ転勤した。鈴木氏の著書では、「その時彼は妻『テワス』を伴れて赴任したのに、夜宿すべき家さえなかったので、その冷遇を怨み次いで花蓮港に戻り辞表を提出した」と書いており、さらに儀三郎がテワスに心中するのを口説いたこともあったそうである²⁵。小説「霧社」においてもこの経験が書かれているが、坂口は儀三郎が受けた冷遇のほかに、テワスとの男女問題を加え、儀三郎の行方不明となった理由を再解釈した。まず、モーナは花蓮港へ連れて行かれたテワスから、儀三郎が転勤してからひどく変わったという便りを受け取った。そのため、彼はそれを悪霊の仕業だと思い込んで、心配になって占い師のユーカを尋ねた。この件を聞いた佐塚は「迷信ぶかい蕃社の男達が、ユーカが言った言葉で、何ごとか企まぬともいえぬ」（p.40）と思い、後日ユーカのところを訪れた。そして、ユーカから、悪い霊はテワスだと告げられた。そこで、佐塚はテワスのがっしりとした体格と儀三郎の中位の体格とは釣り合わないこと、新婚した際の儀三郎がテワスの強い性欲に悩まされたことを思い出し、儀三郎が転勤を選んだことに納得した。それから、佐塚は霧社にある雑貨屋から、儀三郎が実際に日本に帰りたがっていたため、テワスとの結婚が気の毒だと聞いた。このように、坂口は男女問題を創作することで、日本当局が統治の便宜上、儀三郎をテワスと結婚させたが、儀三郎の個人の悩みを顧慮せず、さらに政略結婚における男女や人種差異の問題を無視し、ただ儀三郎を利用したことを強調したと言えよう。

次に、坂口は花蓮港へ行った儀三郎とテワスを中心に、儀三郎が行方不明になるまでの過程を創作した。儀三郎は今まで霧社では兄の「生蕃近藤」の名にすがり、庇護を受けたものの、花蓮の玉里では冷遇されたことに苛立ち、よく酒に溺れた。酒乱の癖がある儀三郎はテワスに「テワス。お前は不憫の奴じや。俺は捨

²⁵ 同前注、p.454

てはせんぞ。安心しとるがいい」（p.42）と言ったが、酒に酔ってよくテワスを罵ったり、泣いて心中を誘ったりした。テワスはこんな夫に愛想をつかしており、儀三郎もテワスの空惚けた態度に腹立ち、よく喧嘩していた。そして、儀三郎は山奥へ赴任することになり、タイヤル族のテワスを連れてアミ族の縄張りに行くのは不利だと強調し、テワスを兄の勝三郎に預けた。しかし、勝三郎は弟の要件を聞き、儀三郎がテワスを離れる本音を見抜いた。

(筆者注：勝三郎は) ひどく事務的で冷い口調だった。この冷たさがあるから、二人の蕃婦を、容易に離別できたのか、蕃婦を妻にした長い年月に、あたたかさをすりへらしたのか、と儀三郎は思った。（中略）自分は、彼程、冷酷になれない。冷酷になれないから、これまで苦しんで来て、テワスの苦痛を少くするために、一生一度の芝居も演じようとしている。（p.79）

下線部から、儀三郎は兄の冷酷さに対して、それは元からの不人情か、または原住民女性と結婚した結果かと思った。つまり、儀三郎は自分の政略結婚に苦しんでいるため、兄に自分の感情を投影し、政略結婚したから冷酷になったと思った。また、儀三郎は下山警部や兄のように無情になれないから苦悩し、テワスの感情を考慮した上、妻を捨てるではなく、行方不明という芝居を演じることを選んだ。言い換えれば、政略結婚で苦痛を感じた儀三郎は、下山や兄のように堂々と妻を捨てることができないから、行方不明という逃げ道を選んだ。このように、坂口は臆病者の儀三郎を通して、一部の日本人警察官も政略結婚によって苦しんでいたことを強調しようとしたと考えられる。

そして、テワスから離れて山奥に赴任してから、儀三郎は大変おとなしくなり、酒も飲まず真面目に働いた。人々は豹変した儀三郎を見て、昔の荒々しさは「嫌いな妻へ、夢中で、精一ぱい抵抗していた、人間近藤の傷ましさ」だと思い、「異人種を妻にしている者の、魂のわびしさに、同情した」（p.82）のである。すなわち、周りの人から見れば、儀三郎の元々の醜態は「異人種の妻」に由来するだと思われていた。その後、儀三郎は忘年会で酔った演技をし、帰り道に崖から落ちたふりをして、兄の手配により中国へと逃げた（p.84-86）。すなわち、坂口は儀三郎の行方不明に対して「逃亡」という虚構を作り上げた。

以上の考察によると、史実では儀三郎が生死不明であることに対して、坂口は「逃亡」という虚構をでっち上げ、逃亡の理由を政略結婚という重荷から逃れた。いということにした。簡氏が「坂口の『愛情』は原住民のみならず、山地の勤務者にも向けられているのであろう」²⁶と論じたように、このような虚構を作ったのは、坂口が蕃地生活で理蕃警察の葛藤を肌で感じたからだろう。従って、坂口は儀三郎の虚構を通して、国家という権力構造が個人に対する抑圧を表現し、個々の関係における破綻が霧社事件に繋がったと示唆していると考えられる。

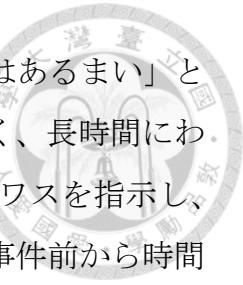
なお、小説ではテワスが儀三郎と別れて暮らすことに、「何の未練もなかった」(p.80)と書かれている。さらに儀三郎が行方不明になった知らせを聞き、「肩の荷のおりたような安らかな表情さえ浮べた」(p.86)ことから、テワスも儀三郎との政略結婚に苦しんでいたと推測できよう。そして、歴史と違って小説「霧社」においてテワスの結婚はモーナの策略であった。元々テワスの結婚に反対したモーナは日本人を憎んでいるから、テワスに「幸せになるな」と言い、「お前は、近藤儀三郎に、食いつけ、ゆさぶれ」(p.175)と指示した。つまり、モーナは政略結婚を利用して儀三郎を狂わせ、テワスの幸せを犠牲にした。言い換れば、テワスが日本人と原住民の板挟みになり、個人の幸せが奪われた人物に造形されている。小辻菜々子(2016)はこのようなテワスが、家父長制と帝国の二重権力に抑圧された女性の立場を表していると論じた²⁷。この指摘は的確だが、さらに考察を進めると、テワスは家父長制によって自らの幸せを犠牲にしただけでなく、儀三郎と同様に、共同体の利益のために個人の幸福を差し出す存在として描かれていると考えられる。この点において、テワスもまた蕃社内部の権力構造に抑圧された個人として強調されていると解釈できる。

また、歴史上において、総督府は事件の原因を「少数迷蒙の徒」が不満に乘じて「軽挙妄動を敢えてし、血氣の輩之に附和雷動して」²⁸起こしたと霧社事件を「突発的な出来事」だと結論づけた。しかし、霧社へ調査した河野密(1931)は台車線路の破壊の跡、掩堡の名残などから、霧社事件は「既に堅く計画的なりとの確信を得たのである」と事件が計画的なものだと指摘している。また、河野氏

²⁶ 同注2前掲論文、p.155

²⁷ 同注3前掲論文、p.65

²⁸ 台湾総督府編(1999)『詔敕.令旨.諭告.訓達類纂(二)』、成文出版社、p.597-599



は「思うに斯くの如き大事件に至ったのは、決して一朝のことではあるまい」と述べた²⁹。つまり、霧社事件は一朝一夕に計画されたものではなく、長時間にわたって計画された事件である。小説の内容に戻れば、モーナがテワスを指示し、政略結婚を通して近藤儀三郎を苦しめようとするところから、彼は事件前から時間をかけて復讐を計画してきたことが示唆される。つまり、政略結婚もその計画の一環として遂行されたものだと考えられる。このように、坂口は政略結婚の史実を利用して、霧社事件を計画的な行動だと示そうとしていることがわかる。

第3節 「タダオ・モーナの死」—撫育と同化政策の限界

1. 理蕃警察と撫育—権沢とタダオの「父子関係」を通して

「タダオの死」は霧社事件後に権沢巡査がタダオのことを回想する作品で、タダオの少年時代から事件に至るまでの過程を顧みた小説である。まず、権沢巡査とタダオについての史実を紹介する。権沢巡査、本名権沢重次郎はマヘボ、ボアルン、タウツアなどの駐在所で勤務したことがあり、霧社事件当時はトロック駐在所の巡査部長であった³⁰。鈴木氏の歴史書では、事件の終盤にタダオが一度投降を考え「権沢さんのところに行こう」と言い、一方で権沢もタダオの投降を待ち続けていたため³¹、二人の良好な関係性が見られる。

また、タダオはモーナ・ルダオの長男であり、彼の生い立ちに関する資料は少ないが、霧社事件の近因とされる「吉村巡査殴打事件」³²と彼の最期についての記録が多く存在している。タダオは同族と共に霧社事件を引き起こしたが、敗北を知る彼は抵抗としてマヘボの岩窟に立てこもり続けた。妹のマホン・モーナは警察に命令され兄のタダオに投降を説得し続けたが、タダオは最後に妹が持参した酒を飲み、妹に遺言を残し、辞世の歌と踊りをしてから、ほかの同伴と山奥へ去り縊死した³³。しかし、タダオの生い立ちに関する歴史資料が少ないにも関わ

²⁹ 河野密 (1931) 「霧社事件の真相を発く」、『中央公論』46 (3) 三月號、p.346

³⁰ 中村ふじゑ (2000) 『オビンの伝言—タイヤルの森をゆるがせた台湾・霧社事件』、梨の木舎、p.70

³¹ 同注5前掲書、p.477

³² この事件は第1節で述べたように、同族の披露宴でタダオは手が家畜の血で汚れたため、好意に吉村巡査にお酒を勧めたのにあえて叩かれ、侮辱されたと思いながら吉村を殴った事件である。その後、タダオとモーナは何度も謝罪し事件を収めようとしたが、吉村は受け入れなかつた。

³³ 同注5前掲書、p.476-480



らず、小説「タダオの死」ではタダオの少年時代が書かれ、タダオと樺沢の関係性も詳しく描写されている。そのため、この段落ではタダオに関する虚構を中心に、坂口が霧社事件に対する考え方を分析する。

まず、樺沢とタダオの関係を考察する。「霧社」における佐塚と花岡兄弟のように、樺沢とタダオからも「父子」関係が読み取れる。作品の最初に、樺沢はタダオの死に対して「惜しい男を死なせた」(p.153)と思、死体を見つけた時に体を震わせて号泣した。日本側がタダオを恐ろしい「凶蕃」だと思っていたが、樺沢にとってタダオは「吾子のように慈しんだ、唯一の、愛すべき若者」(p.154)であった。このように、樺沢はタダオを愛する「父親」として造形されていることがわかる。また、「タダオの死」において佐塚も「父親役」として登場し、「タイヤルを子供のように」慈しみ、タイヤルの事件や過失に「父親のように心いためる態」(p.193)であった。このように、坂口は理蕃警察を「父親」のような存在として書いており、彼らが原住民に対して持つ保護的な立場を強調していることが窺える。簡氏は樺沢が「慈愛なる父親の役」を表しており、「霧社」における父子関係が「タダオの死」に再現されたと論じた³⁴。しかし、「霧社」では花岡兄弟が佐塚を「父親」と明言したのに対して、「タダオの死」においてタダオが樺沢を「父親」だと言い切っていない。では、タダオと樺沢の「父子関係」はどのような関係だろうか。親子みたいな愛情関係なのか、あるいは植民者と被植民者の関係だろうか。

「タダオの死」において、本当の父親のモーナ・ルダオの登場が少なく、代わりに樺沢がタダオの世話をした場面が散見される。例えば、作中のタダオはよく樺沢に買い物を頼んだり、狩猟に誘ったりする場面が見られる。特に、タダオが11歳の時に、自分のアイデンティティについて樺沢に相談する様子が書かれており、樺沢を頼りにしていることが窺える。簡氏はこのことについて、坂口は「『文明』を象徴する『慈愛なる父親』の日本人警察官を登場させるため、『本当の父』や『野性の父』を象徴できるモーナ・ルダオを『欠席』させ」たと論じた³⁵。筆者はこの論点に賛同しているが、果たして樺沢は単なる「慈愛なる父親」なのか。

³⁴ 同注2前掲論文、p.148

³⁵ 同注2前掲論文、p.150

権沢は小説の最初にタダオの死を聞いた時、「肩をふるわせて嗚咽した」ほど悲しみ、タダオが「吾子のように慈しだ、唯一の、愛すべき若者」だ（p.154）と思った。すなわち、権沢は愛情を持ってタダオと接したと思ったことが窺える。しかし、権沢の愛情には、単なる慈愛だけでなく、植民者と被植民者の関係性も見られる。タダオが少年だった頃、権沢に「なぜ、オレ、マヘボのタダオ・モーナですか。どうして、日本内地の子供でないですか」（p.187）と自己認識について質問したが、その後権沢と以下のような会話を展開した。

「…何故、その蕃ザクロはそこにあるんだね。そこにあるから、そこにあるんだろ。どうしようもないじゃないか」しまいに、権沢は、彼自身にも訳のわからないようなことを言った。

すると、少年は、急にいきいきとした顔になった。

「権沢さん。蕃ザクロを掘って、内地へもっていって植えたら、いいね。すると、内地ザクロというだろ」晴ればれした少年の顔だった。

「オレは、内地へゆくよ。内地で暮すよ。すると、もう、マヘボのタダオ・モーナでないね。そうだね。」

その無邪気なよろこびに、権沢がお前がたとえ内地へいっても、マヘボのタダオ・モーナである事実は変わらんのだ、とはいえたかった。少年は、足取りかるく戻っていったが……（p.188-189）

以上から、タダオの日本人になりたい思いが、「慈愛なる父親」の権沢に否定されたことが窺える。無邪気なタダオの前に、権沢は「内地へいっても、タダオ・モーナである事実は変わらんのだ」とは言えなかつたが、彼がタダオの「同化」という願いに対して一線を画したことが窺える。言い換えれば、権沢は確かに「慈愛」を持って接したように見えて、その根底には、タダオが完全に日本人になることはできないという同化政策の限界に対する認識が含まれている。このように、坂口は植民地支配の制度を介して成り立った親子関係には、「慈愛」だけでは語りきれず、植民—被植民という非対称な力関係が潜んでいることを書いてい る。

また、以上の引用文から、少年のタダオが理蕃の影響で「日本内地の子供」になりたいと思い、日本に憧れる姿勢が見られる。作中のタダオは「マヘボ教育所で抜群の成績をしめした秀才」(p.170)であり、当時の教育所で日本語の教育以外に、同化政策の普及も行なっていた³⁶。ゆえに、タダオが日本の教育によって、日本に対する憧れを抱くようになったと考えられる。言い換えれば、タダオは理蕃政策の撫育によって「日本の子供」というアイデンティティを形成したため、日本人である樺沢を父親のように頼るようになったと言えよう。このように、タダオの言動と樺沢との関係の裏腹には、撫育政策の影響が強く反映されていると考えられる。

そして、作中のタダオは苦悩を抱えたまま成人した。彼は撫育政策の日本語教育によって、流暢な日本語が話せるうえ、一人の時にタイヤル語ではなく「日本の標準語で独白する」(p.219)ようになった。作中では「日本語の習得による日本人化—皇民化とよばれた」(p.204)と日本語の習得と皇民化の関連を説明している。この点から、駒込武(1996)が提出した「日本語を日本人の精神的血液」とする「言語ナショナリズム」³⁷の働きが見られる。つまり、坂口はタダオが日本語の習得によって、日本人化していくことを表した。しかし、タダオは頭目モーナの長男であり、マヘボ社の最高指導者でもあるため、彼はリーダーとして蕃社を率いる責任がある。そのため、彼は「マヘボのモーナ・ルダオの長子として生れた、そして、かく成人し、かく在る、というおのれのすべてに、嫌悪があり…」(p.180)と日本人としての自己認識と、タイヤル人としての自己認識の葛藤を表した。

以上の考察によると、理蕃政策の撫育は樺沢とタダオの「父子関係」の形成に深く関わっており、撫育によってタダオが日本に憧れ、樺沢を頼るようになったことが窺える。また、樺沢がタダオの日本人になりたい願いを否定することから、「慈愛なる父親」だとしても、植民者と被植民者には越えられない境界があり、同化政策の失敗も示唆されていると考えられる。さらに、タダオの自己認識の葛藤を通して、理蕃政策の撫育がもたらした影響と問題が見られる。このように、

³⁶ 石丸雅邦(2008)『台灣日本時代的理蕃警察』(國立政治大學博士論文)、p.1-28

³⁷ 駒込武(1996)『植民地帝国日本の文化統合』、岩波書店、p.357

坂口は二人の虚構の関係性を通して、同化政策の矛盾や限界を示唆していると考えられる。



2. 撫育政策のもう一人の犠牲者—花岡一郎を中心に

花岡一郎は作品「霧社」のみならず、「タダオの死」にも登場している。小説「霧社」は二郎を中心に描かれているのに対し、「タダオの死」では一郎の心境がより詳しく描写されている。まず、日本式の制服を着た一郎は「タダオの嫌いな少年」の一人として登場し、タダオに服装について揶揄されたが、一郎は無視してその場を去り、遠いところで「荒城の月」を歌い出した。タダオは「荒城の月」のメロディに惹かれ、「そういう歌を、沢山している一郎に、彼はまたもや、憤懣を感じた」(p.168)と思った。タダオが一郎を嫌った原因は、一郎が日本のことやことをたくさん知っているからである。前節で述べたように、タダオは少年時代から日本人になりたがっていたため、苦しんでいた。そのために、理蕃課の徹底的な撫育によって育てられた一郎に嫉妬したと思われる。さらに、一郎がタイヤルの歌ではなく、日本の歌曲を歌い出したことから、彼は撫育によって同化されつつあることを表しているだろう。

しかし、作中の一郎は撫育によって苦しみ、台中師範学校にいた時の孤独な思い出をタダオに話した。日本の習慣に慣れていないから日本人に笑われたこと、相撲が強いのに、タイヤル人だということで優勝を取り消されたこと。そして町へ散歩に行き、誰も一郎がタイヤルであることを知らないことが一番楽しかったこと。タダオは一郎の言葉を理解できなかったが、「何か、薄明りがみえ、そこに、一郎が立っているような、さびしさ」がわかった(p.224)。このように、一郎は撫育政策によって育てられたが、タイヤル人が故に日本人に疎外され、孤独感を抱え続けた。ここから、第1章で述べた「血族ナショナリズム」による異民族の排除原理が見られ、たとえ撫育の模範人物でも、血筋が異なれば日本人にはなれないことを暗示したと考えられる。また、河野氏の調査報告では、花岡一郎は事件前に、原住民の初任給が内地人と本島人より低いことをこぼしており、「民族的差別待遇に対して彼の懷いた不平こそ、知識的に教養された霧社蕃人の共有する感情ではなかつたろうか」と指摘している³⁸。この論点を踏まえ、小説にお

³⁸ 同注29 前掲論文、P.350



ける一郎が感じた寂しさと受けた差別の描写は、民族的差別待遇の存在を浮き彫りし、事件に繋がった一因として提示されたのだろう。このような一郎の内面についての描写は、霧社事件の必然性を語ったと考えられる。

また、作中の「吉村巡査殴打事件」において、タダオは吉村に叩かれたことに悲しみ、「幼い子供のようにベソをかき、その泣き面をそむけもせず、一郎の前に両腕をさしのべていた」(p.196) 時、一郎が事件の原因はその両腕についた家畜の血だと気づいた。一郎はタダオの素直さに心を打たれ、今まで日本から教わった「文化的エチケット」を「何か薄汚れた衣を一枚、着せられた」ように思った(p.197)。このように、一郎がタダオの純粋さにふれ、日本の教育や文化的エチケットを「薄汚れた衣」と感じたことから、撫育政策が本質的な同化を達成できなかつたことが示唆されていると考えられる。つまり、撫育政策は表面的な変化に留まり、被植民者の内面を変えることはできなかつたと示唆されている。さらに、樺沢巡査は霧社事件後、凶蕃が三八式銃の扱い方を知ったのは、分室の職員の一郎が教えたのではないかと推測し、以下のように語った。

飼いならしたつもりの狼は、やはり野性に戻ったのだ。彼らは、やはり、タイヤル人だった。その単純で厳然とした事実の、何というおそろしさだろう。佐塚の慈悲も、彼らの血をかえることはできなかつた。口惜しいけれども、一郎、二郎を責めることはできない。彼らがタイヤルである明確な事実を、忘れていた手落ちなのだ。 (p.202)

上述の引用文について、小辻菜々子(2016)は、佐塚の慈悲が花岡兄弟の原住民としての血液を変えられないことによって、坂口の優生学の思想が見られる。そのため、坂口は支配者の政策を批判しながらも、日本の支配を正当化する主流イデオロギーから脱却できていないと論じた³⁹。しかし、坂口は本当に支配のイデオロギーから脱却できていないのだろうか。坂口禪子(1969)は蕃地での生活を通して、原住民から「文明否定、原始生活への復帰」を強く感じて、さらにタイヤル族のしきたりに従う女性を見て、「女達の心に根をはっているタイヤルの魂

³⁹ 同注3 前掲論文、p.35-36

なのだ。原始のこころともいえる。私は嘲笑することができない」と書いた⁴⁰。つまり、坂口は原住民の本来の姿を尊重しつつ、同化政策という一方的な文明化に対する懐疑的な態度を表している。作中においても、一郎が撫育教化による苦しみや文明化に対する批判を語る場面があることから、坂口は支配的な主流イデオロギーを無批判に従うのではなく、植民地支配の本質的な問題点に目に向いていると考えられる。さらに、下線部の樺沢の言葉には一見支配者的な目線が読み取れるものの、その裏では同化政策の限界と失敗を示唆していると解釈できる。このように、坂口は理蕃警察の支配者としての立場を忠実に書きつつ、同時に理蕃政策に内包する問題と矛盾を書き出したと考えられる。

3. 膽懲がもたらした結果—ピホ・サッポを中心に

「タダオの死」には特に霧社事件の画策者—ピホ・サッポ（以下「ピホ」と表記）についての描写がある。小辻氏によれば、「タダオの死」におけるピホは「弱者」として造形され、タダオとは異なる植民地支配下の悲劇を提示した人物であると論じた⁴¹。筆者はこの論点を踏まえて、ピホに関する虚構に含まれた坂口の意図をさらに検討する。まず、ピホに関する史実を紹介する。鈴木氏によれば、ピホはホーゴー社の有力者の次男であり、「性極めて狡猾で官命に服しないから、常に注意人物」⁴²であった。また、ピホは従兄が馘首禁止の命令を破り、処刑されたことで、日本人に対する怒りがさらに増したとされる。それから、ピホは万大社の「ルピナウイ」と入夫婚姻したが、ルピは同時に同社の男性と姦通していた。蕃社の風習として、馘首した者が男として認められるため、ルピを取り戻すためにピホは何度も馘首を企てたが、警察官に発覚してよく処罰された。そして 1930 年 10 月 24 日の夜、ピホはほかの若者と酒を飲みながら、日本人に対する不満を語った後、翌日に霧社事件の実行を決議し、各社の頭目に事件の加担を勧誘した⁴³。

しかし、「タダオの死」におけるピホは史実と異なっている。小説ではピホの父親がホーゴー社担当の警察を馘首したため、隣家にいたピホ以外一族が極刑を

⁴⁰ 坂口禪子（1969）「一九四五年の彼ら—霧社の思い出—」『中国』第 69 号、p.44

⁴¹ 同注 3 前掲論文、p.49-53

⁴² 同注 5 前掲書、p.458

⁴³ 同注 5 前掲書、p.458-459

処されたが、ピホだけは見逃された。モーナは生き残ったピホを見て、タダオに「お前の、友達にするがええださ。奴は、みどころのある男になるだで。親を死刑にされた子供が、どげな毒をもって育つだか、日本人は、甘いもんでや」(p.165)と言った。この言葉から、モーナはピホが親を失ったことで、その経験から育つ「毒」としてのピホの反抗心や敵意に注目し、息子のタダオに友達にすると勧めた。つまり、ここではピホの虚構を通して、馘首の禁止という「膺懲の結果」によって、さらに原住民の抵抗を生んだことを強調したいと考えられる。

だが、タダオはピホのことを好きになれなかった。ピホが18歳の時に、姦通の癖がある「ルピナウイ」のところへ養子に行ったことに対して、タダオは「ピホのように、不運を初めから背負っている男にとって、そういう婚家こそ、彼の墓所なんだ」(p.168)と思った。ピホが不運になったのは膺懲⁴⁴による結果だと考えれば、タダオの言葉から、膺懲によってピホの人生が狂わされたことが窺える。タダオの予測通り、ピホは養子になってから散々な目にあった。史実通りに、ピホはルピの注意を引くために万大社の子供を馘首したが、坂口は他の原住民の目線を通してピホの行動について語った。ピホが子供を馘首したのに対して、ルピと姦通していたパワンノリカン(以下「パワン」と表記)は仕返しに成人男性を三人馘首した。人々はパワンを「たくましげな男」だと褒め称え、ピホに対して「姦夫に、女ごをとられ、馘首でも、みごとに負けおったの才」(p.175)と言った。つまり、ピホは養子になってから同族の人々に見下され、日本人にもタイヤル人にも嫌われていた。そして、ピホが日本人を馘首した噂が広がり、彼は山中へ逃げ込んだ。

タダオは山中に逃げ込んだピホを発見し、弱ったピホをマヘボの洞窟へ匿った。日本人に「根ぶかく烈しい」憎悪を抱くピホは「彼の運命の狂いを、内地人のせい」にして、「蛇のように執拗に、彼らのスキをうかがう姿勢になる」(p.228)。したがって、ピホはタダオに日本人が今まで敢行した「隘勇線の前進」とこれからの「集団移住」に対する批判を聞かせ、日本人が原住民を山から追い払おうとしていると言った。タダオはピホの言葉を聞き、モーナと相談してから霧社事件を起こすと決めた。このように、ピホは膺懲の結果によって、不幸な人生を歩ん

⁴⁴ 耿懲は表2でまとめたように、「隘勇線の前進」「銃器の押収」「出草馘首の禁止」を進むために、原住民を殺傷し、または屋敷を焼棄することである。



でいたが、最後に積もってきた日本人に対する憎悪を糧に、タダオに霧社事件を引き起こさせた。つまり、坂口はピホの虚構を通して、膺懲がもたらす霧社事件の必然性を語ったと考えられる。

第4節 結び

本章では、「霧社」と「タダオの死」における日本人と原住民の関係性の虚構を通して、霧社事件の表象を考察した。まず、「霧社」では主要人物の佐塚と花岡兄弟の虚構の親子関係について考察を行った。作中における佐塚の言葉を通して、彼は「父親」でありながら、理蕃警察でもあるため、植民者としての上位の姿勢が見られた。一方で、二郎が佐塚を「父」として憧れているため、日本の教育を通して内面から同化したがる姿勢が見られた。歴史資料と坂口の身辺事情を調べたところ、彼女は昭和期の認識に基づいて、植民者が愛情のみならず、被植民者に対する感情の中では常に不均衡な力関係が働いていることを表現しようとしたと考えられる。また、親子関係以外に、作中における儀三郎とテワスの政略結婚を考察した。儀三郎の転勤の虚構を通して、坂口は日本人と原住民の間にある根深い不信を表した一方、儀三郎の「逃亡劇」を通じて、坂口は国家の利益のために犠牲された個人の意思を書き出した上、政略結婚に抑圧されたのは被植民者のみならず、植民者も同じであることを強調したといえよう。そして、テワスも蕃社のために、個人の幸せが犠牲されたことから、彼女も群体の利益のために犠牲になった個人であることがわかった。このように、坂口は「霧社」における政略結婚の描写を通して、植民地支配における「群体／個人」の対立関係を表したと考えられる。

一方、「タダオの死」ではまず樺沢とタダオの父子関係について考察した。作中では理蕃警察が「父親」としての役割が強調され、少年のタダオが「父親」の樺沢の影響を受けたところから、理蕃警察の「父親」としての役割が同化政策の一環として機能していることがわかる。また、少年のタダオの自己認識の葛藤から、同化政策の失敗と影響が見られる。さらに、撫育の模範人物である花岡一郎を通して、撫育政策は表面的なものにとどまり、原住民の内面を変えることはできないことを暗示した。つまり、坂口はこれらの人物を通して、撫育政策の限界や失敗を示唆していると考えられる。なお、作中におけるピホ・サッポの虚構を

通して、膺懲の結果が個人に不幸をもたらし、それが事件の必然性につながることが見られる。

本章で「霧社」と「タダオの死」を考察した結果、坂口は霧社事件を書いた際に、単に公式的記録に依拠するのではなく、植民地支配の下で翻弄された一人ひとりの心境を創作し、理蕃政策が個人にもたらした葛藤に焦点を当てていることが明らかとなった。両作品における理蕃警察と原住民の「父子関係」はともに同化政策と関わっており、この関係性には植民者と被植民者の不均衡な力関係を象徴していると言えよう。また、ほかの関係性も取り上げて考察したところ、「霧社」では儀三郎とテワスの心理描写、「タダオの死」ではタダオ、一郎とピホのそれぞれの葛藤や思惑を通して、植民地支配における個人の悲劇を露呈している。そして、個々の悲劇の積み重ねによって、霧社事件の必然性が浮かび上がってくる。つまり、坂口は作中の様々な人間関係と個人描写を通して、霧社事件を単なる歴史事実として捉えたのではなく、その時代に生きた個々の人間の交錯した葛藤を書き出している。このように、坂口は霧社事件という歴史的事象を個人の物語として再構築することで、植民地支配がもたらした影響の深さと、その時代を生きた人々の苦悩を表現したといえよう。

第3章 ジェンダーと蕃地の表象—植民地支配と性差を通して

本章では、「ビッキの話」（1953）「蕃地の女ールピの話」（1956）（以下「ルピの話」と表記）「蕃婦ロポウの話」（1960）「蕃地のイヴ」（1961）の四つの短編小説を中心に、ジェンダーの視点を通して、坂口禪子における蕃地の表象を考察する。これらの小説は坂口が身近な人をモデルにして創作したものであり、歴史上の「無名の者」の生活が描写されている。この創作方法について、小笠原淳（2015）は坂口の蕃地小説にモデルがあるものの、虚構の小説として仕上げられていると論じた¹。また、これらの小説における登場人物の現実性の確認が困難であるため、本章では登場人物を虚構の人物像として捉え、考察を行う。

従来の先行研究は、主に「蕃婦ロポウの話」を中心にジェンダーの視点から考察してきた。例えば、李文茹（2006）は「蕃婦ロポウの話」について、原住民女性の視点で霧社事件を描いた点を評価した。しかし一方で、作中で原住民女性の性欲表現を過度に強調したことにより、植民地支配における性暴力の問題が曖昧化されてしまうと指摘している²。彭妍蓁（2013）は坂口禪子が「蕃婦ロポウの話」を通して、人権の尊さと民族を超えた相互理解の重要性を示唆していると論じた³。また、複数の作品を取り上げて女性像について考察する研究は、管見の限りでは楠井清文（2014）「坂口禪子「蕃地」小説の世界—熊本時代の執筆活動を中心に—」と、李文茹（2015）「坂口禪子の台湾蕃地作品における女性像と植民地的ノスタルジアの政治性」という論文がある。楠井清文（2014）は「ルピの話」と「蕃婦ロポウの話」を取り上げて、坂口は原住民女性の描写を通して、女性を束縛する性規範に対する批判を表していると論じた⁴。李文茹（2015）はジェンダーやエスニシティを視座に、「ビッキの話」「ルピの話」「蕃婦ロポウの話」における女性像を分析した。その結果、坂口が「植民地的ノスタルジア」を抱えながら、「山地で原住民女性との触れ合いによって、原住民女性のセクシュアリティ

¹ 小笠原淳（2015）「坂口禪子の台湾蕃地小説とその系譜：戦中と戦後を通して」、『日本台湾学会報』、p.176

² 李文茹（2006）「ジェンダーから見た台湾原住民の「記憶」と「表象」—霧社事件を中心に」『社会文学』第23巻、『社会文学』第23巻、日本社会文学会、p.106-107

³ 彭妍蓁（2013）「坂口禪子「蕃婦ロポウの話」論」『戦争の記録と表象：日本・アジア・ヨーロッパ』、関西大学出版部、p.163

⁴ 楠井清文（2014）「坂口禪子「蕃地」小説の世界—熊本時代の執筆活動を中心に—」、『論究日本文学第100期』、立命館大学日本文学会、p.168

を描写することで、自分ならではの文学世界を創出した」と論じた⁵。このように、ジェンダーの視点から考察した先行研究は、主に女性像の描写とジェンダー規範の問題に注目している。しかし、小説「蕃地のイヴ」は従来看過されてきたため、坂口の蕃地小説における女性像の全体的な特徴や、蕃地が舞台となる意味については、まだ考察の余地があると思う。

一方、ジェンダーの課題において、女性像だけでなく、男性像を検討する必要もある。飯田祐子（2023）はジェンダーを構成する性差について「男性による女性の抑圧という問題だけでなく、男性自身が〈男性らしさ〉の規範によって生きにくい状況に置かれるという問題もある」と論じた。「ビッキの話」におけるビッキは、障害者で支配者に抑圧された存在として描かれおり、まさに〈男性らしさ〉の規範によって生きにくい状況に置かれた男性像の一例として考えられる。したがって、本章では「ビッキの話」も取り上げて、ビッキと植民者の男性像を考察する。

そこで、本章ではまず1953年に発表された「ビッキの話」における男性性の抑圧について分析する。次に、「ルピの話」「蕃婦ロポウの話」「蕃地のイヴ」の三作品を取り上げ、作中における女性たちが直面する性差とその抑圧に注目する。特に女性像について、坂口禪子は引き揚げ後、『熊本日日新聞』や『西日本新聞』にて次々と随筆を寄稿し、その中には性差や社会が求める女性像などの批判を書いたものもある。そのため、女性像を考察する際に、坂口が随筆で展開した性差への批判的な視点が、蕃地という空間を通してどのように表現されているのかにも注目したい。このように、本章では男性像と女性像を通して、坂口の蕃地の表象を再考する。

第1節 「ビッキの話」における男性像—ビッキと野村を中心

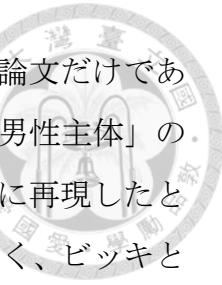
1. ビッキの男性像—男性性の喪失の表象

「ビッキの話」（1953）は原住民青年のビッキの生い立ちを書いた作品である。

「ビッキの話」に関する先行研究は、管見の限りでは簡中昊（2016）「『還元』

⁵ 李文茹（2015）「坂口禪子の台湾蕃地作品における女性像と植民地的ノスタルジアの政治性」『社会文学』第41巻、日本社会文学会、p.99

⁶ 飯田祐子・小平麻衣子編（2023）『ジェンダー×小説ガイドブック—日本近現代文学の読み方』、ひつじ書房、p.5



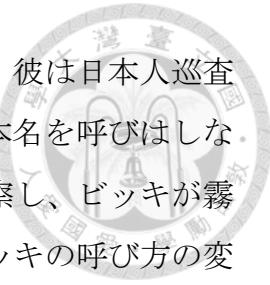
された野蛮人像：坂口禪子の『蕃地』文学に関する一考察」という論文だけである。簡中昊（2016）は、障害者のビッキを霧社事件で「生き残った男性主体」の隠喩だと捉え、坂口は生き残った者を通して、霧社事件を彼女なりに再現したと論じた⁷。この先行研究を踏まえて、本章では霧社事件の再現ではなく、ビッキと支配者の男性像の意味を考察する。作品のあらすじは以下の通りである。

ビッキの本名は「マライバッサ」だったが、6歳に小児麻痺を患い、下半身が不自由になったため、人々からビッキという「四つ這いでとび歩く意味」（p.246）のタイヤル語で呼ばれるようになった。この年に、ビッキの父が霧社事件で亡くなり、ビッキは母のオビンと二人きりで生活し始めた。オビンは息子が自力で生活していくように、竹細工や鑄掛などの技術を教えたが、ビッキが15歳の時に急死した。その後、ビッキは日本人巡査に発見され、パーラン社への移住計画に加わることになり、中原社へ移住した。ビッキは上半身が立派に成長し、顔立ちも美しく整っているが、下半身が萎えているため、同族の男によく嘲笑われた。性欲に苦しむビッキは寡婦のブネと私通したが、実はブネの娘のスミが好きだった。しかし、スミは中原警備隊の野村に好意を持っていました。失意したビッキはバイバラ社へ行ったが、そこで神田巡査の蕃婦問題に巻き込まれ、スミも野村のことで蕃婦問題の被害者になりかねないと思い、再び中原社へ戻った。しかし、ビッキはスミの野村への執着に圧倒され、彼女の頼みを受けて、野村を彼女のところへ連れて行った。

以上整理したように、「ビッキの話」は障害者のビッキを中心に、植民地における原住民社会の人間関係と苦悩を描写する作品である。その中で、日本人警備隊の野村をめぐるスミとの恋愛関係には、植民地における植民者と被植民者の上下関係、また被植民者の内面的葛藤が見られる。では、ビッキと野村の男性像は、どのように植民地における権力構造を表しているか。

まず、ビッキの男性像から考察する。とりわけ、ビッキの名前の変化から、植民地支配の構造が見られると思う。ビッキには元々「マライバッサ」という名前があり、その名は「蕃地の習慣」（p.247）にしたがって命名されたものである。しかし、中原社に移住してから、人々に「ビッキ」という蔑称で呼ばれるようにな

⁷ 簡中昊（2016）「[還元]された野蛮人像：坂口禪子の「蕃地」文学に関する一考察」『天理臺灣學會年報』第25号、天理台湾学会、p.151-154



なり、ビッキは「その日以来、本名を忘れた」（p.268）。また、彼は日本人巡査に「田川一郎」という日本名を与えられたが、「誰も、その日本名を呼びはしなかつた」（p.269）。簡氏はビッキを「名前を失った者」と考察し、ビッキが霧社事件後の「生き残った男性」の隠喩だと捉えた⁸。しかし、ビッキの呼び方の変化には、皇民化による支配関係が見られると思う。本名の「マライバッサ」はビッキの原住民としてのアイデンティティだと考えれば、「田川一郎」への改名は皇民化政策の表現だと捉えよう。だが、実際に彼は身体的な障害によって、人々から「ビッキ」と呼ばれ、さらに日本人巡査にもそう呼ばれていた。つまり、「田川一郎」という皇民化の名は表面的にとどまり、実際の生活においては、身体的な障害に基づく蔑称の「ビッキ」が彼という人を表していたのである。ビッキはこの蔑称を嫌い、いつも「戦慄と憎悪を感じないでおれなかった」（p.269）。その中、野村だけが彼を「田川一郎」と呼んだ。ビッキは自分の日本名が呼ばれたことに当惑しながらも、野村の温かい人間性を感じ取ったのだ。特に、野村が他の人々のように「ビッキ」という蔑称ではなく、「田川一郎」と呼びかけたことは、ビッキの人格を認める態度の表れとして読み取ることができる。つまり、野村はビッキの身体的特徴にとらわれず、ビッキを一人の人間として扱ったため、ビッキを感動させたと考えられる。しかし、皮肉なことに、ビッキは本名の「マライバッサ」ではなく、与えられた日本名を通じて人間として承認されたのである。言い換れば、日本名を通して認められたビッキが、やはり植民地支配の構造に組み込まれていたといえる。原住民としてのアイデンティティを示す本名ではなく、植民者側に基づく日本名によってしか、人間としての承認を得られないということは、ビッキの呼び方を通して植民—被植民の関係性を再現しているといえよう。

また、呼び方だけでなく、ビッキの身体的特徴から被植民者の男性性の喪失が見られる。青年になったビッキは顔立ちも上半身も立派に成長したが、下半身の障害で狩猟ができなかつた。ビッキは頑張って竹細工や鑄掛の仕事をしていたが、「武勇を尚び、狩猟以外の仕事を極度に軽蔑するタイヤル族の中にいて、ビッキは、不具者であることで、決して特別扱いはされなかつた」（p.274）。したがつて、ビッキは狩猟ができないことで、同族との間には「強い一線」（p.274）が引

⁸ 同前注、p.153

かれていた思いがして、自分を「卑しい者」として軽視した。ここでは、まず狩猟が意味する原住民社会の男性性が提示され、次に狩猟ができないビッキの自己否定が書かれている。狩猟が原住民社会における男性性の重要な要素だと考えれば、狩猟ができないことによる自己否定は、すなわち原住民男性としてのアイデンティティの否定につながる。したがって、ビッキは男性性を喪失した者の象徴だと考えられる。なお、朴裕河（2011）は「植民地化という事態が何よりも、植民地の男性たちが女性を養う経済的主体としての位置を失ったことを示します。つまり近代のジェンダー化を支えてきた重要な条件としての男性性を失う事態が起きていたのです」⁹と植民地化を指摘している。朴氏は韓国の植民地化の問題について論じたが、この問題は台湾の蕃地にも当てはまるだろう。鈴木作太郎（1932）によれば、原住民は「狩猟を以って主要な生業となす」¹⁰存在であった。そのため、理蕃政策による狩猟生活の喪失は、彼らから経済的主体としての地位を奪うことを意味していたと考えられる。つまり、狩猟生活の喪失によって、原住民男性が経済的主体でなくなり、それは植民地化による男性性の剥奪を意味しているのである。このように、ビッキの身体的な不具合は、植民地支配によって男性性を奪われた原住民男性の象徴だと考えられる。

2. 野村の男性像—敗戦による立場の転換

次に、「ビッキの話」における植民者と被植民者男性の関係性について考察する。作品では、野村下士官とビッキを対照する場面が多い。例えば、ビッキが初江の自殺現場の目撃者として中原駐在所に呼ばれた場面はその一例である。中原駐在所でビッキは初めて野村と会い、「野村の姿から発散する、若さと生命の燃える響き」（p.308）に圧倒された。ビッキは野村に対して以下のように思った。

ビッキは、自分と殆んど年齢の差はないと思える野村に、同じ年月ながら、その吸収して来たものの余りの差異に呆然とするのだった。いわば、人間が如何なる条件のもとに生きて来たかという、根本的な相違が、本質的には少

⁹ 朴裕河（2011）「植民性とジェンダー」『植民地文化研究—特集植民地主義と女性』、植民地文化学会、不二出版、p.11

¹⁰ 鈴木作太郎（1932）『台湾乃蕃族研究』、南天書局、p.101

しも変らぬ筈の野村とビッキを、このように違わせて終う、運命的な怖ろしさを、ビッキは感じたのだ。 (p.308-309)



上記の引用から、ビッキは自分と野村の差異を思い知らされ、植民者に圧倒されたことがわかる。しかも、その差異は身体能力などの個人差だけでなく、「条件」によって生み出された格差である。ここでの条件は植民地支配の図式から考えれば、植民者か被植民者という条件であろう。「本質的には少しも変らぬ筈」という表現は、両者が人間として本来平等であるはずだという認識を示す一方で、支配関係という条件によって、被植民者が「運命的な恐ろしさ」を痛感させられた。このように、ビッキと野村の対比は、単なる個人間の差異を超えて、植民地支配による構造的抑圧の実態を表しているのである。

一方で、野村は初めてビッキを見た時、ビッキの姿は「人間の醜さの極致」だと思い、「憐れむよりも、咽喉に噴上げる怒りがあった。生きていること、それ自体への燃上る憤怒だった」 (p.308) と感じた。そして、ビッキの取り調べを行なっていることに、野村は以下のように思った。

植物のように生れ、唯生き、そして虚しく死んでいく蕃人の薄倖を哀れだと思った。 (中略) 植物的存在は、たくましい生命だけに支えられ、何の論理も条理もない。然し、あるがままに生き、あるがままに死にいく生活の怖ろしさをも、彼等自身は知らないのだ。自分たち文化人の感傷をはねかえす見事さをも、持っていそうな気がした。 野村は、ビッキの細い足に支えられている成育した半身を見、この姿は、むしろ、自分の内容ではないかと思った。

(p.312)

上記の引用からわかるように、野村には「文化人」としての自負があり、原住民を「植物的存在」として見下していた。この考え方には、まさに植民者が原住民に対する典型的な思考で、被植民者を思考の欠けた存在として捉える植民地主義的な眼差しを示している。しかし、下線部から、野村は原住民の生き方に「自分たち文化人の感傷をはねかえす見事さ」も見出した。つまり、野村は優越感を抱きながらも、原住民の生き方には「文化人」の自分には理解しきれない強さがあ

ると感じたのである。そして、この矛盾した感情が、ビッキの身体的不均衡を通して映し出されたからこそ、野村はビッキの歪な姿を「自分の内容」だと考えたのである。このように、野村の中にある優越意識と、原住民への共感という矛盾の感情が、ビッキの身体的不均衡を通して映し出され、植民者が抱く複雑な感情を表しているだろう。

しかし、野村は日本の敗戦の消息を知った後、植民者としての優越意識が消えて「思考を奪われてしまった」（p.317）ような状態に陥り、「饒舌なり無口になり」（p.317）、その様子は周りの人々を困惑させた。敗戦後、野村とビッキの立場の転換が見られる。ビッキはスミの頼みで野村を探しに行き、「夢遊病者のように立っていた野村」（p.320）を見つけた。ビッキは野村の手を引いてスミのところへ案内するが、ビッキが手を放しても野村は黙ってついて行った。この段落から、元々生き生きとしていた野村が、敗戦後思考を奪われ、あるがままに生きるような「植物的存在」になったように見える。これは皮肉な展開であり、かつて野村が原住民を「植物的存在」として見下していたが、敗戦後自分自身がその状態となったことが窺える。特に注目すべきは、野村が黙ってビッキについていく場面である。かつて植民者として優越的な立場にあった野村が、敗戦後にビッキに導かれる存在となっている。この上下関係の転換は、敗戦によって支配の正当性を失った日本人が、それまでの優越的な立場から一転して方向性を見失ったことを象徴的に表現しているといえよう。野村の個人的变化は、植民地支配の終焉と共に崩壊していく支配者の姿を体現している。

さらに、ビッキは野村をスミのところへ案内する時に、「法悦」と「心の中にあふれてくる訳のわからぬ歓喜」（p.320）を感じた。その時、ビッキは「遠い昔に、彼が生を受ける前に、こんな風なことがあった」（p.320）と思った。そして、今まで不具の生活が夢のように思い、目を覚ませば「自分は五体揃った何者かであって、真に幸福な周囲の中にいるのだ」（p.321）という奇妙な思いにとらわれ、「案内しているのは自分ではなく、案内されている野村の本体が、実は自分なのだ」という倒錯した思い」（p.321）がして、恍惚とした喜びを感じた。簡氏はこの段落について、「ビッキの心情を通して、事件前の原住民の、『不具のない』『健康な状態』」を示唆するだと論じて、ビッキの不具は原住民が受けた「非人道的

な待遇」だと指摘した¹¹。筆者はこの論点に賛同している。ただし、植民地支配の観点から見れば、この文章は被植民者が植民者を導く場面を通して、植民地支配からの解放を経験する瞬間を描いているとも考えられる。特に、ビッキが感じた「法悦」や「歓喜」、または「倒錯した思い」は、植民—被植民の関係性が崩壊したことを示すとともに、解放感の表れでもある。しかし、この「倒錯した思い」は夢のようで、「現実は、四つ這いの自分は野村を自分の小屋へ、スミのもとへ案内していた」(p.321)とビッキの姿が書かれた。この結末には、敗戦によって植民地支配が終了したものの、長年にわたる支配関係がもたらした精神的な傷や関係性は簡単には消えないと読み取れる。坂口は、植民地支配が終わった後も続く植民地主義の残滓を、この場面を通して書き出していると考えられる。

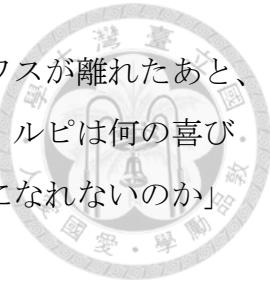
第2節 「蕃地の女—ルピの話」における女性像—ルピとテワスを中心に

「ルピの話」(1956)は坂口が戦後初めて女性を主人公とした小説である。坂口は1955年から女性に関するエッセイを多く発表し、そのなかに日本社会が女性に対するステレオタイプを批判するものが多く見られる。そのため、「ルピの話」をはじめ、女性を主体とする蕃地小説らには、坂口が日本社会の性規範に対する苛立ちが見られると考えられる。しかし、蕃地を通して戦後のジェンダー問題を提示する意味について、まだ考察する余地があると思う。故に、本節では、「ルピの話」における原住民少女のルピナウイ(以下「ルピ」と表記)と「白面の女」テワスを中心に、坂口はいかに蕃地を通して、性差について批判的に書き出しているかを考察する。

1. ルピの女性像—強いられた女性の性役割

ルピは最初に入れ墨を嫌がる少女だったが、母のタスの命令に逆らえず、入れ墨を強いられてしまい、「妻になる資格」を持つ人となった。さらに、母の手配によって、13歳のルピは35歳のタッコンと許婚者になった。ルピはまだ幼かつたため、テワスが介添役として毎晩彼らに付き添っていた。ある夜、ルピはふと目を覚まし、タッコンとテワスの情交場面を目の当たりにした。テワスの役割が自分の「女体への開眼」と性欲をかき立てるためだと知り、ルピは悲しみに暮れ、

¹¹ 同注7前掲論文、p.154



初潮を迎えた際にもう一度涙を流した。ルピは役割を終えたテワスが離れたあと、タッコンと正式に夫婦になったが、タッコンと枕を交わしても、ルピは何の喜びも感じていなかった。彼女は「何故、自分だけがそのことに夢中になれないのか」(p.115)と疑問を抱え、「人並みでない」ことを悲しんだ。

一方、ルピと正式に夫婦になった後も、タッコンは何度もテワスを誘い、その行為がひどくルピを傷付けた。そのため、ルピはタッコンに怨恨と憤怒を抱えながら、度々家出した。このことを知った母は、ルピがタッコンを引き止められないのは恥ずかしいことだと非難した。ルピは自分が本当に女なのかと疑い始め、「入れ墨をしただけでは、女になれるはしない」(p.117)と絶望的に思い、自殺してしまった。

以上整理したように、ルピは「妻」という女性に期待される性役割を強いられているが、母親による入れ墨の強制、強いられた婚姻関係、性的快感の欠如からの挫折などに違和感と苦痛を感じている。では、これらの描写を通して、ルピの女性像はどのように女性の性役割に対する批判を表しているか。

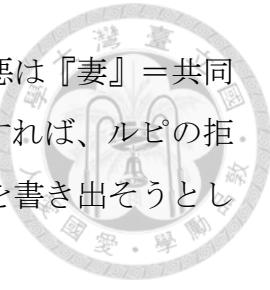
まず、入れ墨に対するルピの拒否から、ルピが女性の性役割に対する抵抗が示されている。ルピは最初に入れ墨に対して以下のように語った。

ルピは、母親の入墨をはじめ、蕃社の女達のそれを、あまりに美しいとは思っていなかった。むしろ、入墨のない白いなめらかな皮膚の方が、ルピには美しいような気がした。(中略)。妻になるための一つの資格として、入墨をするのであるならば、ルピは拒めるだけ拒んでみたいと思った。

(p.109)

この段落では、入れ墨が「妻になるための資格」として書かれている。しかし、鈴木作太郎(1932)によれば、実際に入れ墨は原住民の通過儀礼で「身体の美観」「男女が成人となり適婚期に達したこと」「種族部落の標章として自他の区別」の三つ意味があるという¹²。したがって、坂口は入れ墨の持つ多層的な意味を、あえて「妻になる資格」として単純化させることで、女性の性役割に対する批判的な視点を提示しようとする意図が見られる。楠井清文(2014)もこの段落につ

¹² 同注10 前掲書、p.33



いて、「『入墨』は共同体の性規範を象徴しており、ルピの嫌悪は『妻』＝共同体の性役割を受け容れることの拒否」だと述べている¹³。換言すれば、ルピの拒否を通して、坂口は女性が強いられる社会的役割に対する抵抗を書き出そうとしている。

また、「ルピの話」の執筆時に、主婦の生き方をめぐる「主婦論争」が起こり、大口勇次郎（2014）はこの論争について「女性がみんな主婦になった時代、妻になり母になることが女性の幸せだと信じられていた時代」¹⁴と述べた。この論点を踏まえれば、当時の女性は「主婦」という役割に縛られ、社会的に「妻」「母」としての性役割を求められたことが窺える。同時に、坂口禪子（1956）は妻になることが一般とされたイデオロギーについて、それは男の「狡猾の暗示にからって、男達の都合のよい『女らしさ』を身につけるように努力してきた」結果だと主張し、「女は、『女らしく』という美しい虚名をかぶせられて、『あきらめ』と『忍従』を押しつけられる傾向がある」¹⁵と語っている。すなわち、坂口は男性によって構築された「女らしさ」に対して批判している。小説の内容に戻れば、ルピが入れ墨を拒否すること、すなわち「妻になる」ことを拒否することで、社会に期待される「女らしさ」から逸脱しようとする存在として書かれていることがわかる。

しかし、母タスの手配により、ルピは伝統的な「女らしさ」の規範に縛られ、好きでもない男性と結婚させられる結果になった。ルピは妻になってから、「貞淑な妻」の役割を全うしようとした。たとえタッコンのことが好きではなくても、ルピは「タッコンを夫だと決めてから、他の男達が、少しも異性として感じられなくなった」（p.116）。彼女は「タッコンによって満たされる」思いがしたが、タッコンがしきりにテワスを誘うことに激しい反発を持っていた。光石亜由美（2023）によれば、家父長制のもとでは、「女性には貞淑な妻としての役割」が求められ、「夫以外の男性に恋愛感情を持つこと」など、それ以外の性愛の形が禁じられていたという¹⁶。この論点を踏まえると、ルピがタッコンと結婚以来、

¹³ 同注4前掲論文、p.164

¹⁴ 大口勇次郎（2014）「総力戦とジェンダー」大口勇次郎、成田龍一、服藤早苗（編）『ジェンダー史』、山川出版社、p.404

¹⁵ 坂口禪子（1956年4月27日）「スタンド 女らしさ」『熊本日日新聞』、朝刊6面

¹⁶ 光石亜由美（2023）「セクシュアリティ」、同注5前掲書、p.96



他の異性に衝動を感じられなかつたのは、坂口が意図的にルピを「貞淑な妻」として造形したのだろう。

そして、ルピが夫を引き止められなかつた時、タスがルピを叱り、彼女に「一人前の女ご」としての役割を果たすことを求めた。タスにとって「一人前の女ご」というのは、男性を満足させる存在であるため、ルピをそのような女性に育てようとした。ここから、タスは家父長制社会における女性の従属的な立場を内面化し、それを娘のルピに強要する存在として描いていることが窺える。換言すれば、タスは上野千鶴子（2013）が論じる「家父長制の代理人としての母」¹⁷の典型として、ルピに伝統的な性役割を果たせようとした。このような母と娘の関係について、上野氏は「母が家父長制の代理人としてふるまいづける限りは、娘と母の関係は調和的なものではありえない」¹⁸と指摘している。そして、この不調和な母娘関係が、ルピの自殺につながつた。タスがルピを強迫したことについて、小説では「母親が無謀にも、稚いルピの女体をひらくのに、あまりに性急であり粗暴でありすぎたのを、母親自身は何にも知らない」（p.119）と書いている。すなわち、タスは娘に「一人前の女ご」になる事を望んだあげく、無自覚に娘を追い込んだ。このような母親の行動について、斎藤環（2008）は母が無自覚に娘を支配し、娘もまた母の支配に悩まされるという支配—被支配の図式が見られ、娘は「反抗」や「出立」するが、支配関係を反転させることは不可能だと論じた¹⁹。この論点を踏まえ、ルピが自殺したのは、母に支配された関係を断ち切るためだったと考えられる。なお、ルピが自殺後、タスは娘の死顔を見て、入れ墨がまるで「まだ自分達だけは生命あるもののように、ルピの肌に浮上って」おり、「少しずつ蠢動するように見えた」（p.119）と感じた。入れ墨が「妻になる資格」、すなわち社会に期待される女性の性役割の象徴だと考えれば、死後も生き続けている入れ墨の描写は、女性に刻まれた社会規範の強制を象徴的に示しているだろう。このように、ルピは封建的な母親に支配され、母親が選んだ男と結婚させ、さらに死後も入れ墨だけが「生命あるもの」として残るという結末を迎えることで、ルピが永遠に伝統的な家父長制から逃れられないことを示しているだろう。

¹⁷ 上野千鶴子（2013）『女ぎらい—ニッポンのミソジニー』、紀伊國屋書店、p.157

¹⁸ 同前注、p.172

¹⁹ 斎藤環（2008）『母は娘の人生を支配する—なぜ「母殺し」は難しいのか』、日本放送出版協会、p.151-153

ところで、逃げ場のないルピは自殺する前に、実家を見回って以下のように語った。



私はここから去るのではなかった、と思った。それは、タッコンの妻になるのではなかった、という悔いであり、女になれないのに女になろうとした自分の過誤への嘆きでもあった。 (p.118)

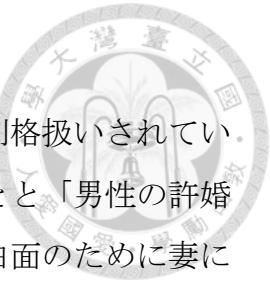
引用文から、ルピは女性の性役割を全うできない自分を責めていることがわかる。特に「女になれないのに女になろうとした自分の過誤」という言葉には、上野氏が指摘する女性にとっての「ミソジニー」、すなわち女性が自分に対する自己嫌悪が表れている²⁰。このミソジニーは「女に生まれてソンした」²¹と思うような、女性が家父長制社会に構築された理想の女性像と自己との乖離に苦しみ、自分の存在を否定する葛藤だと考えられる。坂口自身も「女が、女らしくないと言われることは、女にとって致命的な意味を持つようだ」²²と述べており、こうした認識はルピに反映されている。このように、社会、特に母から押し付けられた「女らしさ」に従おうとしながらも、それが自分の内面とは一致しないことに苦しみ、「女になろうとした」ことに後悔して自殺したルピの姿には、家父長制社会における性役割の強制と、それがもたらす抑圧が描かれている。

以上から、ルピの女性像は家父長制社会において強いられる女性の性役割に対する批判を体現していると言える。また、ルピの人生は「女性」という社会的カテゴリーに組み込まれたことへの苦悩として描かれている。では、入れ墨をしていない「白面の女」—テワスはどのように女性の性役割と向き合うのか。次の段落では、ルピの対照であるテワスの女性像を考察する。

²⁰ 上野千鶴子（2013）によれば、ミソジニーとは「女性嫌悪」と訳され、「ミソジニーは男女にとって非対称に働く。男にとっては『女性蔑視』、女にとっては『自己嫌悪』」である。（同注16前掲書、p.8）

²¹ 同前注、p.8

²² 同注15前掲資料



2. テワスの女性像—生き延びた女性

テワスは入れ墨を拒否したため、家族から絶縁され、蕃社に別格扱いされていた。彼女は介添役として、「母親の代わりに性教育を行う」とことと「男性の許婚者を繋ぎ止める」という役割を持っていた。これは、テワスが白面のために妻になる資格がなく、介添役にしても婚姻制度を乱すことはなかったからである。そのために、テワスは度々介添役の役割を行い、男たちが「かなり未練を残り」ながらも、テワスが白面で妻になれないため、「入墨した許婚者との結婚生活へ落ち着いていく」ことになる。しかし、テワスの行為に対して、蕃社の女性たちは悪口や悪評を広めた(p.113)。ここから、テワスの存在がもつ二面性が見られる。彼女は入れ墨を拒否したことで、「妻」という社会的性役割から逸脱しながら、男性の快楽の対象となった一方、婚姻制度を維持させる不可欠な要素ともなった。光石氏によれば、男性の欲望によって、女性は性的快楽の対象という「娼婦的存在」と「妻・母としての存在」という二つの役割に分けられる²³。また、大口氏によると、社会構造の矛盾によって生み出された娼婦的存在が、妻や母の役割という社会規範から逸脱した存在になり、「家」や「家族」制度の外部に位置付けられ、社会から蔑視される存在となった²⁴。これらの論点に添えれば、「妻」という女性性役割から離れ、男性の性的快楽の対象になり、さらに蕃社から疎遠されるテワスは、娼婦的存在として描かれていることが窺える。

その後、ルピはある夜、タッコンとテワスの情交場面を目の当たりにしたが、テワスの小さなため息を通して、ルピは「テワスをふくめた女というものの、かなしさや嘆き、そしてまた歓びさえ」(p.114)に何となく同情の意を寄せた。ルピはテワスがなぜ入れ墨をしないのか、なぜ介添役を担って「男達を誰一人も拒まないのか」と思い、「強いてたくさんの男達に体を任しているようなテワスが、本当は、どの男にも魂を売っていないのかもしれない」(p.114)と考えた。この描写から、ルピはテワスを通して、男性によって身体を管理された女性の無力さを感じている。しかし同時に、テワスが「魂を売っていない」という認識は、テワスが表面的に男性に従属させられながらも、精神的な自由を保てていることを示しているだろう。このような性と精神の分離について、上野千鶴子(2006)は

²³ 同注16 前掲書、p.94-95

²⁴ 同注14 前掲書、p.305



性の自由を論じる際に、「性の愛からの自由」「性の社会からの自由」（傍点原文）という概念を示し、全ての女性は、好きではない相手とでも性行為ができるという娼婦性を持っていると論じた²⁵。この論点からテワスの女性像を考えると、テワスは「妻」という社会的性役割から逸脱しながらも、女性が持つ娼婦性を表し、「性の自由」を体現しているといえよう。では、テワスが白面のままでいる理由は何だろう。

テワスがルピの死を弔う際に、自分が白面のままでいる理由を以下のように語った。

オレ、な。下田さんに、入墨すんなや、と言われたんだで。（中略）オレ、下田さんと寝たでや。何度も、誰も知らんかったな。（中略）下田さん、な、オレに入墨せんと待ってれ、嫁にすると言うだぞな。したが、平地勤務に切り替わると、内地人の嫁さんもらって、山にはそれっきり来ンかったでや。オレ、それでも待つとったで。入墨せんとな。下田さんがむかえにきてくれたら、皆にわかるこったで、オレ、恥ずかしいと思わんかったでや。（中略）オレ、下田さんが嘘ついたこと、気イついたでや。（p.119）

以上の引用によれば、テワスが「白面の女」として蕃社に疎外されたのは、「内地人男性」の働きによるものがわかる。テワスが蕃社の性役割から逸脱する理由について、楠井清文（2014）はそれが「『内地人巡査』という植民地権力の末端によって、従来の性規範が攪乱された結果」であり、テワスが「『内地人男性』の一方的な欲望充足に利用された」と論じている²⁶。確かに、テワスが白面のままで蕃社から疎外されるのは、内地人男性の下田による支配構造が窺える。しかし下線部により、テワスは白面でいることを恥ずかしいと思っていないことがわかる。たとえテワスの「性の自由」は、実際には植民地支配によるもので、さらに男性の支配によるものだったとしても、彼女はその立場を受け入れた。また、テワスは以下のように自分の生き方を見出していった。

²⁵ 上野千鶴子（2006）『女という快楽』、勁草書房、p.27-29

²⁶ 同注4前掲論文、p.165



オレ、それで、それからは、男に嘘をついたぞな。嬉しくもないのに嬉しそうにノド鳴らし、鼻いき荒くしてみせて、男をオレのところにひきつけたぞな。そのうち、オレの嘘、嘘でなくなつたでや。オレ、女ごになつたでや。ルピも、早くあきらめんと、生きとればえかつたじや。ルピは、馬鹿じや。

(p.119)

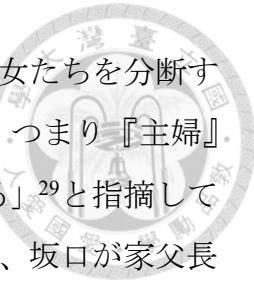
以上のテワスの言葉から、彼女は男性に嘘をつくことで、男性が求める「性の対象」となるうちに、段々と性の快楽と自分の生き道を見出したことが窺える。最初は嘘として演じていた性役割を次第に内面化し、「男をオレのところにひきつけた」という言葉に示されるように、テワスが限られた社会の枠組みの中で可能な限りの性的自主を表しているのだろう。このことから、テワスはただ男性の支配に従属したのではなく、家父長制によって制限された性役割の中で、自らの性的自主を追求し、それを通じて自分なりの生き方を見出したと言える。

3. 分断された女性—ルピとテワスを通して

以上の考察から、ルピは「妻」という社会的性役割を強いられる存在として描写されていることがわかった。彼女は母タスによって入れ墨を強制され、妻にならざるを得なかった。一方で、テワスは入れ墨を拒否することで、「妻」という社会的性役割から逸脱し、「娼婦」的存在として描かれている。この二人の女性像を通して、ルピとテワスは男性主導の社会によって、「妻」と「娼婦」、あるいは「結婚相手」と「遊び相手」のように分断されることが窺える。このような分断支配について、上野氏は「『分割して統治せよ』(divide and rule)。それが、支配の鉄則だ」と述べ、「分断しておいて、互いに対立させる」ことで、男性は分断支配をするとできると論じた²⁷。さらに、上野氏は「聖女」と「娼婦」を例として、「生殖からの疎外も生殖への疎外も——裏返して言えば快楽への疎外も快楽からの疎外も（どちらも男の快楽だが）——女にとつては抑圧だ」²⁸と論じ、「『聖女』も『娼婦』も女性の抑圧のふたつの形態」であると指摘した。ま

²⁷ 同注17 前掲書、p.44

²⁸ 同前注、p.47



た、千田有紀（2003）も戦後のウーマン・リブ史の資料から、「女たちを分断するものは、女を『体制の内にいる女』と『体制の外にいる女』、つまり『主婦』と『娼婦』、『妻』と『妾』に分断していくような社会制度である」²⁹と指摘している。小説の内容に戻れば、ルピとテワスの対立的な位置づけは、坂口が家父長制社会における女性の「分断支配」の構造を意図的に表現しようとしたものであると考えられる。

また、坂口は蕃地独自の風習である「入れ墨」の表象を用いて、「妻になるための資格」という意味に収束させることで、蕃地特有の記号を通じて性差の問題を浮き彫りにしようとする意図が見られる。テワスが日本人の男性によって、自身の運命を変えられたことから、植民地主義における宗主国を〈男〉、植民地を〈女〉とするジェンダー化された支配構造が見られる³⁰。つまり、坂口は植民者男性と被植民者女性の図式を通して、男女における不均衡の権力関係を強調している。一方、テワスの能動的な女性像を通して、女性が家父長制社会において、限られた選択肢の中でも自らの主体性を追求し得ることを示唆している。このように、蕃地はジェンダーと権力の不均衡を際立たせる舞台となっており、坂口が蕃地を通じて性差の問題を浮き彫りにしようとした可能性があると考えられる。

第3節 「蕃地のイヴ」における女性像—ルピとハバオを中心に

1. ルピ・ナガイ³¹の女性像—産む性への抵抗

「蕃地のイヴ」（1961）は単行本『蕃婦ロポウの話』に収録されている作品であり、この作品においても母娘関係の問題が見られるため、前節に続いて考察したいと思う。「蕃地のイヴ」はタイヤル族のタロワン社を舞台に、原住民少女のハバオを中心とした物語である。

ハバオは7歳の時に太い「ヘソ」を持つことで、蕃社の人々から注目されていたため、彼女は母親のルピ・ナガイにヘソの役目について尋ねた。ルピ・ナガイはその問い合わせによって、「誰も、夫でさえも、彼女の出産には手をかすことのならぬ厳とした生理に、茫然と呆れ、（中略）ヘソが虫のように長く血を流していた

²⁹千田有紀（2003）「帝国主義とジェンダー——『資料 日本ウーマン・リブ史』を読む」、加納実紀代（編）『リブという革命—近代の闇をひらく』、インパクト出版会、p.63

³⁰ 飯田裕子（2016）『彼女たちの文学—語りにくさと読まれること—』、名古屋大学出版会、p.2

³¹ 筆者注：前節と混淆しないように、本節では「ルピ・ナガイ」と表記する。



のだ」(p.86)と出産のことを思い出した。このような経験があったため、ルピ・ナガイはハバオに「ミニ(筆者注: 蕃社の巫女)のごと、ヘソのない女ごになるんじや」(p.86)と言い聞かせた。また、ルピ・ナガイにとって、ハバオを巫女にするのは「出産の苦痛をへた母親の、娘へもっている最高の母性愛であり権利」(p.104)である。つまり、ルピ・ナガイは自身が体験した出産の苦痛から娘を守るために、ハバオを出産することのない巫女にしようと決意した。しかし、ハバオの父や祖父、または蕃社の人たちはルピ・ナガイのやり方に賛同できなかつた。

まず、小説の冒頭にある「ヘソ」の意味を考察する。ルピ・ナガイは「ヘソ」によって出産のことを思い出し、巫女のミニには「ヘソのない女」という特徴があることから、「ヘソ」は出産、または「産む性」の象徴として扱われていることがわかる。つまり、ルピ・ナガイは娘を「産む性」から解放させたいのである。しかし、蕃社の人々はそれを否定していた。水田宗子(1982)は産む性について、「産む性としての女性の性は、社会的日常生活の中でも明確に意味づけされ、賞讃され、保護されると同時に、女性を束縛してきた」³²と指摘している。水田氏の指摘に従えば、蕃社が「産む性」を賞賛し、子を残すことを讃えると同時に、ルピ・ナガイはこのような「産む性」が意味づけられた社会に束縛されたと捉えられる。ハバオを巫女にするルピ・ナガイの意図は、産む性としての女性の社会性役割から娘を解放しようとして、「産む、そして母になる意識」³³を否定したと言える。

また、小説の中では、ルピ・ナガイの出産の苦痛が赤裸々に描写されている。ルピ・ナガイは難産で苦しんだ時に、助けに来なかつた夫のタッコンに失望した。彼女は「たのしみを伴にした筈の夫が、この苦しみをわかつたない不自然、理不尽さ」(p.86)に怒りを感じ、血の中で倒れながら夫を呪つた。ルピ・ナガイはタッコンが「出産のおそろしさと辛さ」を「万分の一もわけもたなかつた」(p.105)と思い、自分が必死に叫んでも、夫が駆けつけて来なかつたことに恨みを持つた。出産後、ルピ・ナガイは蕃社のしきたりに沿つて、オットオフ(神)が赤子のた

³² 水田宗子(1982)「第6章 産む性と文学」『ヒロインからヒーローへ—女性の自我の表現』、田畠書店、p.185

³³ 同前注、p.185



めに薬を投じた小川で清めた。実際のタイヤル族の出産について、鈴木作太郎（1932）は以下のように述べている。

出産の際には妊婦自ら臍緒を切り、汚物を清めたり、産児を洗ったり等するが、時には夫の手を借りることもある。産児を川で洗うのは古来神が川に薬を投じているという迷信からで、一面には健康体のものを養育する自然の必要に応じた手段であろう。³⁴

下線部と小説の内容を照らし合わせてみると、まず「神が川に薬を投じている」という産後の清めの儀式は、小説にも描かれており、鈴木氏の記述とは一致している。しかし、鈴木氏の「時には夫の手を借りる」という出産の状況は、ルビ・ナガイの体験とは異なっている。小説では、彼女は完全に孤立した状態で出産を経験し、夫の援助も得られなかつたことが描かれている。つまり、坂口はタイヤル族の伝統的な出産の一部を忠実に描写しながらも、ルビ・ナガイの孤独な出産体験を通じて、出産の場における女性の孤独感と、男性が出産に対する無頓着への苛立ちを書き出している。言い換えれば、夫の不在を通して、出産が女性一人の負担として書かれることで、性役割の不均衡が浮き彫りにされているといえよう。

さらに、出産は「直接、生に関わり、死に関わり、そして未来と過去、老いと生誕を結ぶ生の円環の中心的な出来事」³⁵であるが、ルビ・ナガイの出産場面にはとりわけ「死の恐怖」が強調され、生誕の喜びや子が生まれる幸福感が書かれていらない。つまり、坂口は出産時の痛みや恐怖、そして死と隣り合わせという現実的な側面を強調することで、出産を美化や理想化から解放し、女性の身体的経験としての真実を書き出している。このような出産をリアルに捉えた書き方について、水田氏は「ヒューマニズムに横どりされて砂糖漬けになった母性、男によって豊穣なる大地として神話化されてしまった産む性への、破壊的な挑戦である」³⁶と述べている。このように、坂口は出産における暴力性や恐怖を赤裸々に描く

³⁴ 同注 10 前掲書、p.19

³⁵ 同注 32 前掲書、p.157

³⁶ 同前注、p.186

ことで、母親になることは崇高い経験として捉えるのではなく、生と死の境界に立つ極めて危険で現実的な出来事であることを示している。

以上のように、ルピ・ナガイは出産の苦痛を経験したため、娘のハバオを経験させないと決意した。しかし、その思いの裏には彼女自身が語った「母性愛」からでなく、ルピ・ナガイ自身も気づいていない「怒り」という理由がある。

ルピの心中にある、ハバオへの母性のかなしみが、ハバオが女であることへの、深いおそれと悲哀であることも、ルピは気づいていない。彼女と等しい
さだめを歩まねばならぬ娘への、母の怒りを、ルピは、胸底にふかくたたみ
こみ、ハバオから、女であること、女として生きるすべてを掠奪しようとした。 (p.108-109)

引用から見ると、ルピ・ナガイはハバオを産む性から解放させたいのは、母性愛からだけでなく、子供が女性であることに対する怒りから、ハバオの「女として生きるすべて」を奪おうとする気持ちである。上野千鶴子（2006）は、日本社会において女であることは母であることに等しく、母でない女は女として見なされないと指摘している³⁷。この論点を踏まえると、ルピ・ナガイがハバオから産む性を奪おうとする行為は、「女=母」という社会的な枠組みへの抵抗だと解釈できる。しかし一方で、ルピ・ナガイ自身もまたこの社会規範に縛られていると考えられる。なぜなら、彼女は「女性であること」=「母親になること」という認識に基づいて、娘から「母親になること」を奪おうとしたが、「女性であること」=「母親になること」と考えた時点で、既に「女=母」という社会的枠組みに深く囚われていると言えよう。要するに、ルピ・ナガイは自身が内面化している「女性=母親」という価値観から、完全に逸脱していないことが露呈している。

一方で、ルピ・ナガイがハバオに対して持つ感情は完全な「母性愛」ではなく、女性としての自己嫌悪も含めていると考えられる。母親の意識について、水田氏は「子を持つことへの幸福と、そこに真摯に身をまかす意識上の自己と、他者としての胎児への恐怖、そして、その威嚇への怨念を内に秘める意識下の自己の分裂、対立のドラマ」が存在すると論じている。つまり、母性は意識上の愛情や幸

³⁷ 同注25 前掲書、p.104-105

幸福感と、意識下の恐怖や怨念という対立する感情が織りなす複雑なドラマとして形成されている。ルピ・ナガイは母親として、表面的には娘への愛情から「母性愛」を語りながら、意識下では女性であることへの怒りや恐怖を抱えている。その結果、娘を産む性から解放させようとする行為には、母性愛と怨念という相反する感情が絡み合っているのである。

2. ハバオの女性像—娘の選択

一方で、ハバオは母親の言う通りに巫女になろうとしたが、16歳に日本人男性との出会いによって、はじめて巫女になることに躊躇いを感じた。作品において、巫女になることは、オットオフ（神様）の嫁になることを意味しているため、他の男性との関係が禁じられる。また、ルピ・ナガイは「ハバオの顔に、人間の細工をほどこして汚してはならぬ」（p.108）と思いこみ、ハバオが白面のままで16歳になった。その結果、蕃社の人々はハバオを惜しみ、ハバオが遠い存在として見られるようになった。ここでも、第2節で論じた「ルピの話」のように、坂口は入れ墨の有無を通じて、白面の女性が蕃社の女性性役割から逸脱していく様子を書いている。

そして、16歳になったハバオの時代には蕃地の風習が改められ、入れ墨が禁止されるなど伝統的な習俗が変容を迫られていた。ダム工事という近代化の建設が始まり、蕃地が変貌していった中で、ハバオはダム工事の技術屋である青山と出会い、青山のことが気になり始めた。それから、巫女になる儀式を準備する際に、ハバオは初めて母親が自分を巫女にするのは、「産む性」から解放させるためだと気づいたが、母を憎むことはできなかった。ハバオはルピ・ナガイについて、以下のように語っている。

ルピは、あわれな女であり、女の生理の厚い黒い層に、打克ったひとかもしれなかつた。それに、うちかつ女だけが、その先の幸せをつかみうるのかもしけず、二人三人の子供を平氣でうみつづける女の方が、本当は、敗北者なのかもしれないのだ。 （p.119）

以上の引用から、ハバオにとって、ルピ・ナガイは女性の生理に打ち勝った人である。ここで「女性の生理」は、ルピ・ナガイの出産経験と一緒に考えれば、女性が持つ「産む性」だと考えられる。つまり、ハバオはルピ・ナガイが自分の「子を産み、母となる」という女性の運命から守ろうとしたことを、深く理解していたため、母を「憎むことができなかった」のである。特に注目すべきは、「二人三人の子供を平気でうみつづける女の方が、本当は、敗北者なのかもしれない」というハバオの認識である。これは単に子供を産むことへの否定ではなく、社会的に期待される「産む性」の役割を従順に受け入れることへの批判として解釈できよう。上野千鶴子の指摘する「女=母」という社会的枠組みに対して、ハバオはルピの行動を通じて、その枠組みへの抵抗の可能性を見出しているのである。

しかし、ハバオの思いは青山をきっかけに変わった。彼女は女の幸せについて考えるうちに、やはり母の言う通りに「巫女になるのがええのだ」(p.120)と思ったが、不意に青山の姿を思い出して、「突然、はげしい羞恥におそわれて、みるまに、全身、赤く染まった」(p.120)。最後に儀式の最中に、青山とある老人の乱入によって儀式が失敗し、ハバオは巫女になれなかつた。祖父はそんなハバオに「おぬしは女ごになるのじゃぞ、子を産め」(p.139)と言い、父もハバオにルピ・ナガイに伝えに行くように命じた。ハバオはその時、呪縛からぬけたような思いがして、母親に自分の「産む性」を否定できないことを伝えた。そして、ルピ・ナガイも自分のしたことを「あやまち」だと思い、物語は彼女の泣き声で幕を閉じた。ここから、ハバオは植民者男性によって、男性主導の社会から脱却することができず、女性に課せられた性役割に回帰せざるを得なかつたことが暗示されている。しかし、ハバオはこのことに対して「呪縛からぬけた」(p.140)と感じたことが重要である。つまり、ハバオは男性支配の働きによって、「産む性」という女性の性役割から抜け出ることができなかつたが、母親の呪縛から解放されたことで、自己価値を獲得していったと言えよう。

なお、ハバオが青山をきっかけに自分の思いを変えたことは、「ルピの話」におけるテワスが下田をきっかけに「妻」という社会的性役割から逸脱したことと、同様なパターンを示している。両者とも植民者男性との関係を通じて、伝統的な女性の役割からの「逸脱」と「回帰」を経験している。テワスの場合は下田巡査との関係により入れ墨を拒否し、伝統的な「妻」の役割から外れることになった

一方、ハバオは青山との出会いをきっかけに、最終的には女性としての性役割に回帰することになった。飯田裕子（2016）は植民地主義において、宗主国が男性に、植民地が女性に比喩することで、「宗主国が植民地を保護し管理する力学が自然化されようとしてきた」³⁸と指摘している。つまり、坂口は宗主国の男性の登場を通して、被植民者の女性が宗主国〈男〉の支配構造に組み込まれることを表現しているだろう。しかし、ハバオもテワスも、与えられた女性の性役割を受け入れたことで、自己の主体性を見出し、あるいは見出そうとしている。したがって、坂口は「蕃地のイヴ」ではハバオを通して、女性が男性の支配から脱却することの困難さを表している一方、女性が家父長制社会の中でも、自己の内面において主体性を獲得する可能性を示唆していると考えられる。

第4節 「蕃婦ロポウの話」における女性と性欲—ハツエを中心に

1. ハツエにおける性欲—未亡人の思い

最後に、「蕃婦ロポウの話」（1960）を考察する。この小説は「ルピの話」と「蕃地のイヴ」と異なり、母娘関係の描写がなく、日本人と原住民の男女関係を取り扱う作品である。まず、小説の内容を説明する。「蕃婦ロポウの話」は、日本人女性の「私」が知り合いの原住民女性—ハツエから聞いた物語である。ロポウはマヘボ社の女性で、13歳で20歳の青年ノーカンと結婚し、一人の息子を産んだ。結婚して7年後、霧社事件が決行され、ノーカンは事件に参加するために、ロポウと別れを告げた。霧社事件の時、ロポウはノーカンを安心させるために、自分の喜びは夫と共に、ただ子供のために生きると約束した。その後、ロポウとハツエは「第二次霧社事件」からも生き残り、霧社分室に収容蕃として保護された。しかし、その時に、ロポウは日本人巡査の片山三郎と男女関係を結んだ。これはノーカンとの約束に反する行為であったため、ロポウは自分を罰するかのように、食事を極度に制限した。その後、川中島社への移住が決定され、ロポウは片山と共に橋から落ちたが、当時のハツエは片山の叫び声しか聞こえなかった。橋の上に残されたロポウの子供が、ハツエはなぜか憎く見えた。

吳佩珍（2022）は「蕃婦ロポウの話」について、ロポウの話が女性たちに語られたことから、「この物語は女性たちの連帯によって成り立ったものである。同

³⁸ 同注30 前掲書、p.2



時に、女性のジェンダー的視点の介入によって、女性の視点から描かれた霧社事件の作品が生み出された」³⁹と「蕃婦ロポウの話」における語りの主体が、従来の男性中心的な歴史記述と異なる価値を持つことを指摘している。つまり、「蕃婦ロポウの話」は女性たちによって語ったからこそ、歴史的価値を持っているだろう。そのため、作中における女性たちが、どのようにロポウの話を受け止めたのは重要なポイントであろう。

まず、ロポウの話はハツエを介して話され、「私」によって書き留めた物語である。楠井清文（2014）はこの手法について、ハツエが聞き手の「私」に話題に没入するように努力すべきだと求め、「私」も断片的なロポウの物語を想像で補ったことから、この物語は「ハツエと『私』との合作という性質を持つ」⁴⁰と述べた。小辻菜々子（2016）はこの論点を踏まえ、植民者の「私」が被植民者の声を再現しようとするが、中には「私」の個人の主観や問題意識も混じっているため、ロポウの話には戦後日本人女性の問題を反映していると論じた⁴¹。また、「私」の語りを通して、ハツエの大胆な性欲描写と禁欲的なロポウの悲劇は、戦後未亡人の性欲問題の普遍性を指摘していると論じた⁴²。筆者はこれらの論点に賛同しているが、この合作において「私」だけでなく、もう一人の語り手であるハツエの意識も反映されていると考えられる。では、ハツエはロポウの行動に対してどう思ったか。

李文茹（2006）は、ハツエがロポウと片山の男女関係を「性欲という側面から解釈」⁴³することで、日本人男性による性暴力問題が曖昧化されてしまうと指摘した。しかし、ハツエが赤裸々に語った性欲こそ、彼女の意識の反映だと考えられる。ハツエは霧社事件の時に、一人目の夫を亡くした。彼女は冗談めかして「あの時女ごのすべてをもやしてしもうたで」（p.339）と言ったが、大嘘だとすぐ否定した。また、ハツエは霧社事件後川中島へ移住してから、中原へ嫁入することが決まったが、二人目の夫が高砂族義勇隊で出征してしまった。

³⁹ 吳佩珍（2022）「坂口禪子的『台灣書寫』『福爾摩沙與扶桑花的邂逅—日治時期台日文學與戲劇流變』、臺大出版中心、p.219

⁴⁰ 同注4前掲論文、p.166

⁴¹ 小辻菜々子（2016）「坂口禪子的霧社事件三部曲—〈霧社〉、〈達道・莫那之死〉、〈蕃婦羅波烏的故事〉」（國立政治大學修士論文）、p.67

⁴² 同前注、p.71

⁴³ 同注2前掲論文、p.106-107

彼女は「オレが嫁にきた婿どのは、はよオに出征してしもうたが、オレが働くと、ババもジジも飲みも食いもでけんのじや」(p.349)と夫の両親の世話をしていることを言い、戦争が済んだ今にもう一度夫に抱かれたいと告白した。しまいに、ハツエは「もう一度でええ、女ごの夢をむすんでみとうての才」と言った。そして、ハツエはロポウの禁欲的な行動が性欲を抑えるための難行苦行だと解釈し、ロポウが片山に抱かれて「よい夢をみればみるほど」(p.356)、ロポウが辛くてならないと思った。以上の文脈から、ハツエは自分自身の性欲に基づいて、ロポウの心情を理解しようとしていたことが窺える。したがって、ロポウの物語の中で語られる「性欲」という要素は、実はハツエ自身の意識が投影されたものだと考えられる。

また、ハツエは2度の戦争で夫を亡くし、特に二人目の夫が高砂族義勇隊の出征で帰ってこなかつたことから考えれば、彼女を「戦争未亡人」⁴⁴として見ることができるだろう。そんなハツエが、ロポウに残された子供を見て「何ともかとも憎うて憎うてならんかった」(p.362)と思った。このことについて、小辻氏はハツエが子供を憎むのは「未亡人が『女性』としての主体性を追求することを許さず、『母親』としての役割だけを強制するような社会的規範」⁴⁵への苛立ちだと解釈した。呉氏もロポウの未亡人の描写を通して、坂口が霧社事件や植民地政策への反省を通して台湾を描くことで、戦後日本社会における戦争未亡人に対する抑圧という問題を浮き彫りにしていると論じた⁴⁶。筆者はこれらの論点に賛同している。実際に、坂口は働く未亡人に対して、「一日一日が子供の為にだけ存在する。自分の為に何かを考えるということはない」と考え、「女が、女でありたいと希うのは、自然だからだ、そうした見栄はお捨てなさい、貴女達は立派ですぐれた女性だ」⁴⁷と彼女達の働き姿を称賛した。このように、坂口は未亡人が「母親」として子供に身を捧げることを称賛しつつも、女性の内面に潜む「女としての欲望」や主体性にも目を向けていたことを示している。したがって、ハツエがロポウの子どもへの「憎しみ」は、未亡人

⁴⁴ 「戦争未亡人」という言葉は、広義的に第二次世界大戦の犠牲者の妻とする。特に戦没者、戦災者の妻を指す言葉である。(川口恵美子(1996)「戦時から戦後へかけての『戦争未亡人』の生活と意識」、『生活学論叢』第1巻、日本生活学会、p.42)

⁴⁵ 同注41前掲論文、p.70

⁴⁶ 同注39前掲書、p.220

⁴⁷ 坂口禪子(1955年9月23日)「スタンドすぐれた女性」『熊本日日新聞』、朝刊6面

が「母親」として生きることを強制され、「女性」としての欲望が否定されることへの苛立ちだと考えられる。

以上の考察から、ロポウのみならず、ハツエも「戦争未亡人」として考えれば、彼女がロポウに反映した性欲表現は、実は彼女自身の意識の投影で、「戦争未亡人」の性欲問題がハツエによって強調されていると考えられる。では、もう一人の語り手の「私」はどういう風にハツエの性欲表現を捉えているのだろうか。

2. 「私」とハツエの合作の意味

先行研究では「蕃婦ロポウの話」を「私」とハツエの合作だと論じてきた。しかし、この合作が持つ意味についてまだ考察する余地がある。まず、小説の中では、ハツエと「私」は時々価値観が対立している。例えば、「私」が最初にロポウの年齢について尋ねたところ、ハツエは「不快そうに眉をしかめ、誰が、いつ、どこで生まれたか、というようなことはその者の生涯と何も関係はないのだ」(p.325)と内地人の浅はかさを叱った。また、ロポウが入れ墨で醜くなつたと語ったハツエに、「私」は「それじゃあ、ロポウのノーカンへの初恋は万事終り、可哀想に失恋したね」と言い、ハツエに「そう思うのは内地人の心じや」(p.329)と叱責した。そして、ハツエがだらしないことで笑い続けた時に、「私」が腹を立てて「みつともないつたらない」と怒り、「ロポウの話をするがいい」(p.336)と冷たく言った。以上のように、ハツエがロポウの話を語っている最中、「私」は時々割り込んで質問する。そして質問の多くは日本人と原住民の価値観の衝突から生まれたものである。言い換えれば、「私」とハツエはそれぞれの意識をもっており、ハツエが原住民の視点からロポウの話を伝えようとするが、「私」はやはり日本人の価値観を用いて理解しようとしていると考えられる。

しかし、ハツエが性欲について語る場合、「私」は常にその告白を日本人の眼差しで判断せずに共感した。例えば、ハツエがもう一度夫に抱かれたいと言った時、「私」は「それを不潔といえるどんな倫理ももちあわせず、唯あわれにいじらしく、ハツエに、ロポウのことをきくことさえ忘れてた」(p.349)と感心した。また、ロポウが片山に抱かれて、「魔法にかけられたようにおの

れを忘れてた」（p.358）ようになり、性に対する欲望を表したと聞いた時、「私」もそれに納得できたのである。要するに、日本人の価値観でハツエの言動を評価する「私」が、女性として、特に性欲の側面においてはその価値観を一時的に置いて、ハツエとロポウに共感したのである。ここからも、第2節で論じた女性に対する分断支配が見られる。千田有紀（2003）によれば、女性は「同じ女という普遍性を共有しながら、悪らつきわまる政治によって、直接的に同じ女と言い得ぬ程に分断されている」⁴⁸のである。この論点に沿えば、「私」とハツエは植民地という政治形態によって、植民—被植民の関係に組み込まれたが、性欲においては同じ女性として共感できたと言えよう。このように、坂口は「私」という日本人女性の視点を通じて、異なる文化や民族の女性たちの経験を共感的に表現しようとしていると考えられる。

大口勇次郎（2014）は戦後の雑誌における記者と未亡人の対談から、当時の社会は未亡人に対して特別な道徳を求め、性において普通の女と差異をつけようとしたことを指摘している⁴⁹。つまり、戦後においては未亡人の性が厳しい目を向けられていたが、坂口は未亡人であるハツエの性的欲望の表現を描き、それに対する「私」の共感を書き出すことで、未亡人もまた一人の女性として性的欲望を持つ存在であることを認めていると考えられる。

第5節 結び

本章では、ジェンダーの視点を通して「ビッキの話」「ルピの話」「蕃地のイヴ」と「蕃婦ロポウの話」を考察してみた。まず、第1節では「ビッキの話」におけるビッキと野村の男性像を通して、植民地支配と男性性の関係性について考察した。ビッキが日本名を通じて、一人の人間としてのアイデンティティを回帰するところから、植民地支配による原住民の主体性の剥奪が見られる。また、ビッキが障害によって狩猟ができないことは、植民地支配によって原住民男性が経済的主体性を剥奪された象徴だと考えられる。野村の男性像について、彼は最初支配者としての優越意識を持っていた人物であるが、敗戦後ビッキとの立場の転換から、敗戦による植民—被植民の関係性の崩壊が象徴的に表現されている。一

⁴⁸ 同注29前掲書、p.63

⁴⁹ 同注14前掲書、p.389

方で、植民地支配が崩壊され、原住民が解放されたように見えるが、支配による傷は容易に消えるものではなく、個人に深く刻み込まれたままであることも見られる。このように、「ビッキの話」は植民地支配下における被植民者の男性性の抑圧と植民地支配の傷跡を描き出した作品として読むことができる。

次に、女性を主体とした小説「ルピの話」「蕃地のイヴ」と「蕃婦ロポウの話」の三つの作品について考察した。第2節では、ルピとテワスの女性像について考察した。ルピは入れ墨を強いられ、「妻」という女性性役割から逸脱できず、また母親に男性を満足させる女性になることを求められた。しかし、ルピはこれらの性役割を全うできずに最後は自らの命を絶ったが、死後も入れ墨だけが生きているように見えるところから、彼女は家父長制の社会から逃れられず、男性中心の社会制度に抑圧された女性として描かれている。一方で、「白面の女」であるテワスは、植民者男性の影響を受けたことで、入れ墨が象徴する伝統的な「妻」という性役割から外れることになった。彼女は男性から「性的対象」として見られ続けたため、結果的には男性の支配から完全に解放されたとは言えない存在である。しかし、テワスはたとえ抑圧されても、可能な限り自分の存在価値を見出して、自分なりの生き道を見出した女性として描かれている。このように、「妻／娼婦」の女性像を描くことで、坂口は家父長制社会による男性の分断支配を表現し、社会制度に抑圧された女性を表現している一方、厳しい社会の中で、女性が自身の生き方を模索し、主体性を保とうとする姿勢も書き出している。

また、第3節「蕃地のイヴ」では、母親のルピ・ナガイと娘のハバオについて考察した。ルピ・ナガイは自らの出産時に相当の苦痛を経験したことから、娘を女性の「産む性」から解放させようとしたが、彼女が「産む性」を「女としての全て」と見做したことで、自分自身もまだ「女=母」という社会規範に束縛されていることが窺える。一方で、娘のハバオは元々母親の願い通りに「産まない巫女」になろうとしたが、植民者男性との出会いをきっかけに、自分の女性としての主体性について再考するようになった。最後に、第4節「蕃婦ロポウの話」では、語り手のハツエを中心に考察した。ハツエの意識の反映を通して、戦後における未亡人の性の問題が提起されていると考えられる。また、日本人女性の「私」とハツエは、植民者と被植民者の視点の衝突が散見されるが、ハツエの性欲表現

に「私」が共感したことは、民族や文化の違いを超えた女性意識の連帯の可能性を示唆しているだろう。

このように、坂口露子は男性と女性を主体に書く際に、異なる筆致で書き分けていることが窺える。男性を主体とした「ビッキの話」では、植民地支配による男性性の抑圧と解放を中心的なテーマとして描いている。一方で、女性を主体とした作品群では、家父長制社会における女性の性役割や女性に対する抑圧を表現している。女性を主体とした小説における植民者男性が女性たちの運命を左右する描写を通じて、坂口は宗主国〈男〉を象徴する日本人男性の登場により、植民地〈女〉を表す植民地女性が男性主導の社会制度から抜け出すことの困難さを表現している。したがって、坂口は植民地における「宗主国〈男〉対植民地〈女〉」という権力関係を用いて、戦後の日本社会における性差による抑圧を強調していると考えられる。

一方、坂口は能動的な女性像、例えば「ルピの話」におけるテワスや、「蕃地のイヴ」におけるハバオを通して、家父長制社会においても、女性が性役割を受容することが必ずしも従属を意味するわけではなく、むしろそれを通じた主体性の獲得の可能性を書き出しているのである。言い換えれば、坂口は原住民女性の表象を通して、日本社会における従来の「女らしさ」にとらわれず、積極的な女性こそが生き道を開くことができると示唆しているだろう。そして、「蕃婦ロポウの話」における日本人の「私」と原住民のハツエを通して、植民地という政治形態によって分断された女性の連帯関係の可能性を示唆している。このように、坂口は蕃地という空間を借りて、戦後日本社会の女性に対する性差の抑圧のみならず、植民者と被植民者、民族や階級の立場の差異を超えて、同じ「女性」であるという共通の立場を示していると考えられる。

終章



本論文では、坂口禪子の作品における蕃地の表象を考察した。まず、第1章では、純血論の視点から「時計草」と「蕃地」における混血児の表象を考察し、戦時中と戦後の坂口の意識変化を考察した。結果として、戦時中に書かれた「時計草」では、混血児が純血論に基づく「優生学的同化政策」の一環として描かれているのに対し、戦後の作品「蕃地」では、純血論によって混血児が直面した問題を提示している。このように、戦時中では純血論を通して植民地政策を肯定的に捉えた一方、戦後では純血論を通してその問題点を暴き、被植民者が受けた影響に注目する姿勢が見られる。

「時計草」において、玄太郎と錦子が純血論に基づいて皇民化に協力する姿勢を示しているため、純血論が皇民化政策を正当化する機能を果たしていると考えられる。また、混血児の山川純は、自分の混血を山地の指導者となるための使命として捉えていることから、彼が植民者側の立場に立っていることが窺える。さらに、坂口は政略結婚を皇民化運動の一手段として書いているが、史実では政略結婚は単なる統治上の便宜を図るための手段に過ぎなかった。戦時下の検閲、言論制限政策を考えれば、坂口が政略結婚を意図的に皇民化運動と結びつく可能性が高いと考えられる。一方で、10年後の「蕃地」では林田純の混血児としての葛藤を想像し、または現実にあった出来事を自分の想像に加えて虚構の内容を作りあげ、皇民化運動の破綻を書き出している。したがって、混血児問題を通して、戦時中と戦後における坂口の蕃地の表象が大きく変容し、戦時中は皇民化運動に結びついたが、戦後には歴史の痛みを提起する場となったといえよう。このように、戦時中から戦後にかけて混血児をめぐる両作品は、支配的イデオロギーからの解放を表している。

第2章では、霧社事件の史実を踏まえ、「霧社」と「タダオの死」における虚構の人物像と人間関係から、坂口の霧社事件に対する考え方を明らかにした。まず、「霧社」における佐塚巡査と花岡兄弟の虚構した親子関係を考察した。佐塚の人物像から、理蕃警察の「慈愛なる父親」という一面が見られる一方、植民者としての上位意識も表現された。一方で、花岡二郎が「子ども」という認識を受け入れ、日本の教育を通じて自己変革を図ろうとした。このような感情は、史実

や坂口の知人である中山清の実例と一致しているが、佐塚と花岡兄弟の虚構の「父子関係」を通して伝わることで、坂口はリアルに理蕃警察と原住民の関係性を捉えながら、中に潜む不均衡な力関係も書き出したと考えられる。また、「霧社」における儀三郎とテワスの政略結婚の虚構について考察し、儀三郎を通して植民者と被植民者の不信感を表した一方で、儀三郎のような植民者も、実は国家の利益のために抑圧された個人であることを表現した。その一方で、テワスがモーナの指示に従い儀三郎と結婚し、自分の幸せを犠牲にした描写からも、植民地支配における「群体／個人」の対立関係が見られる。次に、「タダオの死」における樺沢とタダオの父子関係について考察した。少年のタダオが「父親」の樺沢にアイデンティティについて相談した場面から、理蕃警察が「父親」として原住民を導くことは、同化政策を成功させるための重要なプロセスであったことがわかる。しかし、樺沢の否定的な言葉とタダオの葛藤から、同化政策の失敗と影響が示唆されている。また、模範人物の花岡一郎の心理描写とビホ・サッポの虚構を通して、これら撫育政策や膺懲の結果が、個人に不幸をもたらしただけでなく、霧社事件の必然性につながったことが示唆されている。

まとめて言えば、「霧社」と「タダオの死」における人物像の描写を通して、坂口は事件の全体像よりも、理蕃政策が個人に及ぼした影響に注目していたことが明らかとなった。両作品における親子関係の描写や、「霧社」における政略結婚と「タダオの死」における花岡一郎とビホ・サッポの葛藤から、植民地支配に対する批判が見られる一方、坂口は個々の人物の視点から霧社事件を書き直すことで、その時代を生きた人々の葛藤を表現したと考えられる。

第3章では、坂口の随筆を踏まえつつ、ジェンダーの視点から「ビッキの話」「ルピの話」「蕃地のイヴ」「蕃婦ロポウの話」の4篇の作品における人物像を考察した。まず、男性を主体とした「ビッキの話」におけるビッキと野村の対照的な男性像を考察した。ビッキの男性像から、植民地支配によってアイデンティティや経済的主体性を奪われた原住民男性の姿が見られる。一方、野村の男性像から、植民者としての優位な立場と、敗戦によって崩壊していく植民—被植民の関係性が読み取れる。

次に、女性を主体とした「ルピの話」「蕃地のイヴ」と「蕃婦ロポウの話」について考察した。「ルピの話」では、ルピとテワスという対照的な女性像を考察

した。ルピは入れ墨によって「妻」という女性性役割を強いられたが、社会に期待された役割を全うできず自殺したことから、彼女は家父長制の社会に抑圧された女性として造形されていることがわかった。一方で、テワスは「妻」という女性性役割からはみ出されても、男性の支配によって娼婦的存在となつたため、彼女も家父長制の社会に抑圧された女性だと表現されている。しかし、彼女が能動的に「性の自由」を見出し、性を通して男性を支配しようとする姿勢から、テワスは家父長制社会の中で自らの道を開こうとした女性ともいえよう。

また、「蕃地のイヴ」では、「ヘソ」が象徴する産む性をめぐって、母親のルピ・ナガイと娘のハバオについて考察した。ルピ・ナガイには難産の経験があるため、女性の「産む性」という性役割から娘を解放させ、ハバオを「産まない巫女」にしようと思った。しかし、「産む性」を女性の全てとしたルピ・ナガイの認識は「女=母」という価値観に囚われているとも言えよう。一方で、娘のハバオは植民者男性との出会いをきっかけに、自分で「産む性」を持つ伝統的な女性の性役割に回帰し、男性主導によって「母親」になることを決めた。ハバオは「ルピの話」のテワスのように、家父長制社会から逃れることができないが、自分の意思を持つことで、生きる道を切り拓こうとした女性に造形されたと考えられる。

最後に、「蕃婦ロポウの話」では、語り手のハツエがロポウに対する考え方を通して、彼女の意識反映について考察した。戦争で夫を亡くした未亡人であるハツエは、自身の性欲に基づいてロポウの心境を理解しようとした。日本人女性の「私はロポウの話を聞く際、時々日本人の価値観を持って質問し、ハツエの言葉を遮ることがあったが、ハツエが性欲について語る場面では、常に共感して耳を傾けた。このように、性欲という普遍的な経験を通して、植民地支配という政治形態を越えた女性同士の連帯の可能性が示唆されている。同時に、戦後社会における未亡人の性をめぐる問題も提起されているのである。

まとめてみれば、坂口は男性と女性を描く際に、異なる書き方で表現していることがわかる。男性を主人公とした「ビッキの話」では、植民地支配下での男性性の抑圧と解放に焦点を当てている。一方、女性を主人公とした作品群では、家父長制社会における女性の性役割と抑圧の実態を描いている。特に、蕃地という植民地を通して、宗主国〈男〉が植民地〈女〉に対する不均衡の力学が強調され、女性が受けた性差による抑圧をより強調されている。

以上の分析をまとめると、坂口禪子が蕃地小説を通して表現したいのは、植民地支配がそこで生活した人々（植民者も被植民者も）にもたらした抑圧だけでなく、蕃地が単なる植民地にとどまらず、人々がそれぞれ愛情や葛藤を抱えながら生きる場であったことだろう。また、「虚実混交」の手法によって、これらの小説は「フィクション」として捉えつつも、読者に歴史的事実や当時の社会的課題を想起させ、現実と結びつける役割を果たしていると考えられる。第1章から分かるように、彼女は言論制限された中で「時計草」を書き、政略結婚を皇民化運動の一環として捉えているが、10年後に書いた同じテーマの作品「蕃地」では、混血児の視点を中心に植民地政策に翻弄された林田純の葛藤を表現している。また、霧社事件を主軸とした作品「霧社」と「タダオの死」では多くの歴史人物を参考にしているが、その物語と心理描写はすべて虚構であり、これらの虚構からは植民地という政治形態において、植民者も被植民者も抑圧されていることが読み取れる。そして、ジェンダーに関する小説らには、原住民男性と敗戦による日本人男性の主体性の喪失が描かれており、原住民女性が日本人男性に翻弄される描写がある一方、女性たちが葛藤を抱えながら自ら生き道を開こうとした。このように、坂口禪子は歴史言説に記載されなかった人々の言動、関係を描写し、それらの虚構を通して、蕃地の「真実」—蕃地に刻まれた植民地支配の傷跡と、そこに生きた人々が抱えた葛藤を書き出している。

なお、第1章と第2章で論じたように、「時計草」「蕃地」「霧社」「タダオの死」では歴史人物や歴史上の事件が書かれているため、坂口が人物像の再現や人間関係の描写において、個々の葛藤を作り出したものの、主題やモデルに制約されていたため、植民地支配に対する反省の色が強く見られると考えられる。しかし第3章で取り上げた4つの作品では、坂口が歴史上の人物を主体としない場合、より自分なりの想像の空間を創り出したことが窺える。戦後最初の作品「ビッキの話」では、ビッキと野村の立場の転換を通して、植民者の敗戦後の心境と被植民者の解放を垣間見ることができる。特に、女性を主人公とした3つの小説では、植民地批判の枠組みから脱却し、馴染みのある舞台である蕃地を利用し、戦後のジェンダー問題を表現している。例えば、「ルピの話」と「蕃地のイヴ」では、家父長制社会に生きる女性の困難さと、あえぎながらも自らの道を切り開こうとする女性が描かれている。また、坂口は「入れ

墨」や「蕃地の慣習」といった記号を使って、女性が課せられた性役割を強調するとともに、原住民女性の能動的な表象を借りて、日本社会における理想とされた受動的な女性像を問い合わせた。そして、「蕃婦ロポウの話」では、日本人と原住民の女性の連帶関係を通して、戦後日本社会の未亡人に対する厳しいモラルに対する批判が書かれている。このように、坂口禪子が架空の物語を書く際、特に女性を主体として書く時に、単に植民地批判を表すのではなく、戦後におけるジェンダーの問題を植民地におけるジェンダー化の力学（宗主国を男とし、植民地を女とすること）、また蕃地にある人々の表象を通して、より強調したことが窺える。

本論文では三つの視点を通して、坂口禪子の蕃地の表象を考察してきたが、坂口禪子以外に、他の作者が書いた蕃地表象との比較または至らなかった。例えば、同じ女性作家の真杉静枝も「サヨンの鐘」において原住民女性について描写し、ほかに大鹿卓など蕃地を書いた作家がいる。そこで、蕃地で実際に生活した坂口禪子と、彼らが描写した蕃地の表象の違いについて、まだ考察する余地がある。それらを今後の課題としたい。

テキスト及び参考文献



テキスト

1. 「蕃地の女—ルピの話—」は、『別冊小説新潮—第10巻第10号』(1956年)に掲載するものである。
2. 「蕃地」「蕃婦ロポウの話」「蕃地のイヴ」「タダオ・モーナの死」「ビッキの話」は、『蕃社の譜—坂口れい子作品集①』(岩崎努編、コルベ出版社、1978年3月)に掲載するものである。
3. 「霧社」は、『霧社—坂口れい子作品集②』(岩崎努編、コルベ出版社、1978年6月)に掲載するものである。
4. 「時計草」は、『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』(中島利郎・河原功編、緑蔭書房、1998年7月)に掲載するものである。

※ 資料を引用した際に、旧字体の漢字は原則として通行の字体に改めた。また、読みやすさを考慮して、適宜に句読点を加えた。

参考文献（著者名五十音順）

【単行本・叢書】

1. 石川啄木 (1966) 『日本詩人全集』、新潮社
2. 飯田裕子 (2016) 『彼女たちの文学—語りにくさと読まれること—』、名古屋大学出版会
3. 飯田祐子・小平麻衣子編 (2023) 『ジェンダー×小説ガイドブック—日本近現代文学の読み方』、ひつじ書房
4. 上野千鶴子 (2006) 『女という快楽』、勁草書房
5. 上野千鶴子 (2013) 『女ぎらい—ニッポンのミソジニー』、紀伊國屋書店
6. 大口勇次郎 (2014) 「総力戦とジェンダー」 大口勇次郎、成田龍一、服藤早苗 (編) 『ジェンダー史』、山川出版社
7. 小熊英二 (1995) 『单一民族神話の起源—〈日本人〉の自画像の系譜』、新曜社
8. 河原功 (1997) 『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点—』、研文出版
9. 駒込武 (1996) 『植民地帝国日本の文化統合』、岩波書店

- 
10. 高永清 (1988) 『霧社緋櫻の狂い咲き—虐殺事件生き残りの証言—』、教文館
 11. 近藤正己 (1992) 『近代日本と植民地2 帝国統治の構造』、岩波書店
 12. 近藤正己 (1996) 『総力戦と台湾—日本植民地崩壊の研究』、刀水書房
 13. 吳佩珍 (2022) 『福爾摩沙與扶桑花的邂逅—日治時期台日文學與戲劇流變』、臺大出版中心
 14. 斎藤環 (2008) 『母は娘の人生を支配する—なぜ「母殺し」は難しいのか』、日本放送出版協会
 15. 下山一 (2011) 『流轉家族—泰雅公主媽媽、日本警察爸爸和我的故事』、遠流出版社
 16. 鈴木作太郎 (1932) 『台灣乃蕃族研究』、南天書局
 17. 高木博志(1994) 『国民国家を問う』、青木書店
 18. 戴國輝 (1981) 「霧社蜂起事件の概要と研究の今日的意味」『臺灣霧社蜂起事件—研究と資料』、國史館
 19. 台湾總督府編 (1999) 『詔敕.令旨.諭告.訓達類纂（二）』、成文出版社
 20. 垂水千恵 (1995) 『台湾の日本語文学—日本統治時代の作家たち一』、五柳書院
 21. 千田有紀 (2003) 「帝国主義とジェンダー ——『資料 日本ウーマン・リブ史』を読む」、加納実紀代（編）『リブという革命—近代の闇をひらく』、インパクト出版会
 22. 鄧相揚 (2000) 『風中緋櫻—霧社事件真相及花崗初子的故事』、玉山社
 23. 鄧相揚 (2001) 『抗日霧社事件をめぐる人々：翻弄された台湾原住民の戦前・戦後』、日本機関紙出版センター
 24. 中島利郎 (1998) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』、緑蔭書房
 25. 中村ふじゑ (2000) 『オビンの伝言—タイヤルの森をゆるがせた台湾・霧社事件』、梨の木舎
 26. 林えいだい (1998) 『証言：台湾高砂族義勇隊』、草風館
 27. 朴裕河 (2011) 『植民地文化研究—特集植民地主義と女性』、植民地文化学会、不二出版
 28. 朴裕河 (2016) 『引揚げ文学論序説—新たなポストコロニアルへ』、人文書



29. 平野謙 (1975) 『昭和文学史』、筑摩書房
30. フェイ・阮・クリーマン (2007) 『大日本帝国のクレオール〈植民地期台灣の日本語文学〉』、慶應義塾大学出版会
31. 藤野豊 (1998) 、『日本ファシズムと優生思想』、かもがわ出版
32. 保羅・D・巴克萊 (2020) 『帝國棄民：日本在臺灣「蕃界」內的統治』、國立臺灣大學
33. 水田宗子 (1982) 『ヒロインからヒーローへ—女性の自我の表現』、田畠書店
34. 山路勝彦 (2004) 『台灣の植民地統治—〈無主の野蛮人〉という言説の展開』、日本図書センター
35. 米本昌平、松原洋子、櫻島次郎、市野川容孝ら著 (2000) 『優生学と人間社会—生命科学の世紀はどこへ向かうのか』、講談社
36. 林呈蓉 (2010) 『皇民化社會的時代』、台灣書房

【機関雑誌・論文・新聞資料】

1. 王曉芸 (2001) 「坂口禪子の「時計草」を中心に—異民族への協力」『天理臺灣學報年報』第 10 号
2. 小笠原淳 (2015) 「坂口禪子の台灣蕃地小説とその系譜：戦中と戦後を通して」、『日本台灣学会報』第 17 号
3. 川口恵美子 (1996) 「戦時から戦後へかけての「戦争未亡人」の生活と意識」、『生活学論叢』第 1 卷、日本生活学会
4. 簡中昊 (2016) 「「還元」された野蛮人像：坂口禪子の「蕃地」文学に関する一考察」『天理臺灣學會年報』第 25 号
5. 楠井清文 (2014) 「坂口禪子「蕃地」小説の世界—熊本時代の執筆活動を中心にして」、『論究日本文学第 100 期』
6. 河野密 (1931) 「霧社事件の真相を発く」、『中央公論』46(3)三月號
7. 伍碧雯 (2007) 「德意志民族的優生學—德國種族衛生的起步與初期發展」『國立政治大學歷史學報』第 28 号
8. 吳佩珍 (2011) 「血液的「曖昧線」—台灣皇民化文學中「血」的表象與日本



近代優生學論述」『台灣文學研究學報』第 13 期

9. 坂口禴子（1954 年 8 月 18 日）「モデルのある小説」『熊本日日新聞』、朝刊 4 面
10. 坂口禴子（1955）「蕃地と終戦」、『日本談義』復刊第 57 号、p.63
11. 坂口禴子（1956 年 4 月 27 日）「スタンド 女らしさ」『熊本日日新聞』、朝刊 6 面
12. 坂口禴子（1956 年 6 月 29 日）「スタンド 売春禁止法」『熊本日日新聞』、朝刊 6 面
13. 坂口禴子（1960）「事実と眞実」『詩と眞実』第 130 号
14. 坂口禴子（1961）「蕃地作者のメモ」『文学者』第 4 卷第 4 号
15. 坂口禴子（1969）「一九四五年の彼ら—霧社の思い出—」『中国』第 69 号
16. 坂口禴子（1978）「"蕃地"との関わり」『霧社—坂口禴子作品集②』、コレベ出版社
17. 下村作次郎（2004）「台灣原住民族文学史の初步的構想」『天理台灣學會年報』第 13 号
18. 星名宏修（2001）「「血液」の政治学：台湾「皇民化期文学」を読む」『日本東洋文化論集』第 7 号
19. 彭妍蓁（2010）「坂口禴子「蕃地」論」『千里山文学論集』第 83 号
20. 彭妍蓁（2013）「坂口禴子「蕃婦ロポウの話」論」『戦争の記録と表象：日本・アジア・ヨーロッパ』、関西大学出版部
21. 姚巧梅（1997）「坂口禴子と台湾」『曙光』第 8 卷
22. 林慧君（2006）「坂口禴子小説人物の身份認同一以鄭一家、時計草為中心」『台灣文學學報』第 8 期』
23. 李文茹（2006）「ジェンダーから見た台湾原住民の「記憶」と「表象」—霧社事件を中心に」『社会文学』第 23 卷
24. 李文茹（2010）「植民地の和解のゆくえ」『異文化としての日本：内外の視点』、法政大学国際日本学研究センター
25. 李文茹（2015）「坂口禴子の台湾蕃地作品における女性像と植民地的ノスタルジアの政治性」『社会文学』第 41 卷



【学位論文】

1. 石丸雅邦 (2008) 『台灣日本時代的理蕃警察』 (國立政治大學博士論文)
2. 簡中昊 (2015) の博士論文「近代日本の台灣原住民認識—作家たちが見た「野蛮人」—」 (総合研究大学院大学博士論文)
3. 小辻菜々子 (2016) 「坂口禪子的霧社事件三部曲—〈霧社〉、〈達道・莫那之死〉、〈蕃婦羅波烏的故事〉」 (國立政治大學修士論文)

【インターネット】

1. 国立国会図書館「第 75 回衆議院本会議第 25 号」、<https://teikokugikai-i.ndl.go.jp/simple> , (参照 2025-07-03)
2. 台湾総督府警務局 編『理蕃誌稿』 第 1 編 第 2 編,台湾総督府警務局,大正 7-10.
10. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/944262> (参照 2025-07-03)
3. "はっこう-いちう [ハックワウ‥] 【八紘一字】", 日本国語大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com> , (参照 2025-07-03)